女人藝術

昭和四年二月一日發行（毎月一回發行）

自傳的戀愛小說號



三上於菟吉・長篇小說集 第一卷

現下長篇界の覇者三上氏が會心の長篇を集めて傑作全集を作る。第一卷は東日・大每に連載され、更に映畫となつて、目下異常のセンセーションを起しつゝある『激流』となす。

激流

著者曰く

これは從來の私の作に比べて、より奔放、より自由に、大に趣の變つた世界を描かんとする決心の下に筆を執つたものである。人間の心の奧に巢食ふ欲望の種々な顯現への探求は、私として止むに止まれぬ熱情で、努めて現實の社會相に觸れ、努めて人情の根柢を突きとめて見たいのが我が本願である。私は此の度こそ死力を盡くす覺悟だ――かう執筆前に宣言した此の『激流』は果して讀者の期待に酬い得たらうか何うか。切に熱讀を待つ次第である。

日活超特作映畫

伊東深水氏畫・四六判最上製・全一冊・美本 壹圓五拾錢 郵送料拾貳錢

東京市牛込區矢來町
東京一七四二番
新潮社
電話牛込・八〇六・八〇八
長八〇五・八〇七・八〇九

片岡鐵兵原作

生ける人形

内田吐夢監督

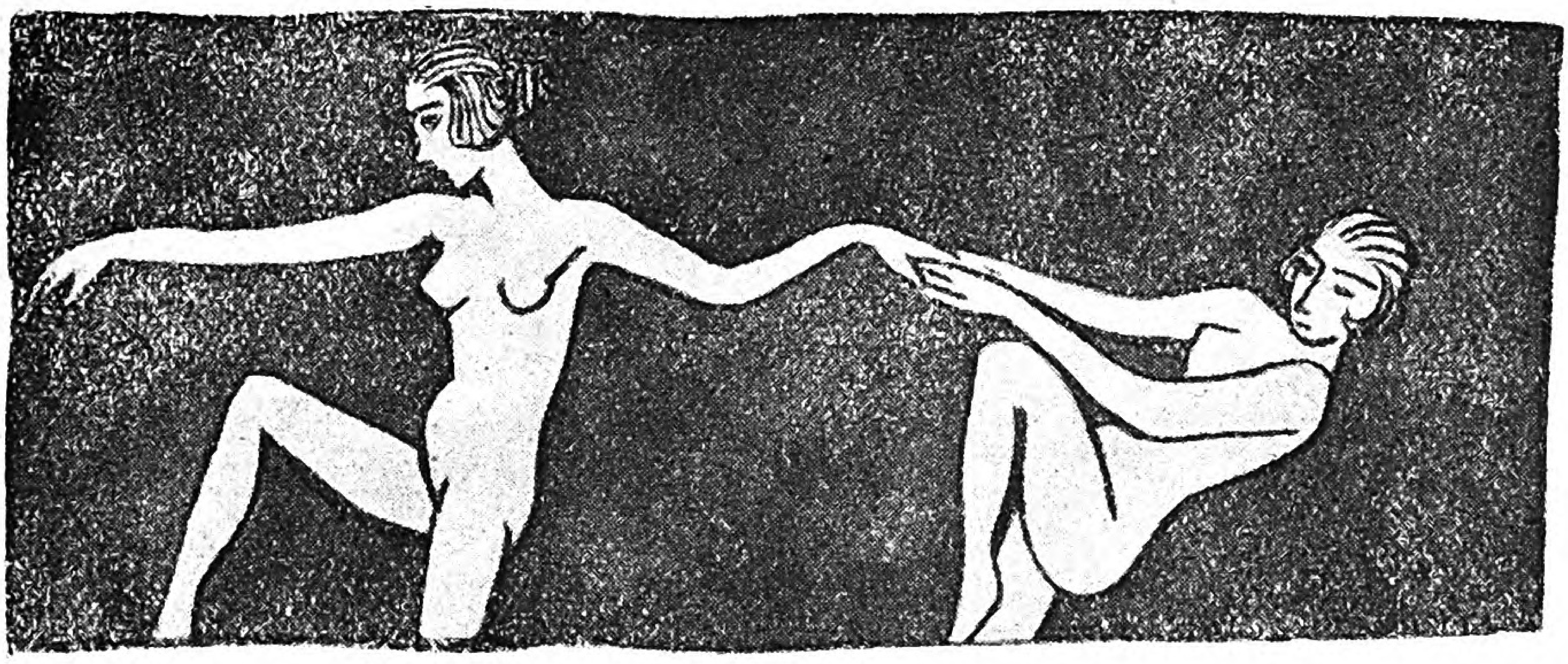
脚色 小林正　撮影 松澤又男





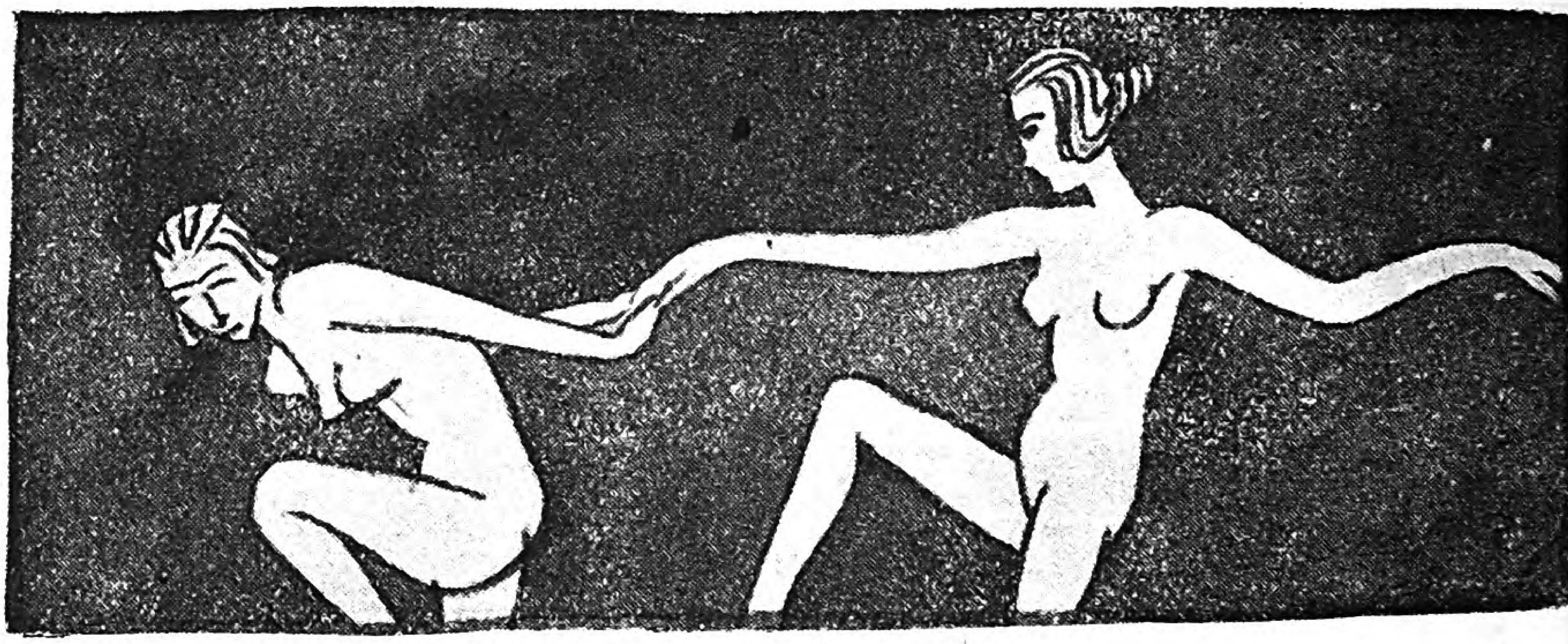
小杉勇　入江たか子
高木永二　築地淚子
三桝豐
主演

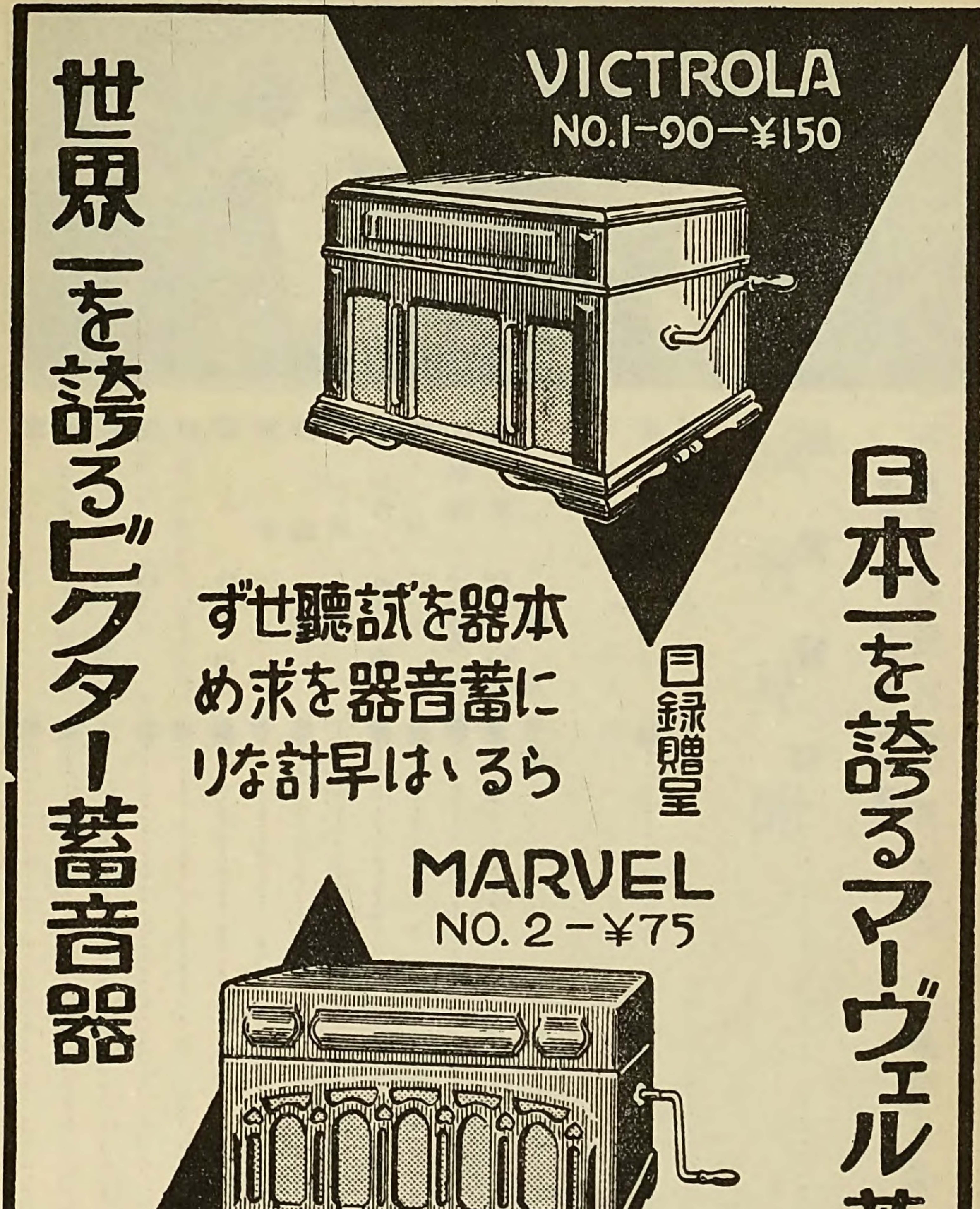
日活特作



女人藝術三月號目次

—禁轉載—





世界一を誇るビクター蓄音器
VICTROLA
NO.1-90-¥150
日本一を誇るマーヴェル蓄音器
本器を試聴せず
に蓄音器を求め
らるゝは早計なり
目録贈呈
MARVEL
NO. 2 - ¥75
ビクター大売捌元
東京銀座三丁目
十字屋楽器店



断章

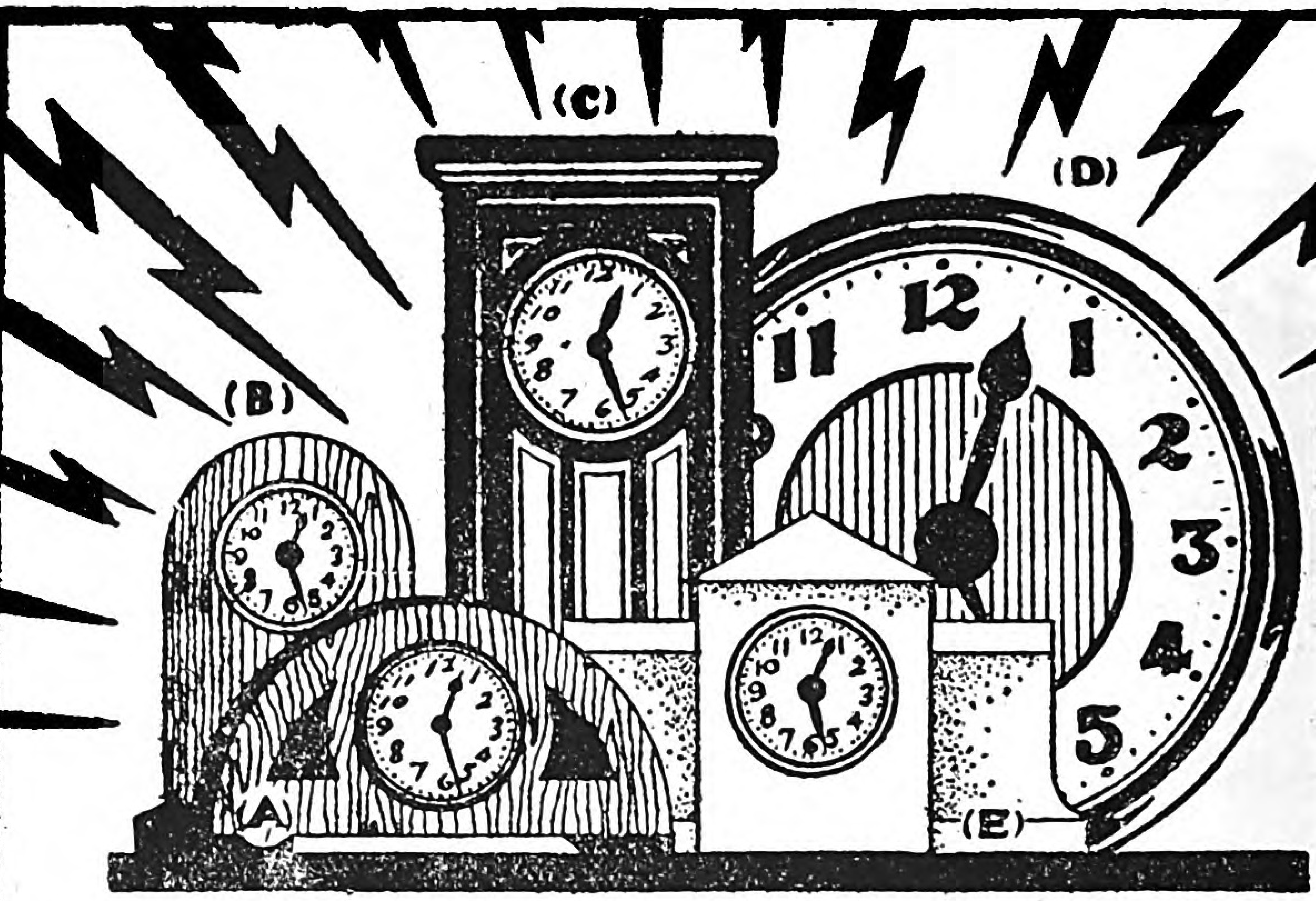
マダム・ド・ノワイユ

そうして
死人たちにお告げ
悩ましい日の夕
泉のさわやかな側に
伏せつて
あたしが死人達の
愛を欲したことを
そうして
望しい彼等の影を
抱きしめたことを!



ルイ・十三世后、オースタリヤのアンナ・ドウトリツシユ

——リユベンズ筆——



ナゼ電氣時計は狂はないか？

（1）彈機よりは電力の方が機械の動作を均齊にする故に！

（2）短時間しか機械を動かす力の無い彈機よりは長期（少くも二年間）原動力を持續する電力の方が機械の各部の動作を圓滑にし且つ和らかにする故に！

（3）時計の狂ふ最大原因は當然免ぬかるべからざる彈機を巻く時間の不正確と巻き方の強弱の不均等であるが、電氣時計は電池の壽命の續く限り（少くも二年間）此禍因から免かれるが故に！

官公衙學校病院、旅館倶樂部大商店大工場等の大建造物は一個の親時計に數個乃至數十個の子時計を配するブリエ式電氣時計を、個人の家庭小事務所は單個のアトウ式又はブウル式電氣時計を準備して時間の規律を正しくし生産或は事務の能率を増進するを得。

佛國製 アトウ式 電氣時計

（A）木製マホガニ塗置時計　價貳拾八圓
（B）木製マホガニ塗盆時計　價參拾圓
（C）木製仕上スリゲル掛時計　價五拾五圓
（D）金枠黑塗十吋丸掛時計　價參拾六圓
（E）大理石置時計　價五拾五圓

◇此の他新意匠の優秀品多種新着・型錄御申越次第送呈

ブリエ式親子電氣時計（子時計十個乃至數十個附）詳細は御申越次第型錄及見積書送呈

納入先一斑

◇富士製紙會社　◇第一徵兵保險　◇外國語學校　◇府立工藝學校
◇東洋紡績會社　◇宗吾靈堂　◇國民中學會　◇明正小學校
◇松屋呉服店　◇市田商店　◇府立第三中學校　◇番町小學校
◇日本酸素會社　◇麴町區役所　◇上六小學校　◇早稻田小學校
◇胃腸病院　◇赤坂區役所　◇麴町小學校　◇學習院

此他三百有餘

東京市銀座尾張町　**天賞堂本店**　日本橋支店　大阪支店




鈴木春信画

三越の婦人子供洋服

◆四階中央館に各種陳列◆

三越獨特の新意匠考案に成る清新輕快なる春の婦人子供洋服を初め附屬品等を豐富に取揃へ御高覽に供します何卒御用命を願上げます

◆今春流行の婦人子供服の主なるもの

春向婦人服（薄絨ワンピース）…廿五圓位より
婦人用スプリング・オーバー…三十圓位より
女學生用通學服（薄絨）……十五圓位より
同　富士絹ブラウス……四圓五十錢位より
同　クレバネット オーバー…廿四圓位より
女兒用通學服（七八歲向水兵服）……十三圓位より
同（同ジャムパードレス）……十二圓位より
男兒用通學服（七八歲向）……八圓位より
春向女兒洋服（三四歲向）……七圓位より
同　男兒洋服（同　）……七圓位より



三越

◆東京日本橋◆


流行の粋！瀟洒なスプリングドレス！
春の生地は豊富に着荷いたしました
洋装の御註文はオーキへ！

女人藝術

三月號





モスクヷの婦人代表會議に參集した東方婦人代表者（一、タタール、二、ウズベキスタン、三、アザヤルバイザヤン、四、トルキメニスタン、五、モンゴール其他）中央レーニン夫人、ダムマ・クルプーシカヤ

無産婦人デー

三月八日の國際婦人デーは、世界のプロレタリア婦人の祝祭日である。

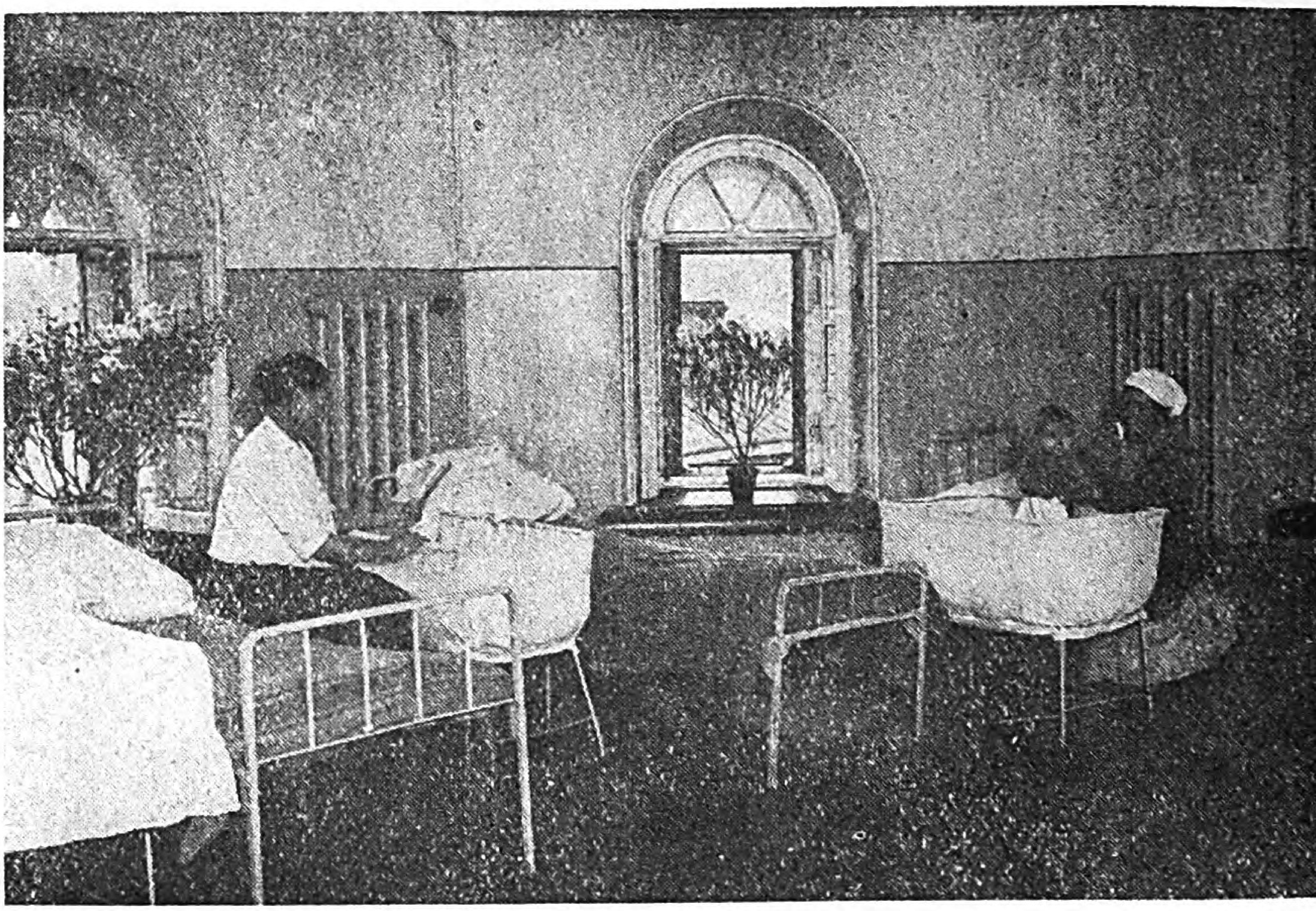
この日は、一九一〇年アメリカの社會主義婦人によつて、プロレタリア婦人の敎化訓練の日と定められた。然るにロシア革命に當つてその日が記念すべき出來事を生んだので、爾來この日は二重の意味をもつて世界の無産階級に祝福されること丶なつた。

一九一七年の婦人デーに當つて、ロシアの婦人勞働者は長い間、たへ忍んで來た戰爭と飢餓との重壓をはねて起き上つた。彼女たちは戰爭中止・打倒專制政府の要求をもつて街頭に出た。

『パンを與へよ、パンを與へよ！』

かう叫ぶ彼女たちの聲は、パンと燃料の缺乏になやんでゐる一般婦人の注意を引いた。この婦人たちは、眞劍に戰はんとする意氣をもつて勞働婦人の集團の中に續々と參加した。そして集會と街上とを占領して、電車を止め製パン所を破壞した。

これがロシア革命の口火となつた。革命の波はひろがつて、凡ての勞働者が立つた。婦人デーの四日の後には專制政府が倒れてゐた。



國際婦人デーを記念するモスクワの「母の家」——家庭を失つた母とその子供

この日の記憶は、何物にもまさつて資本の重壓にくるしむ世界の婦人勞働者の心を暖めてゐる。前にプロレタリア婦人の敎化の日として區別されてゐたこの日が、今やロシア革命に參加した婦人の爲めの紀念の塔とはなつた。

したがつて、この日が大仕掛けに紀念されるのはロシアである。

ロシアでは、ゼンアトデルの手で、以後一年間に行はれる婦人運動のプログラムが發表される。都市と地方とを問はず、婦人は半日仕事から全部的に解放され、各種の紀念講演、集會等に參加する。婦人に關係ある新設の建物はこの日に開かれ、婦人の新聞雜誌は、特別號を發行する。

この日は、婦人の無產階級的自覺の程度のひくい中央アジアの邊境では、特に敎化的の意味をもつて盛んに行はれる。多數の婦人は、駱駝又は馬にのつて四五百ヴヲルストの道を、遠い支那の國境あたりからまで集つて來る。ある年の婦人デーには、これらの婦人の六千が、その隷屬の象徵である厚いヴエールをぬいだ。

しかしこの日が祝はれるのは、必ずしもロシアだけではない。無產階級の運動が進んだ形態をとつてゐる世界の各國で、無產婦人たちは、この日を祝してゐる。そして彼女たちがかゝげる多くの無產階級的なスローガンの中に、『勞農ロシアの支持！』があることはいふ迄もない。（市子）



鈴蟲の雌

中本たか子

赤電車の隅で、知子は破れた樂器のやうに聲を喉に詰らせ、頸を襟に埋めてゐた。車内は疎な人々の醉ひどれた吐息に滿たされてゐる。油つ氣のない知子の頭髮が、車體の動搖で顏の陰影を亂した。彼女は電車の進行で深海へ這入つて行くやうに感じ乍ら、その癖、空氣の壓力が稀薄になつて行くのを感じた。がつがつした呼吸で鼻孔を擴げ、車内の人達へ觀察眼を近づけた。

――雄共だ！　逞しい雄共だ！

胸一ぱい感激が湧いて、彼女に息詰りを感ぜしめた。今日一日街を步き廻つて紙風船のやうに縮んだ胃を抱へてゐることも忘れて。だが、その下から叱咤する聲がひびいた。內緣の良人秋田から置去りにされてもまだ異性へ胸を動かす自身を。

電車から吐き出されると、彼女を目がけて押し寄せて來る街路の氣流を突切つて、瘦せた肩を張り乍ら進んだ。街路を押し狹めた石造建築が、氷に蔽はれた峽江のやうに冷然としてゐる。葉を落し盡した街路樹が細く空氣を削る。

彼女は自分の形を追ひつゝ、反感と自嘲の唾をぺつぺつ吐いた。

橋を渡ると、家並は低くなつて街の威嚇が稍輕くなつた。代りに風壓が增して、彼女の痩軀を押倒しさうだ。此處は既に郊外の領域である。街の甃石道の切斷的な冷さに代へて、土の彈力と匂とが力強く彼女の鼻に押し寄せて來る。見れば、道の左側には繩張りして、掘り上げた土が堆く積んである。繩張りの中では、カンテラの光に浮んだいが栗頭とシャベルから投げる土とがリズミカルに動く。時々、きらりシャベルの先が光に氷結して閃く。

少し行くと、鼻先に冷い液體を感じた。掌を擴げると、冷い點が亂れて來た。雨だ。と思ふ間に、加速度に雨脚が加つて來て、彼女を包み込んだ。雨は風勢を加へて、屋根を、地上を、蕭々と蹄で蹴り立てゝ行く。その通路の邪魔物となつた彼女は、横顔をしたゝかに蹴られた襟を引締めて、彼女は這ふやうにして軒下を傳ひつゝ足を速めた。肩を透し襟首を這つて、雨が肌に泌みて來た。

こんなにまで彼女が殆ど毎日街へ出て行くのは、內緣の妻を拒む兩親の許へ歸つて行つた秋田が新しい花嫁を迎へる前に、も一度彼から觸感を貪りたい爲だつた。それは彼女にとつて、彼の新しい花嫁に對する優越感である。

やつと家へ歸り着くと、折箱程のそれは、獨り外の風に寂寥を搖られてゐた。寒氣に震へる手で戶を開けると、逸早く鼻を衝いて來たのは男性の臭氣であつた。この臭氣に遇ふと、數十分前電車內で異性の體臭に感激した自分へ痛憤したくなつた。

彼女は荒々しく座敷へ上つて行つた。座敷では貧しい灯影の下で、三木が机に組つてゐた。この牝鹿のやうに溫良で貧しい青年は、知子を拾ひ上げて空間と食物を與へて呉れてゐるが、彼女は彼の白い額へ垂れ下る髮を冷く睨んで突立つた。彼を見ると、內に鬱積した憤りをみんな打突けてしまひたかつた。彼女はわざと身體を搖つて袖を引張りながら

「ほら、こんなに濡れちやつた！」と示して、室內を見廻した。濡れた身體を乾すべく、吹き起す火種もない火鉢を認めると、頰を膨ませて行李から手荒く着物を取出した。彼女の憤りを見て取つた三木は、辯解するやうに相手を顧みた。

「寒いでせう、生憎火がなくつて。」

それに答へようともしないで、知子は着物を脫ぎ、三木の鼻先のタオルを取つて濡れた身體を拭いた。肌に紅と熱が浮いて來ると、別な着物と着換へた。

戶外では、雨を狩りたてる風の音が增して、大地を家をへうへうと叩いて行く。

頰を膨ませた知子は臺所へ行つて、食物を求めた。ぼろ〳〵になつた御飯が鍋の底に少し許り白んでゐた。お菜は猪口に殘つてゐる鹽昆

布だ。之等を流し見て彼女は訊いた。

「あんた、御飯濟んで？」

「えゝ。」

答は睨りしてゐる。だが、今夜の食事を拔きにしてゐるに違ひない。夕方彼女が家を出る時から、御飯の量はこの位だ。自分の腹を空かしてまで彼女の爲に殘してある食物を見ると、知子は更に三木を輕蔑したくなつた。彼女は決して、三木の親切さや温良さを感謝しなかつた。三木の野心は彼女の××へ向つて、日々に角度をなしてゐるのを見て取つたから。男と云ふものは、相手から酬はれる迄は頗る親切で温良だ。知子は當然のことゝして、平氣で御飯を平げた。

心臟迄冷えた身體は、急に額へ熱を呼び出して來た。胃の腑へ言譯のやうな食事を濟すと、知子は三木の傍へ夜の物を展べた。シーツの沙漠の中に、一本、×××が落ちてゐる（これは懷紙の中へ愼ましく潛ませて置かう）彼女は掌へ載せた××を光に透し眺めて、慧星のやうに長い嘆息の尾を曳いた。

知子は日々に滑らかに肥つて來た。

三木は日々に蒼く痩せて來た。彼の書物はもはや二三册しか殘らなくなつた。ヴイオリンは疾うに米と炭に姿を變へた。マントは厚いビフテキや湯氣の立つチキンライス、さては色彩の美しいサラダに代つて、蝶のやうにひらひらと彼等の生活の彼方へ飛んで行つた。

彼の唯一の定收であるのは、四五枚の詩稿が神田のB文房具店で十圓に身賣りするのだ。これはやがて數種のレターペーパーの表紙を修飾し、女學生達の桃色のハートに感動を波立たせるのである――が、この金も瞬く間にすき燒鍋へ脂の香を殘すだけである。腕に撚をかけて彼がいそしむ筆耕は、却々彼等の食慾と步調を合すことは出來なかつた。それでも三木は、彼の側へ寢轉んでもはや秋田を追はうともせず、街へも出やうとしない知子を歎んだ。

知子の生活意識は白蠟のやうに乾いて、堅氣の職業へ就くことを非常に馬鹿らしく思つた。且形而上的な努力が何れも空しく感じられて來た。（都會生活を見よ。隱花植物に似た生活の繁茂には、不思議な菌絲を張る生活體があるではないか）

側で喘いでゐる三木の情熱を指折りつゝ、知子はセルロイドの人形のやうに無感覺に過した。横目で相手の青い頰をローマンノーズを睨

んでは、今に鈴蟲の雌のやうにこの雄を食ひ殺してしまはうと構へた――

陽當りの好い窓際で、知子は肌着迄膚から滑らせて蚤を追つた。縫目に潜んでゐた蚤は小さな弧を描いて、桃色の褪せた肌着の上で見事に飛んで見せた。彼女は熱心にその後を追つてゐた。三木は側で、知子の額から鼻を通つて顎を作り、更に喉から胸へ落ちて行く曲線を賞鑑した。そして、尚も相手の胸に光つた二つの圓錐に突當ると、瞬いて眼を睜つた。ちびた莨が指を燒いてゐたのに氣附くと、周章てゝ振り落した。再び眼を元に返したが、圓錐の先は彼女の右腕に遮られて素晴しい賞鑑を許さなかつた。彼は甘つたれて、この女の乳を母のもののやうに口へ含みたかつたに違ひないが、仕方なく机の上の本へ視線を打突けてしまつた。

知子は蚤をみんな飛ばしてしまふと、着物の中へその滑らかな肌を包んで、腰の廻りを指で度（はか）つて見た。そして、愛翫動物のやうに三木の机の前へ据ると、尻尾を振るやうに立膝を搖つた。

「ねえ、今晩あたし、ビフテキが喰べたくなつたわ。」

「今晩？」と相手は眉を曇らせた。

「だつて、昨日チキンカツを取つたでせう？」

「昨日は昨日よ。」

「でも」相手は後を詰つた。知子は相手が落した視線を執拗に追跡した。

「でも、お金がないつて？　お金なんか、どうにでもして作れるぢやないの。」

三木は口を噤んだ。頭を抱へた。じつと眼を瞑つた。彼の網膜には、滑らかに育つて來た香高い女の皮膚が白々と影をつけてゐる。彼の皮膚は、目前の皮膚から一匹の觸感を驅逐しないでは止まない。これ等を目算してゐる知子は相手の沈默を白々しく流し見て、鼻先を莨の煙で卷いた。

「ねえ、神田からまだお金を貰つてないでせう。」

三木は靜かに眼を開いた。額を打たれる猫のやうに細く。

「今月の分はもう濟みましたよ。だけど、來月の分と云つて、一昨日持つて行つた許りです。」

「だから、その來月分を貰つて來ては如何？　かう云ふことは此方がすばしこく立廻らなくちや、先方ではちつとも氣の附かないことだわ。」

「なるほど。」

「あたしの不滿なのは其處なのよ。」彼女は顏筋を緊き締めて、頭を振り向けた。「男つて者は圖々しくて、亂暴な處が魅力のあるものよ。あんたみたいにそんなに氣兼しておどおどしてゐては、ちつとも立派に見えはしない。」

さう云切ると、彼女は又その快く高まつた鼻梁を突き上げて煙草をふかした。その煙は豐かに伸びて、彼女の意氣を揚げた。

「それから、あなたの詩はさつぱり駄目ね。骨董品だわよ。第一、センチメンタルだもの。心を入れ換へて勉强することね。」

少時、眼を細めて机上に頬杖を突いてゐた三木は、その薄いカレンダーのやうな肩を振り起した。

「ぢや、駄目と思つて神田迄行つて來よう。」

知子はその儘煙で輪を作りながら、出て行く相手を見送らうともしなかつた。

夕方歸つて來た三木から受取つたのは、嘆息と一圓許りの金であつた。それは彼が神田のB文房具屋を拜み倒して借りて來たものに違ひない。三木はお腹が痛むからと云つて、知子だけに脂の光るビフテキを與へた。厚くて溫いビフテキは、三木の嗅覺を掠め乍ら知子の舌へ充實した汁を垂らした。知子は、今にも鳴り出しさうな胃を押へてゐる三木を睨まへて、獨り舌を打つのであつた。若しも、彼が自分の行爲に悲壯な感激を味つてゐるなら、後から揶り飛ばしてやらうと思つた。

翌日の新聞に、知子は、秋田と彼の新しい花嫁を見つけた。ブルジョアの息子へ還つて行つた彼は、何と易々と美しい處女を射とめたことであらう。蝶のやうな一對の昆蟲標本。新郎と新婦のより添つた上へ唾液を吐きかけて、知子は三木の額へ投げつけてやりたかつた。だが、彼女はこれを切り取つて壁へ貼りつけた。十字架へかゝつたやうに打留められた一對の蝶へ、彼女は手を拍つて哄笑を打附けた。あんまり彈み過ぎた爲、ごぶごぶ涙が溢れて來て彼女の膝へ汚點を作つた。

三木は默つて、窓際で耳の垢を取つてゐた。外は好い天氣だ。そこで、知子は三木を誘つて近所の原つぱへ行つた。

二人とも無造作に脛を投げ出して、枯草の上へ腰を据えた。二人の脊に十一月末の春光が透明な熱を與へた。知子の食婪に膨れた腰は三木の鉛筆のやうに削り細つた身體を壓倒し勝ちであつた。だが、男は、相手から來る壓力と臭氣と、十一月末の陽の中に身體を据えて、眼を細めて動かなかつた。彼の流儀に飲めた詩情を汲取らうとするのだ。

知子は益々肥つて、男の側であけすけに足を投げ出して寢そべつた。顎は二重になり、腰は蠶蛾の腹部のやうに膨れて充實した。三木は益々痩せて、皮膚の上で露はに骨格が感じられた。彼は腐つた肺から黑い呼吸を吐き出し、貧血から來る眩暈に頭を毆られても偉大な成長力を示した側の雌が彼の巢から逃げ出すのを拒んだ。

全く女の賞鑑には驚嘆をさへ許される。張り切つた皮膚はすべすべした洋紙のやうに艶やかで、闇の中に置けば身體から後光が發しさうだ。佛像のやうに丸い顎に包まれた小やかな朱唇が開けば、よく揃つた小粒の齒が水兵のやうに整列して笑ひこぼれる。彼女の股は新しいラケットのやうにりんりんと鳴る彈力を鎭めて張り切つてゐる。彼女が角度を作つて上體を後へのめらすと、燦然として××が輝き出る。かうした光榮ある女と巢を同じうしてゐる三木は、彼のロマンチックな理想から祭壇を設けて、遂に彼女を崇高に祀り上げてしまつた。知子は益々三木を輕蔑し、彼のロマンチックな理想を嗤つてゐた。秋風に痩せ衰へ、もはや雌に喰はれてしまふ許りになつた鈴虫の雄の餘命を、冷かに流し見てゐた。

今は、彼等の身邊から、一文の金も叩き出すことが出來なくなつた。腐つた肺から出る呼吸で酸化したやうな筆耕では、到底この光榮ある脂肪を補給することは出來なかつた。三木はペンを投げ棄て手足を腹の上に縮めて、疊へ轉つた。知子は窓に腰をかけて、煙草をふかし乍ら男の樣子を見下した。

「如何したの、そんなに怠けて。」

「駄目だ、到底追つかない。」

彼は呻いて、腐つた息をはつはつ吐いた。

「弱虫ね、あんたは。」

言ひ棄てゝ彼女は窓を放れた。そして、鏡へ向つて眉を引くと、帶を締め直して家を出た。

三木は手足を腹の上へ縮めた儘、夜晩く知子が歸つて來るまで疊の上に轉つてゐた。

歸つて來た知子は三木の姿を睨んで、その側へ調つた脛を投げ出した。そして懷から五圓紙幣を投げ出した。三木は起直り、驚喜して手に取らうとしたが、忽ち眉を顰めてその紙幣の面に見入つた。彼の眼に大きな疑問符が少時ちらついた。やがて、或一つの思惑に到達すると、ぷいと立つて窓を開け深い呼吸をした。澄んだ夜氣が針を持つて膚へ刺さる。絶えず男の樣子と紙幣を見比べてゐた知子は、咽せるや

うに肩を搖ると、筒の骰子を振るやうな笑を立てた。そして言つた。

「お馬鹿さんね、あんたは。」

彼女の聲に振返つた三木は、その髯面を更に蒼ざめて奇怪に口を歪めて動したが、その波動は遂に聲にならないで強直してしまつた。

彼女にとつて、今宵數時間の運動が五圓紙幣に變化したとて、さして感動する程のことではないのだ。形而上的なものを蛋のやうに驅逐して來たんだから。彼女の脂肪を疼うから覘つてゐる獅子鼻のブルジョアへ、その光榮ある肉體を惜しげもなく提供して來たのである。そして得た金だ。秋田を失つてからの知子の生活はシネマのスクリーンのやうなものである。形而上のフイルムが消えて、虚無な現實を光に曝してゐるのだ。誰がそれへ指紋を附け、觸感を植ゑようとも、スクリーンは白々と感動を消してゐることであらう。

彼女は、紙幣を摘み上げて眺め乍ら、も一度咽るやうな哄笑で肩を搖つた。

「何を考へてるの、ばかな!」

指で器用に紙幣の肌を彈いてその音を樂しむと、彼女は懷へしまつた。そして軟い微笑を三木に向けた。相手は尙も默々としてゐたが、知子の微笑に突き當るとまごついて二三度顏を擦つた。そして窓を閉め又手足を腹の上へ縮めて疊へ轉つた。知子も彼の側へ身體を伸した。

形而上的なものへまだ幾らか後足をつけてゐた數時間前と、斷然その後足を拔いて形而下の方へ踏入れた現在とを照應して見て、彼女は後者の方へ悲哀も悔恨も持たなかつた。其處は煩しい感情も思索もなくて、何と安住し易い地であらう。

この岸邊を見出した知子は、秋田への執着も、彼を呑込んだ都會への反感も、朱線を引いて見事に抹殺することが出來た。そして、側にゐる男の溫良で小膽でロマンチックな理想に憤怒をさへ呼起した。もし、三木が彼女の行爲を責め、愛の旗を翳したなら、荒熊のやうに、この若者を鋭い爪で摑み、顫へる喉首を咬み切つて、緩い熱い血潮を味つたかもしれなかつた。

相手の傍へひたりと肉體を寄せて、知子はじりじり攻めつけて行つた。彼はじりじりと壁の方へ退つた。彼女の手が伸びると、三木の顏を抱へて自分の方へ引寄せた。彼は涙を含んだ眼で知子を見上げたが、急に頭を振つて彼女を突き除けた。彼女の身體はどつと後にのめつた。四十五度に開いた胸、顎を突き上げた喉、さては腕を伸した腋から、××の輝きが仁丹燈のやうに走り出た。三木はこれを瞶めて、敢て女に手を加へようとはしなかつた。知子は相手から受けた痛味に快いものを味ひ、次に來る腕を待ち受けたがそれは空しい期待であつた。

一轉りして、脊を向けた三木を見殘すと、彼女は立つて屋外へ出た。深い霧だ。乳のやうな重量を持つた細い息が、ぎしぎし軋み合つて

地上へ降りて來る。神經系統のやうに梢を伸した木立が、次第に膜で蔽はれてしまふ。知子は瞼に重る滴を瞬き乍ら進む（夜は常に神祕と迷信を奉じたがる古典主義者だ）懐手をして、霧を深く呼吸しつゝ郊外の道を歩いて歸ると、無言の儘彼女は床へ就いた。

知子が分けてやつた一圓を掴むと、三木は朝から家を出て行つた。

その夜、戸を締めないで待つてゐた知子は、空しく近所の時計が告げる三時を、鶏の聲を耳にした。三木を省いた生活は、空腹よりもつと壓力の拔けたものを彼女に與へた。彼女は机に縋つた儘、夕方の朝顔のやうに凋んだ××××××悶えた。その儘机に凭れて眠り續けてゐると、朝陽を一ぱい脊負つて三木が歸つて來た。

彼の神經は細い顏面に蒼白く浮び出て、頭髮は逆立ち、眼は上吊つてゐた。彼は震へる指先を握りしめて、知子の寢姿を眺めた。人の氣配がするので眼を開いた知子は、後を振返つた。三木を認めると、彼女は先づ反感と憤怒を抱いた。次に、それは憐憫と輕蔑に變つた。昨夜中街をうろついてゐたか、それとも何處かで一夜の觸感を買つたのか、それは何れにせよ、とにかく彼女は三木を輕蔑したかつたのだ。

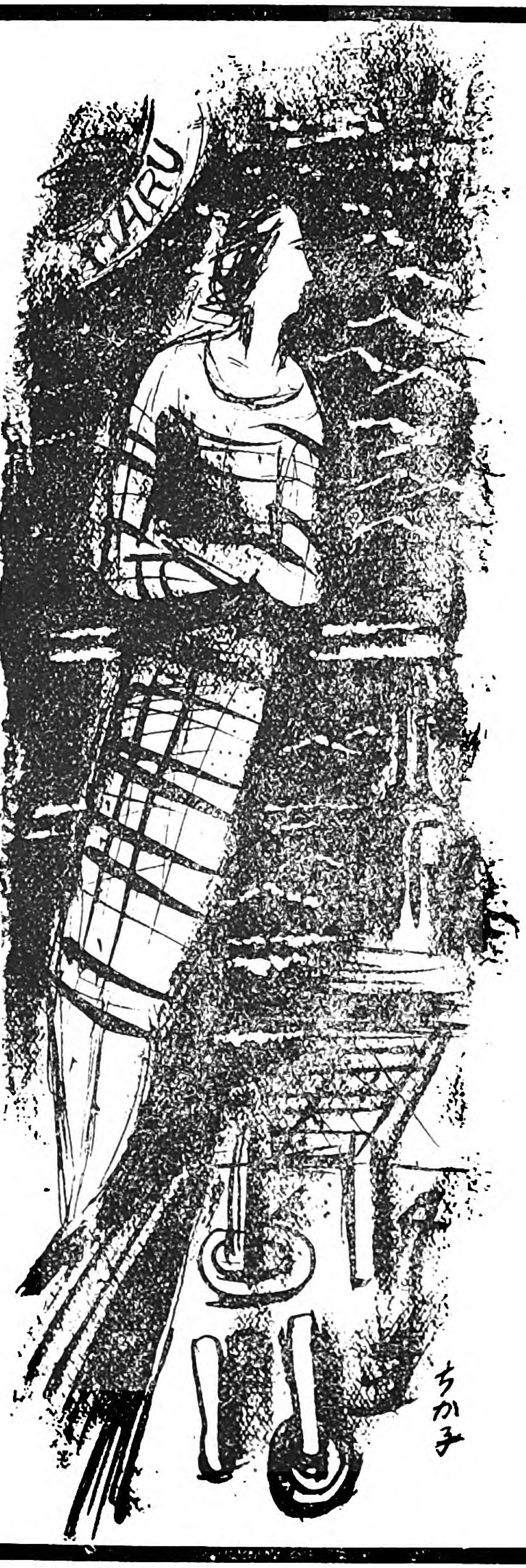
錯雜した三木の視線が知子の顏へ走ると、彼女は顏筋を強直した儘で相手を見返した。その視線に堪へられぬやうに三木はどかりと疊の上へ倒れると、手足を腹の上へ縮めて腐つた肺臭をせつなげに吐き出した。そして、次第に切ない息を嚙み殺して來た。

知子は解つてる癖に意地惡く眼で相手を追究した。莨に火を點けると、机の上に突いた片手で頰を支へ、片手で莨の灰を彈き乍ら。彼女の眼の先で、ひらり三木の裾が綻びて露はれた脛に、××××××こびり附いたものがある。相手の身體から腐爛した惡臭が漲つて來さうなので、知子は煙を吐きかけた。

「ね、今日はお風呂へ行つてらつしやい。二十日位這入つてないでせう。そして、よく足を洗つて來ることね。」

相手の言に眼を閉ぢてじつとしてゐた三木は、急に身體を動かして喉を擽つた。胸から口へ押し上げるやうな息遣ひをすると、片手で口を押へてハンカチを取出した。急いで口を拭つて中を開いて見た。一塊の赤黒いぶよぶよした血液が、彼の暗い眼を見上げてゐた。それをハンカチで包むと、彼は力なく投げ出した腕の上に頭を投げつけた。

知子は側に坐つて煙を吐き乍ら、相手の樣子を流眄の先にひつかけてゐた。



朝

小金井素子

船が、その港を廻る群島をはなれきつてしまつて、振りかへつて見ても、もう陸らしい雲の塊も見えなくなつてしまつた頃、――彼女は朝の甲板に、ぼんやり立つて、碧い海の色を、たゞ眺めてゐた。

また、ひとつ、手紙を殘して來てしまつたことが、その港を遠ざかると一緒に、彼女からも遠のいて行くやうな氣がして、安心と一しよに、また、あの手紙もあの人に見られてしまふのだと云ふ、淡い自己嫌惡に、うんざりしてしまつてゐた。

海のるり色は、美しい。そして、あの港の街からつゞく、この蒼空の深い碧玉のいろは、また、何と云ふ美しさだ。――しかし、あの港の街から、彼女の書いた手紙は、その時の彼女の氣持は、一生、氣持の上でしかお互に味ふ事の出來ない、優しさと、なつかしさと、親しさをこめて、あの人にむかつて、もたれかかるだらう。あの人は、それを讀むのだ。さうして、一寸、ほかの方へ向きかけたあの人の氣持を、急いで、否、むしろ慌てて、彼女の方へ向け直すのだ。
「ゆうべ、夢を見ました。」
いやだわ。そんなこと。――十日經てば、横濱へ着く。この次、見える山の影は、すなはち日本だ。さうして、東京。――
三月中旬だつた。彼女は、腕のあらはな、白の運動服を着けて、常夏の海の風に、快く吹かれてゐた。朝の甲板を散歩することは、彼女の大きな日課だつた。行きあふひとと、みんな、朝の挨拶をした。
「靜かですね。」
一人は云つた。
「何と云ふ、美しさでせう。」
アメリカ人のお婆さんが、手提の口をギユッと握つたまゝ、もう一方の手で海を指した。
「大そう、お早いんですね。」
白いおほひをつけて、紫の細い縞をのぞかせた帽子を、無造作にかぶると、彼の船室から出て來た機關長は、聲を掛けた。
「お早うございます。」
彼女は、つゝましくお辭儀をした。
生涯の大部分を、海で日に燒けて暮すシーメンの、あの衿首から額の帽子際までの染み込んだ色の淺黑さを、彼女は微笑ましく見上げた。
「ゆうべは、隨分、速力を出しましたよ。」
機關長は、朗らかに笑つた。
「まあ、――」しかし、それは決して彼女を悦ばせるべき、言葉ではなかつた。

「この分で行くと、豫定より、確かに半日は早く着きますよ。」

機關長は、もう一度晴れやかに笑つた。

「――」彼女は、當然、云ふべき言葉を忘れたやうに默つた。

その時、彼女は、はじめて彼の左の瞳の下の泣きほくろに氣がついたのだつた。今度は彼が、どんなに朗らかに笑つても、その泣きぼくろが、氣になつて仕様がなかつた。

「あの人も、さうだつた。――」笑ふと、あの左の瞳の下の泣きほくろが、なほさら寂しさうに、泣き出しさうに、浮き上つた。――」

立ち止つてゐた欄干をはなれると、舳を廻つて、反對の舷を、船の進路と逆にコツコツ、靴の踵を鳴らしはじめた。

――港の街へ向つて、歩いてゐる。――

この考へは、素晴らしい。

――しかも、船は、西へ西へと走る。――

港の街から、遠ざかつて行く。茫茫とかすむ水平線の果には、細長い列島が、船の行手をさえぎつてゐる。そして其處には、手を擴げて――それ以上に、大勢手をつないで、彼女を今度こそはなすまいと、待つてゐる人達がある。

瞳の冴えた、支那の女が二人、膝の上のお皿に、黄金色のオレンヂをのせて、毎朝のやうに、彼女に微笑みかけた。

「香港は、いゝ所ですね。」

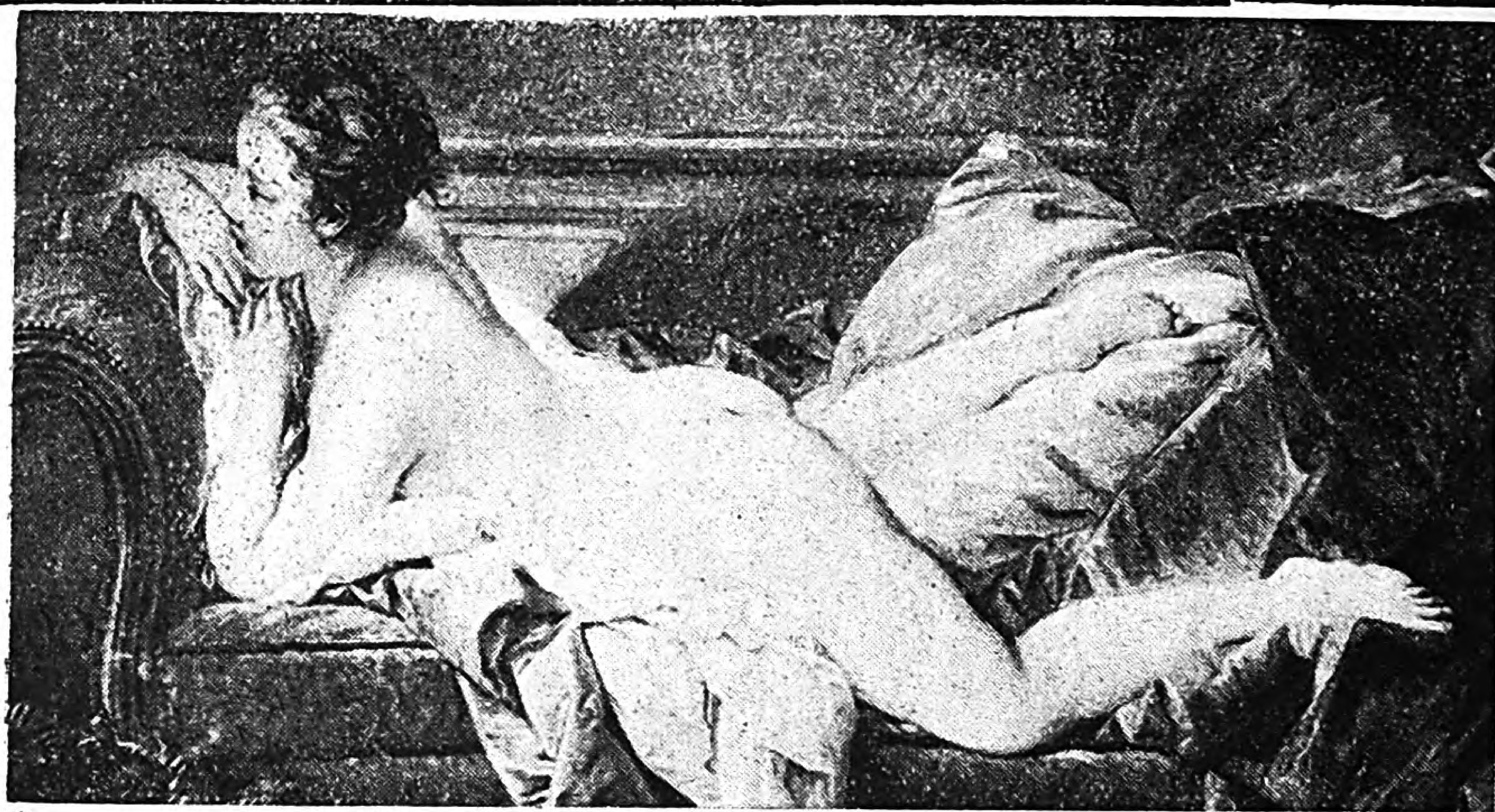
たつた一度、彼女の云つたその言葉が、顔を合せる度のこの暖い微笑となつた。海に弱い彼女達の瞳が、その朝程、朗らかに、快く輝いてゐたのを、彼女は見たことがなかつた。

彼女の悪いくせの、手紙が書き度くて、たまらない氣持になつて來た。足の向くまゝに、彼女は、サロンの隅の、並べられた机の一つの前に坐つた。港を出て來た許りの、そして、今度着けば横濱だといふいま、必要はもとより、差しあたりの、あてもない害だつた。彼

女の船が、横濱につけば、それと同時に、彼女は、あらゆる彼女の周圍に、また取りまかれるのだつたから。
桑港で受け取つた、故國の手紙。――手紙は束になつて、一時に彼女を、十重二十重に、縛り上げてしまつた。氣付になつてゐる、船の會社から、取つて來て貰つたのを、彼女は一つ、一つ、封をきつていつた。
ホテルの午後は、六月の新緑を思はせて、開け放した窓から、街の雜音が、ねむい一つのうなりになつて聞えて來た。
その中から、こぼれ落ちたのが、あの人の電報だつた。Western Union の、玉子色の紙。
"Bon voyage!"――ほんとうに、御機嫌よう。あの人は、ニウヨークで彼女の事をほんのすこうしづつ、忘れかけてゐるのに違ひない。
もう一つは、厚い、重い、大きな白い封書だつた。見慣れた、上手な横文字が、手紙のぬしの、あの漆黒な樋だけを、カアルした斷髮を想ひ起させた。
その中から、すべり出たのは――。
すべつこい、その、ブロマイドの手ざはりに、彼女は、はつとした。白いネクタイと、堅い胸をつき出して、ちよつと口をまげて、嫌味でない程の皮肉な微笑を浮べた、それは、イギリス生れの、映畫俳優の、横顔だつた。そして、裏には、走り書で書いてあつた。
×でございます。似て居りませうか。
なんだか、一寸、違ひますのね。
御らん遊ばしたら、海の中にでも、お投げすて下さい。――あはれな事ですが――。
彼女は、思はず、顔をゆがめて笑つた。
彼女よりも、一足先に日本の土をふんだその人が、歸る匆々、戀人の死にあつたりした事は、面白可笑しく暮してゐる氣持を、すつかり「何時死んでもいゝ。」と云ふ氣持から、「一そ、死んでしまひ度い。」氣持へ迄、ひきずり込んでしまつたのだつた。
近づいて來る、春の陽氣と一しよに、その人にも、こんな、ひとを冷笑かすやうな、ゆとりが出て來たのか。
その人は、日本人の母をもつた、混血兒だつた。
さうして、もう一度、あの人の電報を見た。――Bon voyage!

彼女は、いままで、見つゞけて來た夢をはつきりと醒まされたやうな氣がした。彼女は、決心した。
——今度こそ、お嫁に行つてしまはう。冒險のつもりでも、何でもいゝ。きつと。——かまふものか。——
彼女は、じつとしてゐられない氣持で、サロンをとび出した。
出あひがしらに、フランスの飛行家が、彼の愛嬌のある童顔に、えくぼを浮べて、あいさつした。
この人は、昨日、港をはなれる時に、船と埠頭と兩側で、手を振りあつて名殘を惜んでゐる最中、自分の首に、重い程かけてゐた花の首輪を、いきなりはずすと、彼女の白いブラウスの上に、引かけてくれた。
一寸した拍手が起つた。
彼女は、口なしに似たその白い花の、甘い高い匂にむせるやうな氣がした。
「トレビアン！」
彼女は、いま、その言葉をもう一度、想ひ出してゐた。
この人は、一つの世界記錄をつくる爲に、一つの冒險を行ふべく、その出發點たる日本へ向つて、急いでゐるのだつた。
冒險——。勇ましい、いゝ言葉だこと。この人の飛行機が、マロニエの芽ぐみ初めた、パリの四月の空に浮ぶとき。——
彼女は、母に連れられて、婚禮の衣裳を、見たてに行くかも知れない。

梯子段の下へ來ると、彼女は、上甲板へかけ上つた。
無線電信技師が、白い服を、ちか／＼陽にてらして、一定の區間を、行きつ戻りつ、散歩してゐる。
水夫たちが、四角いヨークをひるがへして、天幕を、はつてゐる。
甲板ステユワードが、洗ひ淨められた甲板に、その日の、甲板ゴルフの輪を、白墨で描いてゐる。
彼女は、あをい空と、あをい水を眺めた。
あの人がやがて、この海を通る時、彼女の手紙は、みんなこの海の底に、沈められる筈であつた。——この碧い海の底に。——
ぬるい朝の風が、彼女の頬を撫でた。



ドルメンの上の謎

松井締子

女は、美しく成りさへすれば、間違つた物ではない。

例へば今、私は、男が欲しいと、思つて居る。それだのに、私は理想的な、戀愛を遂ぐ可く、餘りにも貧しい。併し、人間であるからには、人並の感激も欲しいのだ。

白粉と、着物と、少しばかりの滋養で、男を引き付け様と、骨を折る。すると、少々丈け、私は美しくなる。

××を滿足させる、丈けにでも、自分の周圍、生活に、醜と名のつくものを、取り去らなければならない。

店に座つて、受け持ちの帳面を、パラパラ繰り擴げて、白米や何かの、値段を書き入れる。

私は小賣場の仕事だつた。

朝、七時に、西小路、三ッ瀬、川原町、新小路方面の、お華客様へ、伊佐公が、御用聽きに出る。伊佐公は、今年で、廿二才に成り立てで、正直な、よく働く、若者であつた。顔が、

チヤアールス、ロージアース、そつくりで、體格も立派だし、柔道三段で、男性美の粹を集めた樣な、ナイス、ボーイだ。

之が、近頃、女の味を覺えたと見えて、機械場の、糠の中で、

米の御飯と、十八娘、白い處に味が在る。――……なんて、大聲出して、都々逸を唸る。

午前十一時過ぎて、伊佐公が御用きゝから、歸つて來る。厚い帆巾で出來た、御用袋の中から、通帳を、幾拾通か取り出すと、私は、彼の讀み上げる註文の品々を、忘れない樣に、小さなノートに、書き記さねばならなかつた。

「さあ、年末で、今日は殆んど、糯米が全部だい。いゝね、讀むよ。畑糯米貳斗、白米五升、小豆貳升、大豆五合、之が片目の唐芥子樣行き――」。

私は机の上から、伊佐公の顔へ、眼をうつす。

「何んだい、其の名前は？」

「大した奴でさ、娘を靴工場に通はせて居る癖にね、朝ッから、燒酎を呑んで、そいつの肴が、唐芥子よ。ぐでん、ぐでんに醉つ拂つて、月末の米の代金を催促すると、片つ方の眼で、凄い程睨み付けやあがつてね、金を拂はなくて、文句を垂れるんでさあ。」

「そいつの娘が、別嬪なんで、此奴、強い催促が出來ないと來るんだらう。手前は、米屋の手代をよして、別嬪戸籍係りの看板を、役場の近所で、ぶら下げた方が、すらすらと、世の中が渡りいゝと、俺あ、思ふんだがなあ。」

「ヘッ、ヘッ。」

伊佐公は、首を縮めて、頭を掻いた。

そんな恰好をするなよ。

おい、チヤールス、ロージアース。

ボロのジヤケツに、ボロの足袋、一日中を糠と戰つて、月末に、貳拾圓づゝ貯金を怠らない、伊佐公。

晩になつて、湯から上ると、小さな鏡を立てゝ、ポマードと、クリームでお化粧だ。

此の男は、今の私に取つて、好い××の對照なんだが、一つ彼の中に、戀愛を釀成すべく、在つてはいけない條件があるのだ。

それは、醜いのだ。それは、彼が無知識だつたから――。
無智、それは、女性を醜くする。無智に近寄ると、女性は、醜くなつてしまふ。
總ての知識は、女性美の洗禮を受けて居るからな。
そして、總ての女性美は、知識の洗禮を受けて居るのだからな。
それだのに、無智の爲め、伊佐公は、美しい女となら、無條件で、××が出來るものと思ひ込んで居る。
彼の着物の藏つてある、柳行李は、私の四疊半の居間にあつた。
彼は兩親が無かつたので、汚れ物の洗濯や、新しい着物の選擇は、私が好意を以て、ずつとやつて居た。
毎晩、湯殿から、私の部屋に歸つて來ると、伊佐公が、きまつて、私の部屋の中に居るのだ。
行李の中を檢べる振りをしたり、私の鏡臺の前に座り込んで、自分の顏を寫してみたり。
そして、自分の無智で、自分を、アブノーマルにして居る彼。
私の×××、××きの下に、かくされてある、×××、そいつを、私の身仕舞の終る迄、のぼせた樣な眼をして、觀察して居る。
呼吸器を惡くして、一週間餘り、熱が取れなかつた事があつた。
「あんたは、今度の病氣で、少し痩せたね、だが、もとよりも、うんと美しくなつた樣だな、五百匁、否、五百七八拾匁は確かに、體重が落ちたな。」
通りすがりに、近所の金物屋の店先きの秤に乘つて見た。驚いた事には、拾參貫三百の私が、拾貳貫と八百匁位になつて居たのだつた。
どんな外形的に、醜い女でも、精神的にか、亦は、肉體的にか、眞實の戀愛に、浸つて居る間は、誰でも皆、美しい。
女性は、無意識的にも、美を欲して居る。其の具體化が、男を欲する事だつた。
私は××を、持つて居たが、相手になる男が、周圍に無かつた。それで終に、自分獨特の、滿足法を考案した。と、言ふより感得したんだ。
私は、尋常科時代に、盛んに、木登りをやつたものだつた。友達、五六人と、郊外の森に集まつて、南國のどす黑い迄に、繁茂した樹の枝から、木の枝へと、猿の樣にも、ぶら下つて遊んだ。たぶん、拾一二歳位の時だ。

月經は、生殖可能の、シンボルなんだから、性的××が、私には、初潮より、三年餘り先きに、はつきりと解つた事になるんだが――。
其處で、私はふとしたはづみに、×××××××、亂暴な馬乘りをした時、私は非常に、異つた感覺を、×××覺えた。

其の時の、感覺に近い物を、捉ふ可く私は、ずつと今日まで、××をする事で、××を、ごまかして居たのだつた。
だから、其の結果、男子に特別な魅力を失ひつゝある事だつた。
下手な結婚をして、自分の身體を縛られるよりも、此の方が、ずつと、文化的で、經濟だと、思ひ込む樣になつてしまつた。
此の樣な、生活態度が、アブノーマルであるならば、始め、私は自然から、アブノーマルにされたんだ。

私の戀愛は、觀念的なものとなつた。そのくせ、私は結婚した。
餘に、好いても居ない男であつたのだが、夫は、心から、私を愛して居た。それは、私が拾六歳で、夫が廿五歳であつた。
夫が用事が出來て、留守になるのを待つて居て、好きな文學者達の、顏を思ひ浮べて、×××、×××××、樂しんだ。
四ケ月夫と一緒に居たけれども、夫の享樂のみ見て居て、私は一度の×××、出來得なかつた。それで、其處を逃げ出した。
男子に焦れる女は、助平だと思つた。
其の男は、拾年餘り經過した今日まで、現に昨日も、何處かの待合らしい所から、私を呼び出さうとしたんだが、私は、此の執拗さを氣味が惡い物の、一つに數へて居る譯である。
私は、立派な、ヒステリーだ。
そして、ヒスには、ヒスとしての、性道徳が成立する。
生理的に、健康な、性生活に入るまでを、理想として、時間的にも、其の機會の到來するまで、私の××の、パアトナーは、無制限であつて、宜しい。と、言ふ眞實を掴まん爲めの、自己改革の規律であつた。
何故かと言へば、現代科學の、エレクトロン説に從へば、刹那の快樂も、一種のエレクトロンの、作用であつて、要するに、××の對照に依つて來る、スピリットの問題だから、だから、私は特に多くの、異性の中で、そいつを、探し出さなくちやあ、ならない。

さうする事に依つて、美しく成り度いと、思ふ。
結論として、私を、不具にしたのは、觀念的な、人道主義であつた事だ。
おゝ光明を翳して、道を示すものは何！　不健康より、健康へ、それは幸福でなくて、何んであるだらう。

さうして、私は再び、米屋の店に、算盤を彈かなくちあならない身分となつた。
毎月末になると、小賣場には、現金が、三千圓平均集まつて來た。兩親と、兄の信用を利用して、私は、可成りの金を消費した。
其の揚句、何に金を遣つてよいのか、見當が付かなかつた。誰れも、其れを敎へて呉れる者も無かつた。
讀書が好きだつたから、種々な書物を、買つて讀むにも讀んだ。が、何にも、頭の中には殘らなかつた。
そして、讀書位では、金はうまく、はけない事だ。
私は、變體的だけど、女郎を買ふ事は、不可能だ。
そして、第一、人間は、金を遣ひ出すと、頭が白痴になつて來るらしい事を、知つて、私は、それをやめてしまつた。
大ブルジョア、ブルジョア、遊蕩兒の眼を見て御覽、金で、自分自身を、醜くゝして、其の上、それを喜んで居る。
個人が、不相當な消費をする時、其の社會は病氣になる。
そして、個人が、不相當な生産力を、强要される時、其の社會は、不可能な現實の中に苦しむ。
前に、金の遣ひ樣を知らない、と言つた私は、正直だ。
若し、私が、ちよろまかせる丈けの、可成りの大きい、物質社會の交換切符を、うまく按配して遣つてしまふ丈けの、能力が有り得たならば、私は決して、鼠の樣に、店の金を引かなくても、堂々たる、勞働力を遣つて、社會的生産部門に在つて、大潮の樣な、其の勞働力の結晶を、呑み下す事が、出來得る筈なのだ。
事實は、斯くの如くに、明白であつた。
だが、ブルジョアは、病的に、不正直だ。そして、惡い事には、身分不相當な消費を、身分不相當な報酬で、奬勵する爲めの、惡童的研究グループで以つて、ブルジョア社會機構の、最上層建築をなして、威張つて居る事だつた。

兎に角、不組織な、不規律な讀書が、私に呉れた物は、煎じ詰めれば、力の不均衡といふ處で鳧をつけてしまつた。

力はいゝ、大きい力は、猶いゝ。

人類の九拾九パーセントを占める、現在の、プロレタリアは、其の最も大なる力である。私は、だから、プロレタリアを愛する。否、私は自分自身を愛すると言ふ方が早い。プロレタリアは、健康でピチピチして居る。そして、其れは美觀を與へる。

新しい知識だ。總べての、女性美は、其の時代の知識を受けて發達して行く。

プロレタリア作家H氏、其の人を始めて、B市に訪れた。豫想に近い作家だと思つたが、想像して行つた人とは、大分違つた。

「無産大衆黨」の合同を前日に控へて、氏は旅館の一室で、小説を書いて居た。

ロイド鏡眼の中から、藝術家らしい、情熱的な瞳が、先づ、私を打つた。

始め、此の男は、少し足りないな、と思つて、談して居る内に、すつかり、其の足りないところに、惚れ込んでしまつた。

其の日の内に、家に歸る筈であつた私は、何も彼も忘れた樣になつて、H氏の强い兩腕の中に在る私を見た。

翌日になつても、私は歸つては行かなかつた。

どうかして、此の情熱の固りの樣な男に依つて、××の新しい發展を見たい、と思つた。

私の心は、爆彈の樣な、情熱とでなければ、解けない。

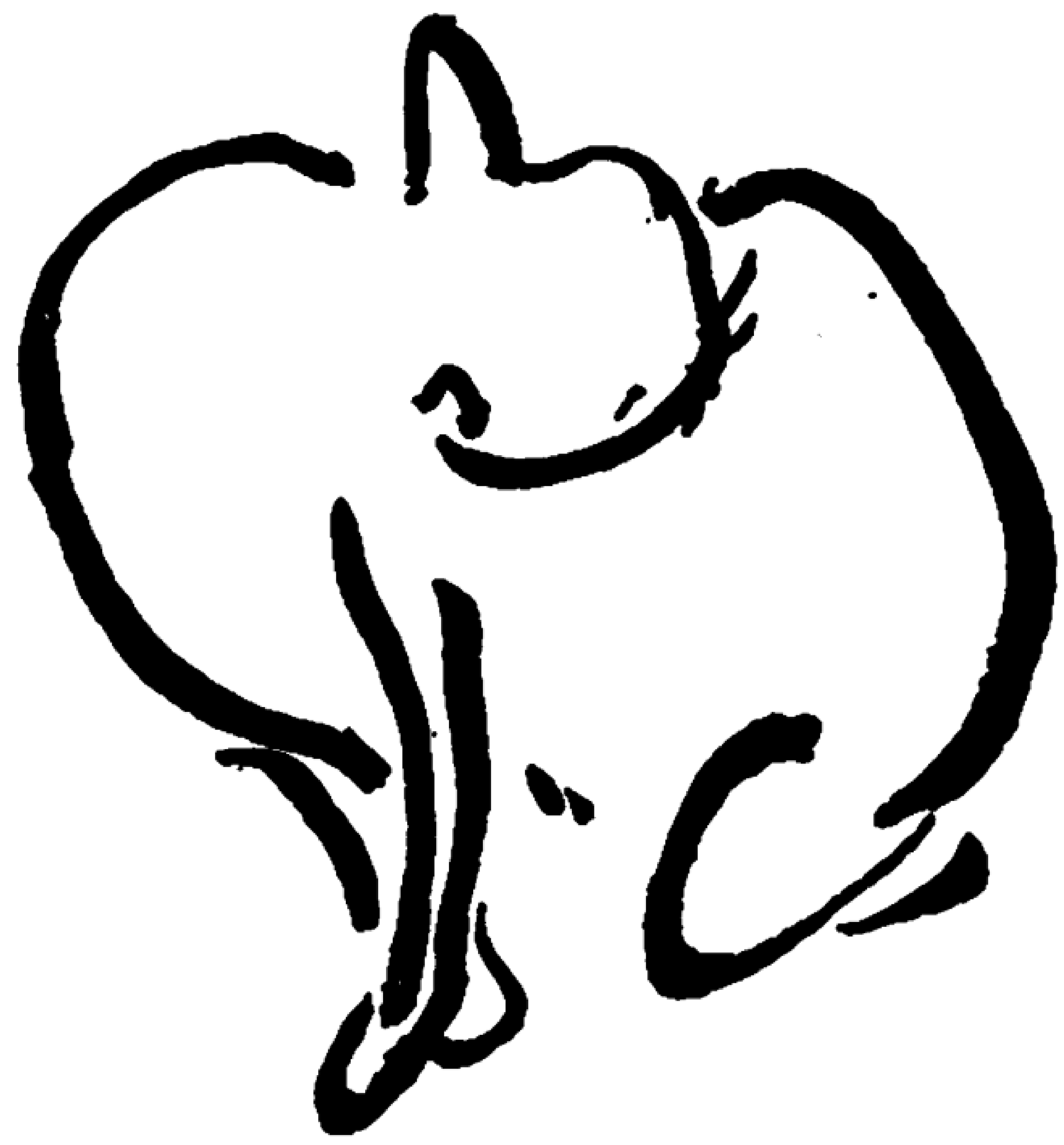
そして、心からH氏を迎へた。彼は、あらゆる方法に依つて、私の感覺に訴へた。併し、私に取つて、×××、一種の謎に終つた。

「S子さん。君を××て居ると、木偶の棒を×××てゐる樣だ。君は、結婚生活に入る前に、婦人科の醫者に行つて見給へ。」

涙が、眼の中で、一杯になつた。H氏は、愉快さうに、欣然として居る。だのに、私は何んといふ、馬鹿者だらう。×××××××な抱擁の苦しみと、×××の恐ろしい痛みの外、何も摑めないのだ。そして、唇と唇の接吻でさへ、汚ならしいと思ふ私に、H氏は、自分の×××××××へ×××を要求した。

何も與へなかつた男は、別れる時に、しびれる程、手を握り締めて、

「君は、此の二三日の内に、非常に女らしい美しさに、變つたよ。」と言つて、例の通りに、にや、にや、笑つた。（一九二八・一二・二四）



夜更けの風

しの・たけじ

二三度扉を叩くと、まださう更けてはゐないので、歯醫者は不承々々に返事をした。女の押殺した怒り聲も洩れた。

二階にポッと灯が點くと、階下(した)の窓硝子に曳いた布(きれ)に、手術着に手を通してゐるイガグリ頭の影がうつつた。

「お這ひんなさい。」

扉があけられると、ぶつかるやうに轉げこんだのは私でなく彼だつた。助手は妙な顔をした。

晝間から惱みつゞけ、痛みに憤りつぽくなつて、青つぽく荒れ狂つてゐた彼を、歯醫者まで連れてくるまでには骨が折れた。不愛想でノロ〳〵してゐる助手が氣にくはないで、歸らうと言出すかも知れないと案じながら、そのくせわびた。

「こんなにおそくお起してすみません。」

若い歯醫者はムツリとだまつて家業にとりかかつた。患者も憤りつぽく頬つぺたをおさへて手術椅子にゐた。醫者が用器をあらためてゐる間も、彼は足をブルブルさせて、疳癪と痛みを堪へた。

彼の姓名(なまへ)が、彼の書く小説ですこしばかり知れ出した時なので、助手は患者の姓名を記入しかけて、チラリと手術をうけてゐる彼の方を

振りかへつて見た。

彼は——借家の低い天井に頭がぶつかるほど跳ねたり轉がつたりしたのに、もう足もブルブルさせてはゐなかつた。

「觸らずにおいて下さい。三叉神經の痛みといふものを、君は知らないんだ。これは氣狂にもするほどの痛みなのだ。」

さう言つて縫針で突つついたり、今治水を一瓶つけたりして、半日以上狂ひ廻つたのも、とても簡單な手當でけろりと癒つてしまつたのだつた。

「もう一時間もすれば完全に痛みはとれます。」

「いや、どうも。」

天地も滅せよと狂猛に呪つた彼も、そんな時他人の前では少女のやうな媚體(しな)を見せる、いつもの柔軟な彼だつた。おそらく齒醫者は、

「へつぽこ齒醫者にこの痛みが癒せるか、全體齒醫者なんて、夜(よる)よなか起きてなんて、くれるものか。」

と怒鳴つた彼とは思ひもつかないであらう。私はほつとした、と同時にボンヤリした。そして財布の中が氣になつて來た。二人の巢を營むために、昨夜は郊外の家で徹夜して仕事をして來たが、それはまだ金にかへてない——

「貳拾錢だけいたゞけば——」

と助手が言つた。それが定まつた料金なのだが——齒醫者は無表情にだまつてゐる。

貳拾錢？　私はちよつと途方にくれた。治療代はそれだけでよいとしてお互の氣持はそんなものではない。私は面伏せに小銀貨をつまんで渡した。

外へ出ると、冴えた白い夜で、せまい路の兩側のわびしげな板戸や軒瓦に、二人の影は黑く長く伸びて歩いた。嚙みつくやうなうなり聲をたてて、大きな猫が他の一匹を追つて、ドサリと音をたてて塀にのぼつていつた。マントにくるまつて急いでゆく彼は氣輕く言つた。

「女の聲だつたから起きたのだよ、はじめつから僕ならとても癒してなんかくれない。」

彼は機嫌よくつゞけた。

「僕は夜あるくと、四邊(あたり)が全く怖しいのだ。だつて、いたるところ、この兩側の家のなかで、××が、みんな、なにしてゐると思ふと——」

彼は晝間からしやべらなかつたので、舌を動かすのが樂しみなやうに、またささやいた。
「芝居なんかで、すまして並んで見物してるのもいやだなあ。」
奇怪な幻想が、この靜かな無人の町に、むやむやと、足の踏みどころもないやうに廣がつて來たかのやうに、彼はとつと急ぎ出した。

親子飯の重箱が二ッ冷たくなつてあつた。巣にはお米がもうないだらうと、晝間來がけにあつらへた夜食に手がついてゐないのだ。彼は家にはひるとすぐ、先刻まで轉げ廻つてゐた布團の上に座つて、お重を二ッとも平らげ、香の物をパリパリ嚙んだ。熱いお茶を飲んで横になると、すぐに滿足な眠りに誘はれてしまつた。
「惚れてくれた」は一時預金で、その利子として女は愛情を永久に拂ふ――そんな、ふてくされを私は考へはしなかつたが、ただ、ぼんやりして、そのくせほほゑみながら今朝からなんにも食べない空腹を、お茶を飲んでまぎらした。忍んでペンを走らせてゐると、突然、
「おねなさいつたらおねなさい。」
血の出たやうな眞赤な眼をむいて、枕をあげた彼は、自分でもびつくらしたほどの聲で怒鳴つたが、すぐまたいびきをたてた。
透洩る夜更けの風が身にしみることよ――

菊池寛氏に對する質問

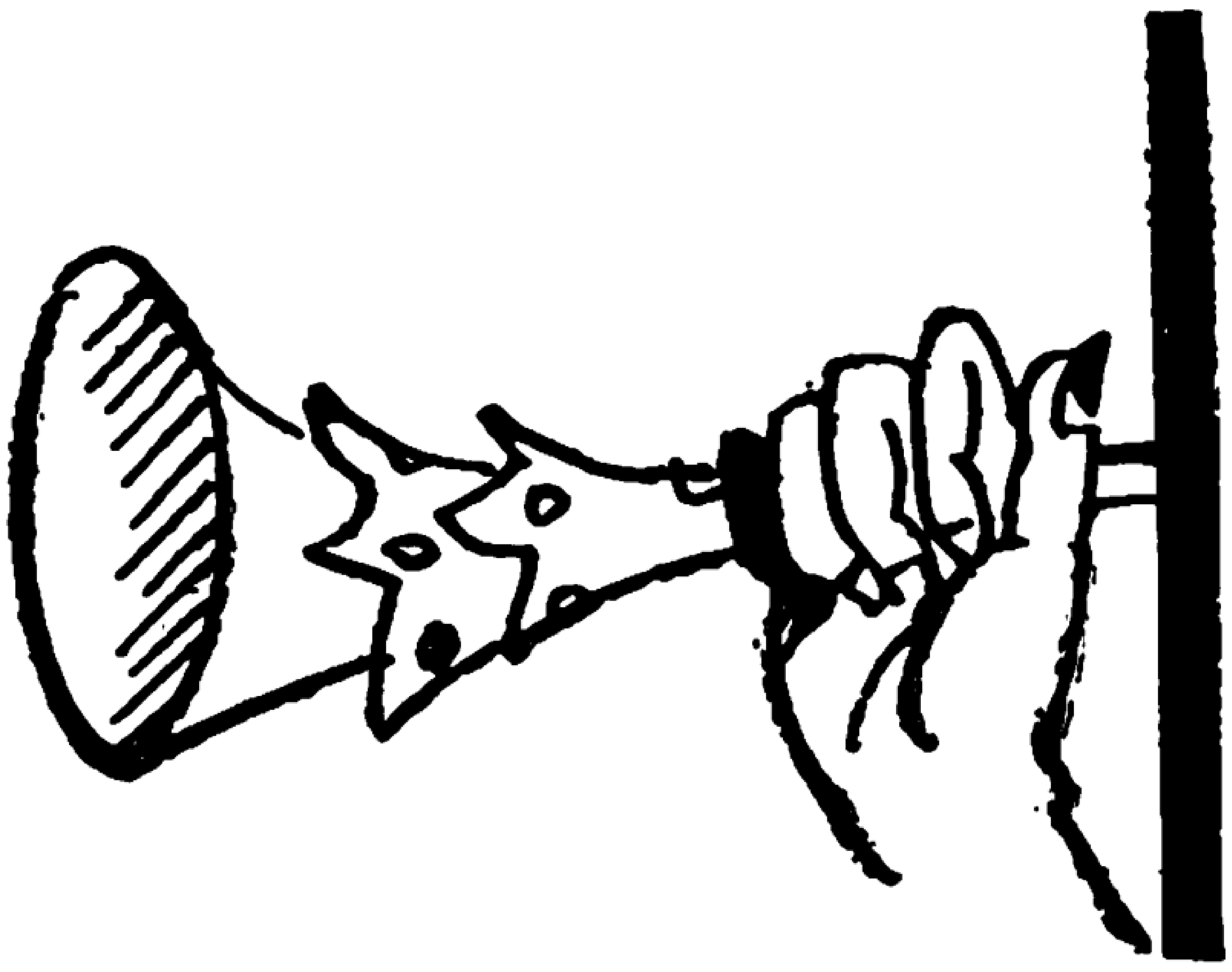
中本たか子

1 人生に於ける戀愛の價値は？
2 他人の戀愛を傍觀なさる時のお氣持は？
3 今後戀愛をなさるお心がありますか。あればどういふ氣持で？
4 過去の戀愛に於てどんな女が今でも一番頭に殘つてゐますか。
ロ 現在戀人を幾人持つて被在いますか。
5 戀愛をお感じになる動機及びその對象の推移は？
イ 初は？
ロ 現在は？
ハ 今後は？

その答へ

菊池寛

1 人生に於て、戀愛を重要視しない。
2 馬鹿々々しく見える。
3 豫測出來ない。
4 イ 惱まさない人は好い氣持が持てる。
ロ 少し好きな人が二三人ある。戀人としては一人もない。
5 幾度も會つてゐる位から生じて來る。對象としては、
イ 女であれば好かつた。
ロ 聰明な二十前後の人。
ハ 今の續きから展開するだらう。



チャルメラの記錄

八木秋子

親戚の不幸で關西に旅行してゐたA子がXのもとに歸つてきた。六月の快い夜、明るい灯、サイネリアの鉢がある。

「きみの留守にB子がきて泊つて行つたよ」

「え？　花園百合子さん！」

「うむ。就職問題のことできみに相談にきたらしい。俺はちやうど外出してゐなかつたのだが、留守にきて勝手に上つてゐた。夜おそく歸つてくると彼女がネーブルを食べてゐたよ。それから話してゐるうちに時間が遲くなつて泊つていつた。詰らない女だね。」

「どんな話なの……？」

「ホテルの女ボーイをやめて、硝子商店の會計にならうかつて言つてたよ。もつとも、實は彼女にいま結婚問題が起きてるらしい。彼女の親戚にあたる遞信省の課長の世話でね。」

「その課長さんがあのひとの誇りなのよ、ぢや、いよ〳〵そんな氣になつたのかしら……で、どうしやうつていふの、本當は？」

「それが例によつて煮えきらないのさ、氣持の理解がどうだとか斯うだとか——憫むべき文學少女だよ。」
「先方はどんなひと？」
「再婚者でこどもがひとり有るんで遞信省のお役人なんださうだ。彼女はそんなビジネスマンより詩人か小說家とでも結婚したいんだらう。」
「あのひとの趣味ではね。」
「ところで彼女はどうだ。あの面相、あの年齡、そして少し胸の病氣ぢやないか、おとなしさうに見えて多情なはうなんだからな、困つたものさ。」
「あんたはさういふけれど、あの人が結婚しやうつて氣になつたその心持を思ふと、何ともいへないわ、それであんたは何ういつたの？」
「嫁にいつちまへつて言つてやつたのさ。早く嫁かんと賣れのこるつてね‥‥A子みたいに。」
「あたしみたいに？」
「いや御免、ごめん！兎にかく彼女が君の交友範圍にあるといふことは、僕にはわけがわからんよ、世間師でありながらいやにセンチメンタルなんだからね。いやだな、彼女もをれがやさしく言はないものだから聊か不機嫌のていだつた。」
「そして朝歸つていつたの？」
「うん、勤めがあるからつて七時ごろ出ていつた。う、ふ、ふ、ふ、ふ‥‥‥」
「何がおかしいの？」
「いや何でもないさ、‥‥だが彼女ごときには有繫のをれも性慾をかんじなかつたよ。女さへ見ればすぐ食指大いに動くといふ俺がだよ。あの晩も、どうしても、こつちからチャンスを避けた形だね。」
「向ふさまでさけるわよ、‥‥妙な顏をしてるぢやないの、あら、あたし妬いてやしないことよ、どんなひとが泊つてどんなアフェアが作り出されたつて平氣！　男つて愚劣なものね、己惚れがつよくつて‥‥でも眞面目にきくのだけど、男つて何んな女にでも手が出せる？」
「先方の女さへ氣があるなら變化の多い方がいい、F、G、Hといふふうに次々に‥‥結婚なんかといふ奴は要するに自己僞瞞だね。」
「さういふあなたこそ自己僞瞞よ」

「……なぜ？」

「結婚を否定して、そして女の社會的自覺や獨立を口にしてるぢやないの。そのくせ百合子さんには早く嫁けの結婚しちまへのつて……よくもそんなお座なりがいへたもんだわ、よけいなお世話だ。」

「花園女史ではね、あれではどうにも緣なき衆生だよ、しかし、ぢや女は自己僞瞞ぢやないのか？」

Xが机に向つて筆耕をしてゐる。クレープの襯衣に猿又だけ。バットの灰がそこら中に落ちてゐる。そこへ、靑いパラソルをさした千草澄江が訪ねてくる。

「やあいらつしやい。」

「あの、A子さんは？」

「勤めから戻りませんが、まあお上りなさい」

「あなたがXさんですか、はじめまして」

「面倒ですね……お午ですが飯はどうします。ぼくはパンで濟ますのだが……いかゞです？」

「いゝえ澤山……頂いてきましたから。」

「噓でせう、だが遠慮は美德なら仕方がない。ぼくは食べますよ」

「どうぞお構ひなく……どういふ動機で結婚なさいましたの、伺つて見たいと思つて……」

「結婚？　だれの。」

「そんなに外さないでもよろしいでせう、あなたとA子さんの御結婚——」

「さあ、惚れたからでせうね」

「……どんな過程をおとりになりまして？」

「あ、野合ですよ。動物的にね。」

「まあずゐぶん……それで新生活の御感想といつたやうなものは……」

「あなたは確か事務員から野菜新報の記者になられた方でしたね……」
「お逃げにならないでもいゝでしよ。」
「花園百合子さん知つてゐますか？　彼女は最近求婚者があらはれたさうですよ。」
「えつ！　で對手はどなた？」
「さあ、ぼくは誰だかしらない。行つてきいてごらんなさい。」
「あのひとがねえ……さうですか、わたし一寸思ひだした用事がありますから、A子さん歸つたらよろしくつて言つて下さいね、失禮しますわ。」

「千草澄江がきたよ。」
「まあ、しばらくぶりだわ、待つてゝくれればいゝのに。」
「ところが、大いに悉劣だね、結局逃げかへつた形さ、彼女は未亡人だつたね、きみが勇敢にをれと野合したのを批判的な眼でみてゐたよ。」
「批判されるねうちもなさゝうね、これぢや、あのひと冷靜だからね」
「ところで何うだい、花園百合子の一件を聞かせてやると大いに周章てゝ歸つて行つたよ、男が欲しくてうづ〳〵してゐるくせに。」
「あなたの毒舌で胸がむか〳〵したからでせう。氣の毒したわ」

秋の夜、失業者三田細子が支那服でくる。三民主義者。
「あたし三田細子です。あがつてもよくつて？」
「A子さんはゐないが、間もなく歸るでせう。上りなさい。」
「支那は大へんな騒ぎになりましたのね、あなた三民主義をどうお思ひになる？　孫文の三民主義を！　あたしはいま支那語を習つてゐますのよ、そしてそのうち支那へ行きます。」
「ほう、仕事は見つかりましたか？」

「それが――けふも赤坂の溜池くんだりまで行つたのだけれど、自動車會社の事務で月給二十四圓ですつて。電車代が毎日往復十四錢とするとあと二十圓でしよ。食つていけないからこつちから斷つたの。」

「それは大變ですね、それぢや食へない。どうです結婚なさつたら。」

「それも考へてはゐますけど」

「あなたは獨身でしたね」

「ええ、だから結婚しちまつて就職難から脫け出さうかと時々思ふわ。」

「どうです、僕とはいけないんですか?」

「あらとんでもない。私、結婚だつて性的な要求なんか、ちつとも感じちやゐませんのよ」

「三田細子がきたよ。」

「さう! あのひと此ごろ、支那の留學生と同棲してるつて。」

「なあんだ」

「何か面白いことあつて? あのひとの三民主義は有名なものよ」

「さうか」

「近いうちにその留學生の兩親が日本へきて、正式に結婚式をあげるつて。」

「私有登錄か。」

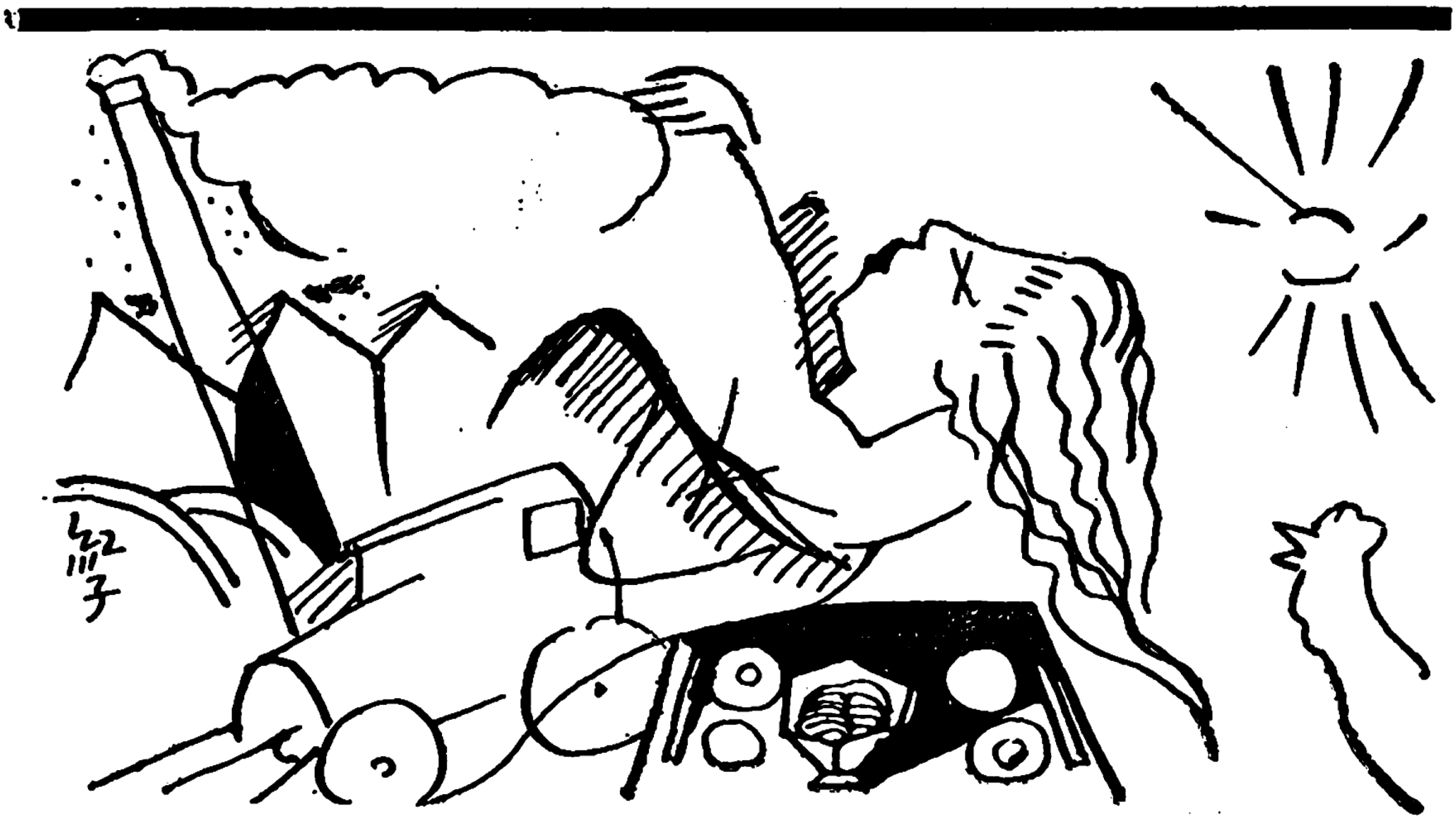
「細子さんがカフエ・ムーランの女給時代に、もつとも頻繁に一回五圓の口で通つたのがその支那の人よ」

「惚れてるんだらうか。」

「何だか、男の家がお金持だからつて噂よ、どうだつて構はないぢやないの、ああ、お腹が空いちやつた。」

冬の夜、××婦人會書記高尾ふなよが歸つて行つたあと、A子とX

「あれが有名な高尾女史よ、なか〳〵立派な理論もつてるでしよ。」
「あつ、チャルメラの音がきこえるね、支那ソバでも食べるとせうか、どうだい？」
「さうね、呼びとめませう。…あんた、あたしの友達の前であんまり皮肉いはないでね、まるであたしの交友關係をぶちこはしにかゝつてる」
「は、は、は、面白いひとばかりだな。」
「おそばを食べたらチャンバラ見にいかない？　割引のをね。」
「よらば切るぞはいゝな、贊成…チャルメラはね、なか〳〵素人にや吹けないよ、あの笛口の麥稈をぶつとやるんだがむづかしいもんだぶうつとね。」
「やつたことあつて？」
「うん、一月ばかしさ、面白かつた。きみは知るやチャルメラのデモをだ。は、は、は。チヤラメラを流してたいてい夜明の三時までは車をひつぱるね、それから下谷から淺草に出て、六區から吉原のはうにいつも歸るんだが、同業がね、やつぱりその時刻に千住か田原町のブロ街に屋臺をひいて歸るんだ。で偶然電車の通らない凍つた路を、ガタガタ一列に十臺も十五臺も續くんだ。すると一番先頭のやつがチャルメラを吹くんだ。すると面白いよ、十五人もの支那そば先生があとをつけて一齊にチャルメラのコーラスをおつぱじめる。交番の巡査が吸鳴る。安眠妨害だつてね。だが肯かずに三晩ばかりつゞけてやつたら、警察にひつぱられてね。」
「屋臺はどうしたの？」
「署の裏の空地にをつぼり出してあつたんだ。すると放免になつた朝、雪に埋れてゐる屋臺車を覗きこんだら、燒豚が一きれもなくなつてゐたよ、は、は、は。」
「行きませうか？」
「うん…おつ、そとは寒いな。」
「駄目こゝ、そんなとこに小便して、向ふから巡査がくるらしいわ。」
「どれ！　ほう。何かまふもんか、きみはあつちへ行つてゐたまへ。」
巡査はじろじろと湯氣のあがる小便を見ながら默つて兩人のそばを通つて、暗い裏町に消える。——



車輪の泥

――中篇『車輪は廻つてゐる』の一節――

山本和子

（一）

ちり／＼とおほやうに廻つてゐた太陽が、急に大鷲のやうな翼を大きく羽ばたきして高い杉木立の影に舞ひ下ると、その邊から追ひ立てられた群雀のやうにぱつとむし暑い夕風が飛び立つた。

彼女はふと、うたゝねの夢からさめた。そこにはやつぱり夫がゐないで、空しく差し伸ばされた彼女の肱が、頭の下から外れて、古疊の細い目に喰ひ込んでゐた。そこで彼女はいつも本當に目がさめるのであつた。

『やつぱりひとりだつたのか。』

さう思ふと體が急に冷くなつて、深い暗い淵に引き込まれて行くやうだつた。

『ひとりはこんなにも淋しいものだらうか』

さう呟いた小さい聲が、底無し沼に投げられた小石のやうに、果てしなく擴がつて行く波紋をくゞつて、深い水底に音もなく落ちて行くやうだつた。

『もう一度引き返さうか』

彼女の頸から背にかけて冷い汗がべつとり水苔のやうにへばりついてゐた。

西向の四疊半の腰高窓からはいつの程からか近道を辿る人々の足跡に踏まれた狹い一筋の道を殘して、雜草の伸びた廣い原つぱが見える。匂もない黄や白の花をつけた背の高い雜草が夕風に戰ぐたびに、赤土の地肌に落ちた網の目の明暗が、散らばつた小石の影にひつかゝつて動く。ぢつと草に見入つてゐると、貧乏生活の中に喘ぎ續けてやつと地盤が築かれたと思ふ頃、夫に捨てられ、子供を奪はれたといふ彼女一人の生活を中心にした丈でも、この都會の一隅に起きたさまざまな出來事を運んで來た五年間の月日のつながりが、草の線に溶けてもう幾年もの昔から、廣い曠野に立ち盡くして、只雜草丈を見續けて歩き廻つて來たやうに思へた。

そして、須田町の電車通りでメーデーのビラを撒いて、檢束されてぶち込まれた留置場の頑丈な鐵格子の間に散見する組合の闘士達の黒い頭も、赤く枯れて落ちた雜草の葉つぱのあたりにころがつた土まみれの石ころのやうに竝んで見えた。その石ころのうつ伏したもう一面には、希望と反逆を踩られて、永い間伸びる丈伸ばして來たゴム紐の上を切れる事を覺悟して綱渡りする貧苦と闘爭意識に引き歪められた多くの憂鬱な同志の顏がある。

曠野の片隅には、大きい建築物の土臺石を崩して運んだらしい、もろこし煎餅のやうな人造石の破片が、燒いた骨に水をぶつかけたやうにボロボロになつて散亂してゐる。

一切は取り崩されて、ひとたびは土壤の埃となるのか！

併し名もない曠野の雜草の細い徑には、埃のやうにぶら下つた黄ばんだ昨日の花の蔭に、今日は又新しい白い花が無數に開いてゐたのだ。

一貫張の机の上には××組合のビラが堆高く積まれてゐた。

側の演説の原稿用紙の桝目は何千かの字を待つて得々とあけられてゐた。

（二）

彼女は××驛前の電柱の影でビラの包みを解いた。

彼の女隣では萎びた老爺の手が動いて『ヴオルガの舟唄』の青いビラが飛んでゐた。

驛のベンチの上には若い女と、子供を手がけで負つてゐる若い母が凉んでゐた。ホームに省線電車が着く毎に背の子供と母の囁が聞えた。

『父うちやん來ないねえ』

『この次ぎよ』

それから若い女の足がベンチから二三歩はなれる。その眼が、電車の窓硝子に入り亂れる乘客の中から一つの影を拾ひ出さうと焦る。向ひ側のホームからブリッヂを渡つて來る男の群の中から、丸められた雜誌を握つた二三の本の手が高くさし上げられると、ベンチの若い女の手が微笑んだ唇のあたりにそつと持ちあげられる。

改札口のなだれはそれ〴〵の女と子供を浚つて引き上げて行く。

彼女の手から差し出されたザラ紙のビラが、無雜作に拒まれて只腑に落ちなさうな無遠慮な尻目丈が彼女の爪先と頭の先との間に引つ掻かれて行く。時に受け取られたビラは二三間先の路上で突然振落されて、男と女の足に、父と母と子供の足に踏まれて泥にまみれて行く。

萎びた老爺の手から差し出された青いビラは男と女の歩みをゆるめ、父と母と子の眼を吸ひ寄せた。

シグナルの灯が赤から樺色に、それから綠色に變り、ホームの端れの木柵の上に竝んだ廣告板の字がボウと青くなると、間もなく電車が驛の手前の鐵橋を渡つてやつて來る。幾組かの男女が老爺の手から青いビラを受け取りざま、彼女の差し出した手を胸高にしめた赤い帶の片腹で凹まして走り拔けて改札口に立ち竝ぶ。

コンクリートの階段を、磨き込まれたキッドとフエルトの草履がもつれて驅け上る。

ピリピリと發車の笛が響いて、警笛を踏んだ電車が組合はされた男女を乘せて夜の街へ疾走する。

今夜も、夕刊の三面には二つの情死記事と痴情の刄傷沙汰が三段拔で出てゐて、生活難で縊死した老人と演說會の解散の記事が廣告文に挾まれて窮屈らしくベタ組みで印刷されてゐるのだ。

彼女はレールに添うた木柵の側を步き乍ら、その陰から飛び出した犬が一匹であつても、うす闇の中からもう一匹のつれの飛び出して來る事を恐れて足を急がせた。下にころがつてゐるよく似た石ころが隣合つて二つ竝んでゐない事を願つて下駄の先で蹴飛ばし乍ら急いだ。

仄赤い灯かげが巾の廣い闇を引き裂いて彼女の足下を照らしてゐる。併し、光を背負つた彼女の足下からは始終長い影が尾を引いて彼女の行く手に落ちてくる。その影は次ぎの仄かな光に稍々薄らぎ初めるが、その光を通り拔けると、又足下からのこ〳〵起きた影が以前の薄

い影と交錯し乍ら彼女を追ひ越す。重り合つた影は怪物のやうに彼女の行く手ににょつきり立ちはだかつて見る〳〵長く伸びて行く。

(三)

『無産者の夕』が半ばで解散させられた。その夜の歸途である。

そこは暗い河縁である。

石垣の下には深い闇が巾廣く擴がつて人生の終局へ果てしなく續くやうに永く伸びてゐる。併しそこになみ〳〵とたゝへられたどす黒い水は、急に水嵩の增えた川口のほとりで固唾を呑んでゐる。そして時々一ところに不意に深い呼吸が初められると、河の全面には急に烈しい息吹が擴がつて、渦を卷き乍ら一筋の方向を描いてとう〳〵と流れ出して行く。

その先には夜半の滿潮にふくれ上らんとしてゐる海が擴がつてゐるのだ。

彼女はその夜初めて照介された、最近××組合に入つたS青年と竝んで河沿ひの道を步いてゐた。

河岸には網を下した一群が滿潮時の獲物を待つてゐた。

S青年は最近妻に逃げられた男である。彼女は夫に捨てられた女であつた。

暗い河沿ひの道を竝んで若い男と女が步いてゐるのだ。

『月を見ても革命を思ふのはいやですね』

うす闇の中で感傷が醱酵し始めた。

戀は背景と感傷の中で芽ばえるものである。

それから、飢えた男の手と女の手が待ちうけてゐた瞬間を機敏に掴み合つた。

男の手の小山のやうに盛り上つた太い節の間に屈折して走る血管が波を打つた。

と、急に彼女は下腹から小さい蚯蚓が無數に這ひ出して、胸のあたりで鹽をぶつかけられたやうにうよ〳〵のたうち廻るのを感じた。

全身の血球が一つ〳〵逆に廻轉して、しびれの切れた足を動かした時のやうなもどかしさが胸を澁くしめつけた。

彼女の體は重みのつかない風船玉が、空氣の壓力を突き除けて、無限に擴がつた天空の一角をさして昇つて行くやうによりどころのない

頼りなさに上つつて行つた。
が次の瞬間、男の烈しい息吹が彼女の頰にねつとりした熱い葛湯のやうにへばりついて、空に震へた厚い唇と、頑強な骨組に突張つた胸板が彼女の上半身にのしかゝつて來た。男の厚い胸板の包囲の中で彼女の全身を、大地からぬうと伸びた強い力が心棒のやうに貫いた。
『あゝ、私にはこの重みが缺けてゐたのだつた』
白い巾の廣い絹の布のやうに光つた河の水は、石垣のあたりまで浮き上つて遠くまで伸びた。

眞夏の朝の太陽の放射線が、目蓋のうすい皮の上で渦を卷いた。
狹い寢床の中で青年の汗ばんだ顏が彼女の方を向いてゐる。
昨夜、彼女をしめつけたなまあたゝかい男の腕が彼女の頸の下でゆるやかに伸びてゐた。
心から眠入つてゐる男の眼はゆるやかに閉ざされて、心もちふくらんだ目蓋が、大粒の銀杏の實を並べたやうに青く盛り上つてゐる。
彼女は昨夜突然現はれた素性も性格も知らない青年と一夜を明かした事を思ふと、あまりにも輕卒だつた事を後悔せずにはをれなかつた。
併し、彼女の五體の血管に沈滯してゐた鬱血がどことも知れずはけて了つて、四肢が自由に屈伸するのを見出すと、『これは決して間違つた事でない』と考へた。
『性慾を度外視した戀愛といふものはない。そしてよし、性慾が汚らはしいものとしても、そのために煩はされて、變態的に歪められて行く事は尙更くだらない事に違ひない』
彼女は今朝から又新しい力で仕事が始められさうに思へて『やつぱりこれは間違つた事をしたのでない』と考へた。
『そして勿論これは凡てでない！』
彼女の机の上には××組合で指導してゐる××會社の爭議團に飛ばす激文のビラが堆積されてゐた。
併し、彼女が體を動かした瞬間、男の腕がいきなり彼女の首の廻つて行く方向に水の上を辷る蛇のやうにする〳〵伸びて、彼女の細い頸へ卷きついた。そして、目をさましたSはもう一度この朝を盜まうとして、厚い胸板で彼女をしめつけて云つた。
『〇〇さん、幸福だね、この戀が終局を告げるやうな事があれば、僕は貴方を殺して、自分も死んで了つてもいゝと思ふ　戀のために決闘

したラッサールのやうな熱情のない人間に重大な使命が果し得やうか』

戀を自殺と殺人の隣に据える事を誓つた男の顔が不意にクローズアップのまゝぼやけていつしか日の經つた水寫眞の繪のやうに消えて行つた。そしてそこには、性慾と征服慾に燃え立つた別れた夫の似顔が彼女の額のあたりに近々とさし寄つて來た。

『これは又もう一度おさらひするのかも知れない。そしてもしかするとこれは間違つた事をしたのかも知れない』

机の上の一輪ざしの小さい口に黄金の車輪のやうに擴がつた向日葵の太い莖をきざむ刺の階に、青い蟷螂が這ひ上つて、長い前足の刺をうすい花瓣の縁にひつかけた。

併し、昨日の朝まで空いてゐた食卓の向ひ側には浴衣を引つかけた男が据えられ、食卓の上には彼女の茶碗とおつけの赤い椀の向ふ側にもう一組の茶碗と椀が置かれた。すると四疊半の部屋に廣々と感じられた空所が急に安置された一つの道具によつて埋められて、きまりがついた。

彼女は食事を終へると、ビラの包みを二つ作つてSと二人で外に出た。

Sは東の方に向ふ電車に乘つた。

彼女は西の方に向ふ電車に乘つた。

そして二臺の電車はSと彼女を乘せて二つの職場に疾走した。

電車の窓の下には未だ出來上らない修繕道路がレールの兩側に長く伸びてゐた。

掘り返された赤土の山には鶴嘴とシヤベルが交叉されて突きさゝれてゐた。

大きい枕木を高々と積んだ荷車の車輪は幾度も泥濘に喰ひ込まれ乍らも、車輪の周りに重なる泥と埃屑を、深い轍の溝に一つ〳〵飾ひ落して廻轉してゐた。

車輪は泥を落し乍ら、廻輪するのだ！　（一九二九・一・二一・夜）

附記―これは今かきかけてゐる中篇小説『車輪は廻つてゐる』の一節である。只、戀愛小説になりさうな部分を一部丈拔き書きしたので、從つて、新しい世紀を載せて走る大車輪の廻轉が紙數の關係で盛られてないが、後日まとめて、どこかの雜誌に發表するつもりである。



1

私の夫よ、
あなたは私を豚と罵つた、
私は豚です、全く豚です、
アルカリ性の髭を持つた
あの人の頬に接吻出來るまでは

2

ああ、私は、
私を拒むあの人の鼻から吹き出す
しめつた溫室の空氣の
又、もつれたブロンドの息を吸ひたい!
それはくさつた花束の中にのこつた
花の匂ひです。

私を罵つた夫に與ふる詩

村山籌子

3

私を淨めるものは
少しばかりくさつたこの聖なる、ものばかり

4

豚よ、豚よ、
みんなはお前を憐むだらう、
たとへお前が
清淨に洗はれた
コンクリートの上に住んでゐても
豚は豚らしきが故に輕蔑されるであらう。

5

つまりは
愛人の息を吸ふにある。
その中に私は見る、
悲しさを
美しさを、
又樂しき夢を。

6

私の夫よ、
あなたのたつた一言の侮蔑は
私をかく轉生させる。

7

永遠の愛人よ、
子供らしき私よ
私の夫よ
萬歳!!



ちか子

A Miniature Tragedy の

高橋鈴子

鐵柵の中へつめこまれたテリヤ種の小犬はけゞんげに大きな不安と、疑惑に閉込められた留置所の處女の様に、一日の間にひどく憔悴した。そして折々あきらめかねた狂女の様な、噛付きさうな、外に出たい、願望の悲鳴を洩い、鐵柵の中で吠えたりもした。

鈴子は肉も骨にまでも射通りさうな愛犬の悲鳴の聞える檻の後側で、深い海底に徐々と曳ずりこまれる様な憂鬱な心持をぢつと抱き締めて、蹲つてゐた。

小聲で二三度小犬の名を呼んで見た。

――レオ、レオ、

微かではあつたが、レオには聞慣れた懐しい主人の聲を、遙かな、幻の聲とでも聞いたか、鋭敏な聽覺を傾けて、靜かにも一度呼ばれる我名に聽耳を立てた様である。

――レオ、レオ。

呼んだ後の佗しい深い吐息を鈴子は、どうする事も出來なかつた。

レオは明瞭に、聲主の誰であるか、自分の檻の後側に、嗅慣れた香を嗅ぎ出すと、キヤンキ

ヤンと檻の中でけたゝましく吠え始めたのである。

全てが鈴子にとつて、氣紛れとも、自己慰安の衝動に駈られた一つの動的に表はれた、盲目的な行爲に違ひはなかつたが、また眞劍に、情熱に駈られた、結果のものであつた。

彼は鈴子が、行掠りにさへ、全然逢つた事のない異性の一人だつた。また、ラヂオの放送でさへ、彼の聲も聞いた事はなかつた。

彼は、藝術家であつたから、文藝講演を放送される位置でもあつたが――

たゞ、彼が愛犬家で、また薔薇を愛す詩人であり、小説家である事と、多くのフイルムに撮られたピクチヤアとを知つてゐただけである。

鈴子はこの到底不可能な動的に表はせない彼に對する戀情の無告な苦悶の中で、毎日を喘ぎつゝ、一日一日を瘦せて行く樣にさへ思へた。

レオは彼の愛犬の名をとつてつけられたのである。

鈴子は、彼の A miniature Tragedy 作の中のお孃さんの樣に、極度の情熱昂奮に駈られると、立つても居ても居られなくなつた。寒風の突堤を、夢中に歩き續けたりもしてゐた。晴れた海面を自失した夢遊病者の樣に呆然と、舟の帆だけを見た、大阪灣も反射鏡のレンズの中に映る樣に、はつきりと見えた。

大阪灣から南に續いて、紀州の山々が雲に連つて、茫然と、淨いてゐた。

――泉州だ、泉州だ――

二つの網膜に映つた紀伊の國に、狂喜の歡聲を擧げると、自分の大きな聲に意識をとり戻して、再び、泉州の山々を凝視した。

紀州は彼の故國であつたから――また彼の十何年か生立つた、彼の呼吸の漂つてゐる樣な懷しさからでもあつた。

鈴子は、もつと大きな、もつとはつきりした紀伊の山々を、彼の香を嗅ぎたいと思つた。丁度數歩後に、船の荷揚げ機が立つてゐた。五米程の高さに階段が下されてゐる。

A miniature Tragedy のお孃さんになり切つた鈴子は輕い足どりで階段を昇り切つた。

素晴らしくはつきりと見える樣な氣がした。

――山も、村も、藁葺の家々も、丘も――

――そんな處へ上つちやいかんぢやないか。下りい、下りい――

――おい。下りいと言ふに――

聲は荷揚機の下から呶鳴つてゐる看守の聲だつたのである。

今までの映像は看守の姿と同時に消えて、たゞ、も一度見納めに執着に駈られて一段陷下した階段から見た紀伊の國は、突堤から見た同じ山だけの姿であつた。

恥しい思ひをして、見上げてゐる看守の眼の前で、釣梯子の藝當

を演じながら、一段一段を下りて行くより鈴子には術はなかつたのである。

――一寸位昇つたつて、あたしの樣な輕い女が、壞れるといふ害ぢやなし――

戀を戀してゐる鈴子に言はせれば、幻滅と不滿と憤慨に、エックスキユウスは多くあつた。

カードからは、過去、現在、未來に幾枚ものダイヤが出た。また同數のハートも出た。

有頂天な喜びに數と同じ位のエプに、彼の住所を明記して、しつかりと針金をレオの箱に繰り付けた。レオの悲鳴を聞く事は、堪らなく憂鬱に曳ずりこまれる事には違ひなかつたが、また彼にレオと呼ぶあたしの愛犬を贈る氣持の快樂に、躊躇なく、荷造りを鈴子はしたのである。

聲の主が分るとレオはもう今迄通りに蹲つても、憔悴して沈默しても居てはくれなかつた。ガリガリと床を踏んで、鐵柵を猿の樣に搖り動かして、尖鋭に喚めき立てた。

食物の代りに一杯に投げこまれてゐた、薔薇の黄やピンクや、紅色の花辨が小さな牢獄の鐵柵の隙から、レオが動搖する度に、二三片宛土の上へ、はみ出て來るのであつた。

生々しい、香りの高い、花片は、半日の間に、萎れて、土に塗れて、儚れな殘骸を横たへてゐた。

それは莖についてゐた時は、白いうちに、ほの紅い花片で、最も外側についてゐるものは、日々に細い緑色の線を帶びてゐるのが見える程纖細な美をもつてゐた薔薇であつたのが――

小犬はしきりに憐憫の聲で、鈴子を呼び立てた。

鈴子は、ガムシヤラに小犬を荷造りの鐵柵から曳ずり出すと、力一つぱいの情熱でレオをしつかりと、胸と顔との間で抱擁した。そして、レオの頬と自分の頬を痛い程に擦寄せて、レオ、レオと呼んで見た。

有頂天な快樂と、情熱の中にだけ、生きてゐる樣な昂奮で、レオの發散するぬくもりを感じながらレオをぢつと抱き締めてゐた。

泰西名畫の中にある樣な、やはらかな温い陽ざしが、西班牙犬の家の中に鈴子とレオを、夢心地にさせて流れこんでゐた。

レオは彼であると思つてゐた。レオの優しい囁きは、彼の囁きだと思へた。

レオの涼しい瞳は、彼の近視のレンズの中に輝く二つの瞳だとさへ思ひながら――

だがこの彼に對する怪しい陶酔の短い後から起る、佗しさ儚なさ寂寥は、泥に塗れて、クタクタになつた薔薇の花辨にも似た樣なのであるに違ひないぢやないか。――



若きインテリゲンチャ

戸田豊子

彼がコーヒーを沸かしてゐる傍で、私はパンを切つた。もう十一時になつてゐた。起きてみるとデカダンな寝床でくさらした朝をさすがに悔まれるのであつた。彼がむつつり額の皺を深くしてゐるので、私も唇を尖がらし眉をよせてむづかしい顔をしてみた。

「不可ないね」

「不可ないわ」

「僕、こんな生活嫌だな。断然！」

「ぢや、私なら好きだとでも思ふの。」

火の強い餅網へのせておいたパンがプス〜〜燻ぶりだしたので二人共が手を伸ばした。彼は指をやいた。私はこつちの端を素早く摘みあげ、ひろげてあつた朝刊の上へ放り出した。あついのをガリガリ噛ると焦げくさい匂ひが胃袋をきゆつと酸つぱくした。私は小さい自分の顔が隠れちまひ相なパン片に歯を噛ませて鼻をならした。

「あなた許りがコンミユニストぢやあるまいし。私だつてよき意志を持つてるんですからね。今朝のやうなことばかりしてたら我慢ができないわ」

「異議なし。でも、どうだか」彼は笑つた。コーヒー茶碗の陰からギロリとした眼を覗かせて。

「起きよう！ぢや起きませう。起きようよ。起きませうよ。起きよう！　ぢや――」

「いいよ、もう。」
「――だつたんでせう？　だからお互に惡いのよ。つまり貴方の方はコンミユニストだけに一層惡いのよ。墮落、ダラ・コム」
「だけど、僕はこれから歸つて仕事に三倍の馬力をかけるよ。Tさんは僕が歸つたらまた寢るつもりでゐるんだらう。でなきや煙草をのんだり、ぼんやり考へたり、鏡を見たりして日を暮らしてしまふんだらう。ニヒリストなんだから」
「そんな事ないわ。矢張仕事をしますわ。三倍の馬力で」私はできる丈の生眞面目で胸を反せた。自信ありげに膨らした頬ぺたをしつぺいでポンポン彈いた。「ニヒルだつて、ぴしぴし彈き出してゆくつもりよ。私のよくならうとする意志といふのがわからないかしら」
「そんな主觀的な「よき意志」なんて問題にしないさ。客觀的に、あなたが果してゆく役割だけを見るんだ。コンミユニストは」
意地わるくさう言つた。だが、彼は三倍のエネルギーを費す筈の仕事へなかなか歸つてゆき相もなかつた。鞄と學帽を棚から取つてからも、膝ののびた黑いコール天ズボンをはだけて火鉢の上へ蓋ひかぶさりぐづ〳〵してゐた。學生運動の範圍であつたが非合法に近い運動をやつてゐるので、眞面目さと、かげと、鋭さで、年よりずつと老けて見せる顏を持つてゐた。
「お湯へはいる時と、寢る時と、ここへ來る時だけだね。のび〳〵と仕事から解放されるのは」
「ぢやそんな氣持でだけ私のところへ來るの」
「ソリヤ一緒に仕事のできる同志だとなほいいね」
「私もさう思つてよ」
「三月の休み中ずつと一緒にゐようか。ABC・オブ・コンミユニズムから語學もはじめようぢやないか。その代り仕事もたくさん手傳はせるよ」私は一も二もなく賛成した。
「あつ」それから思ひ出して「誕生日には來てくれるんでせう」
「どんなご馳走をするんだ」
「牛肉を――五十錢。それつきり。」
「貧弱だね。ぢや僕も蜜柑を三十錢にパンを二十錢か買つて來ない」
「いいわ。それから無・新のお金を上げませう。一ヶ月分だけ、今月は郵税がいらないのね。新聞の出る度にここへやつて來たんだから」
「だから電車賃がかゝつてるよ」
「やあーだ、慾ばつて」
考へてるつて？　何を？　僕等は餘り考へる必要なんかないがね と、かれは言ふ。ニヒリズムの匂ひがちつともしない。私はよく新鮮な人間を彼に見る。
誕生日なのに二人で二三杯のんだ後、彼は私からブドー酒の瓶を取り上げてしまつた。

「コンミユニストは醉つちや不可ないんだ。さあ今夜から、規律的な意識的な生活をはじめよう」さつさと机の位置を替へて一方の端を自分の前へひきよせ、持つてきたプリントをのせた。赤鉛筆の先で、火箸をつかんでゐた私の手を小突いた。

「さあ、こないだのパンフレットをまだ讀んでないんだらう。あれ非常にいいんだから讀んでごらん」伏字澤山のパンフレットへ目を曝しながら私は別の考へをおひまはしがちであつた。頁を繰るよりタバコへ火をうつすことの方が多かつた。知らず知らず、火鉢へ向き直り火箸いぢりをはじめてゐる自分に氣がつく。

　仕事と友人に明るい喜びをもつ自分に較べて病氣勝ちな可哀相な子供のことが思はれてならなかつた。夕方届いた母の手紙は、肋膜らしい――と、彼女自身の取亂した心配も露はであつた。結核でたほれた父親のことを思ふと私は暗い氣がして來る。

　ふと彼が顔を上げた。ふところ手をぬき出して火鉢へかざした。

「Tさんの子供、今年いくつ」

「八つ。幼年倶樂部の愛讀者なの。いやになつちやう。クラブつて名のつく本を私は嫌ひなのに」わざと明るくさう言つた。

「その子、早く大きくなるといいね。僕、指導してやるよ」

「ほんと。お願ひするわ。私あの子こそ交りつけのないピオニールにしてやりたい」暫らくして

「あなただつて、もつと確かりしなくちや不可ないのね」

「何故」

「あなたの樣な人にさへ、非合法主義者として立つにはまだ色んな夾雜物があるから」

「うむ。どんな點」

「お坊ちやんらしい所や、若干のセンチメンタリズム。こないだもお父さんのことで參つてらしつたでせう。あんなことで里心を出す樣ぢや、もうおさらばよ」

「今夜はあべこべに說教されるんだな。煙草はもうないの」

私は中味のあるバットを見つけてやつた。

「Tさん」

「あ――」

「僕等も子供を拵へようか」

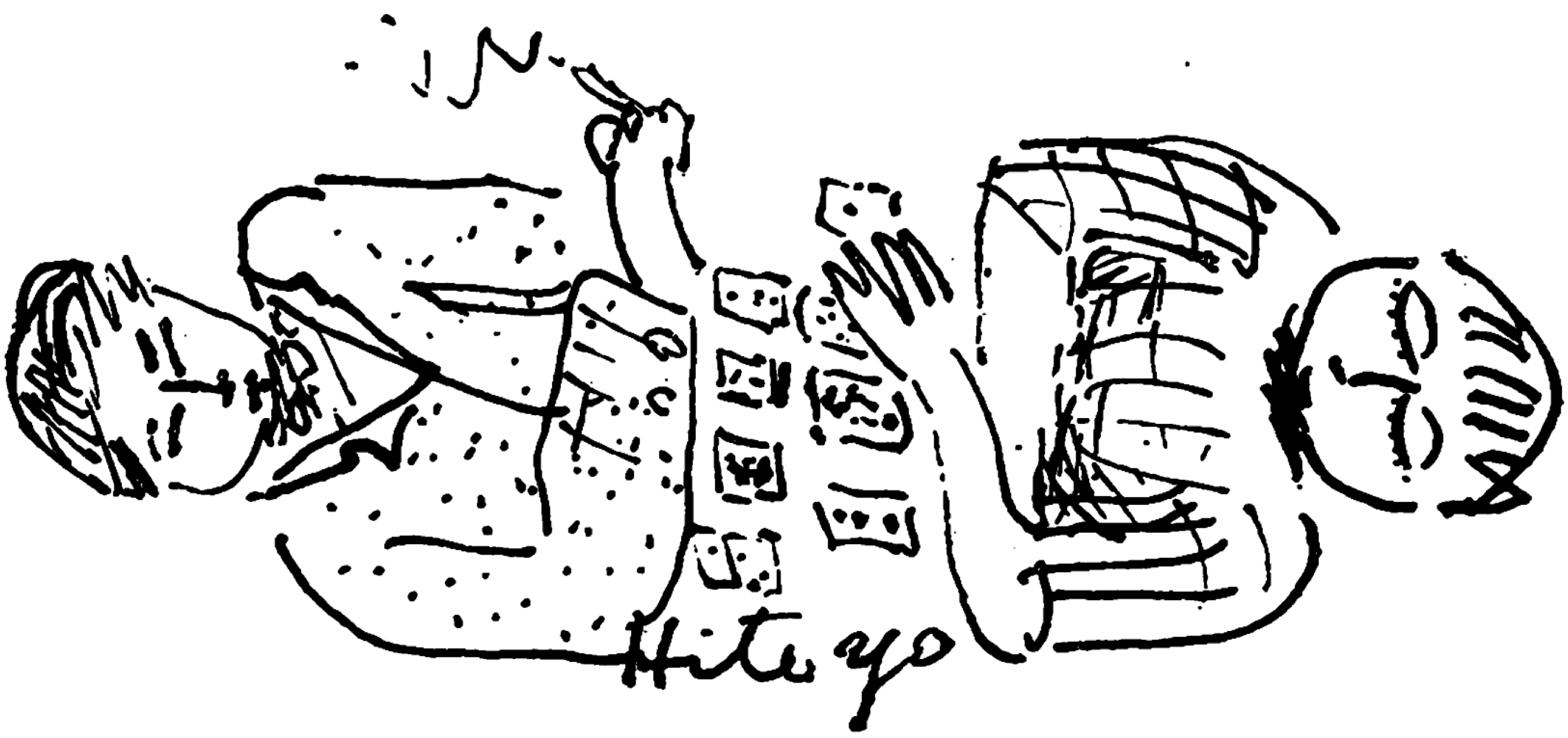
「いやだ」

「何故？」

「何故つて、色んなことを考へるから」

「さうかな、僕眞面目なんだが。もう何時だらう」

西武電車の警笛がはつきり耳についた。ダツク、ダツク吠え續けてゐた近所の洗濯屋の夜業の蒸氣も何時の間にかひつそりとしてしまつた。鼠の群が恐ろしい音を立てて天井を走つた。私は机の上に伏せてあつた懷中時計を掴み自分で一寸見てから彼の方へも向けて見せた。二人はもう愛し合ふ事の外には何にも考へてゐなかつた。



時代の泡沫

素川絹子

生活が行き詰りに逢着した時に、尋常な女が誰でもするやうに、彼の女は結婚のことを思ひ浮べた。知らず〳〵人生の迷路にさまよひ込んだ彼の女に、結婚はたゞ滅茶苦茶な方向轉換の一種にすぎない。

――この出鱈目な方法が、もし彼の女に生活の希望と喜びとを囁いてくれたら、彼の女は神と人と、其の他の生きとして生けるものに感謝を捧げるであらう。もし又人生が、一そう憂うつな、怖ろし氣な面をのみ彼の女に向けたら、その時は物置きのやうに種々な思ひを積み込んだこの胸の隅へ、やつぱり積み込んでおくことにしやう――。

黒々と大地は凍てついてゐた。怪しいシエルエットのやうな二つの影がサパ〳〵した沈默の夜氣を分けて行く――冬の眞夜中に野を歩いてみたことがおありですか――大氣は透徹して、

冷々と輝き渡つた空には、大小の星が明滅を爭ふ。武藏野特有のなだらかな起伏に盛り上つた地平線を、霧と月とが白々と浮び上らせる。

――向うの丘、ずいぶん綺麗だ!

彼の女の唐突な叫び聲は、外氣の鋭さと、輝かしい霧の恍惚に埋沒した獨語にすぎない。

――遠くばかり賞めて……この畑を御らんなさい。

動き返された土の間に、夜光蟲のやうに霜が光る。だが、要するに彼の聲も、風にやる可き獨り言だ。

きびしい透明な冷氣と、喰ひ入る宇宙の靜寂とは不思議に情痴の感情を完全に拒否する。

カサ〳〵鳴る野菜の枯葉と、規則正しい麥のうねの美。

一群の杉林の空間は藝術的な効果をしひる。

眠つた家の姿と水の音。大きな生きもののやうな水車が悠然と時代精神を無視して永遠に地球と步調を同じくする。軒下に意氣地なくはためく煙草の看板。

夜と神祕とがなすりつけた一枚の繪の現實!

彼の女を憂うつにする思想の一切が、胸をすべり出すのを感じた彼の女は、燈火の下に歸つた時、頰は紅く、眼は生々と輝いた。

――素敵に綺麗だつたのよ。

さういふ彼の女の聲の朗らかさを、友だちはやさしく笑つた。

――一時間の岡の夜景は、戀を醸成するに充分だ。――と友だちは考へたのだつた。

花骨牌の部屋の空氣が彼と彼の女との結婚を諷刺する。友達たちの歡聲が祕やかながい歌を奏する。二十才を三つ四つすぎた女にとつて、それが早いといふことはないかも知れない。しかし緣談とは何と怪しい氣なものであらう?

――女がいくら威張つたつて、生活難は男ほど深刻ぢやない。女は仕事がなくてもお嫁に行きさへすれば食べさしてくれる。かせぐために養育された男に仕事がなかつたら……。

結婚とは榮養不良の支那ソバヤが吹くチャルメラでゞもあるといふのだらうか、電話一つで首のかけ替へをおびやかされる薄給な俸給生活者の苦い喘ぎと、女を養ふ男の優越感とをなひ交ぜた友だちの良人は、生れて間もない赤ちやんをあやしながら、子守唄の代りに唄ふ。悲慘なパラドックスだ。橫目で笑つて彼の女はあまのじやくな承認を示さないわけにはゆかない。

全くお有りがとうございます。お嫁に行きさへすりやあねえ、フフ……。

あらゆる自然的なものを輕蔑する現代は、同時に自然的なもの丶可能を否定する。形式の自由を護符に撒いたリベラリズムに、感情の自由が反逆する。

男も女も、電車の中はレデイメードの特賣品。すべてはお嫁に行きさへすればねえ、だ——せめてこの事だけでも眞實であれ——

彼の女は、彼の眼を眞直ぐに凝視しながらきつぱりと云ふであらう。

——自分達は一緒に生活することに、美しき必然を感じたわけではない。自分にとつて結婚が必要の信號を掲げたまでだ——と。

言葉の先端には、なけなしの彼の女の誇りが改良半紙のやうにはためくにちがひない。身體を絲杉のやうに眞すぐに、眼を劍のやうにたじろがすことなく、彼の女はそれを云ほう。

だが、思ひがけない不幸な結果が訪れた。

燃燒しない純潔のやうな、いじけた、纖弱な櫻草が、花屋のショーウインドを完成する。

三月！ 青い裾、赤い唇、長々と描いた眉が、麿風に悠暢とゆらめく太陽の中に五彩の波を織る。

彼と、彼の女と、友だち夫婦とはやはりその波の一鱗だつた。

のぼり、立ち賣り、廣告塔！

廉賣のメリンス屋の二階で、音樂隊が神經衰弱を亂造する。

不意に彼の女の眼が、波を分けて彼の後姿に迫つた。

肩のやけた薄青い服の美事は魅力！

弱々しく脊の高い彼の肩幅の、これはまた何と廣く頼もし氣に彼の女の瞳を高揚することよ。

彼の女は水の波紋のやうに限りなくかぎりなく瞳を擴大して自分の感情を讃歎する。

しかし——たつた二時間まへに、その人の好い微笑の中に、彼もまた結婚を必要してゐる種類の人間だといふことを感じたばかりの彼の女ではなかつたか？——

この瞬間こそは、必要の價値が慘虐に彼の女に復讐する。

渦卷く混迷と煽情！

やがてこのこつけいな激情が、バロメーターの最高度を示す時、彼の女は愛しさのあまり彼に飛びつく代りに、こつそりと踵を返して、見捨てられた道化者のやうに、踊り乍ら巷の雜踏の中へ消え失せる。





T

三宅やす子

クリスマスの晩に、教會の祝會にゆくと、私達は、教會の知人からの贈り物を、膝の上の風呂敷の中に、ポン、ポンと投げ込まれる。空の風呂敷は、忽ち大きいのや、小さいのや、紙包で一杯になる——それは私の娘の時分の話である。

みさをさんのうちは、教會の有力者だつたから、みさをさんの風呂敷の中は、一杯で包み切れないほどの贈り物が重つた。私は——そんなに澤山貰ひはしない。が、やはり、風呂敷の四隅を結ぶと、ギッシリと一杯になつて、少し角からはみ出した。

ある年のクリスマス。

家に持つて歸つた風呂敷包を開けて、中から水引やリボンのかゝつた紙包を、一つづゝあけて行つた。只一つ、白いハンケチに包んだ小さな贈り物、ハンケチの結び目に、私の名宛のかいた札がついて居たが、それを後からポンと投げ込んで行つたのは、みさをさんの友達の定夫さんだつた事だけは知つて居るが、定夫さんたら、みさをさんには上げるかもしれないが、私が貰ふ覺えはなかつた。

「でも定夫さんのいたづらかしら」

ハンケチの中は、きれいな机上の飾りもの、其どこかの隅に、T、H、と小さなペンのあとをみつけた。

「H、林さんつて定夫さんが教へてくれたあの方かしら、でも名前が」

「つひ此間から毎週聖書の講義の時にだけ見る定夫さんの友達、歸りに出口でおじぎをして歸るあの人なら、定夫さんが、林孝治と名

を書いて見せた。K、Hならわかつて居るけれど、T、一寸考へつかなかつた。

其次の日曜日に、私とみさをさんは、いつものように禮拜前の聖書の講義の小さな室に腰を掛けて居た。定夫さんも林さんも、すぐ後の腰掛に居た。

「此間は有り難う」

と唇まで上つて來た。が人違ひみたいな氣がして私は默つた。

何でも然し、あのハンケチ包みは、林さんからのとしておきたかつた。さうでなければ、つまらなかつた。

私は、一寸後を振り返つた。林さんが聖書をふくさから出しかけて居た。ふくさの端に、Tといふ字がチラと見えた。

「タカハルと讀むんだわ」獨りで考へた。

室の出口で林さんにぶつかつた。

「此間はありがたう」小さな聲で云つた。

林さんは可愛いゝ眼で笑つた「どういたしまして」とか何とか云つたのかも知れない。私は間違ひなく、林さんがあの贈り物をくれたのだとわかつて、其日は愉快にはしやいでしまつた。

定夫さんと林さんの共通の友達に山口といふ人があつた。山口さんは快男兒だつたが、無邪氣に誰とでも話す割に、女の人には好かれなかつた。何となく、見るからに、一寸こわいような顔つきだつたので、誰がつけたか、「田螺(たにし)」といふあだ名がついて居た。「たにし」の名は何からついたのか、ちつとも理由はわからないが、山口さんといふよりも、「たにし」で通つて居た。

山口さんは愛嬌者だつた。たにしの名は可哀相な位だつた。でちみさをさんなんか、よく「此間、たにし」がね」と云つて話した。

私も山口さんとは、話をしたが此間林に逢つたらとか、定ちやんが遊びに來たとか、そんな事を云ふのが話題だつた。

さて、私は、あの日、林さんから贈り物を貰ふ前から、初めて林さんの顔を見た時から、何となく好きだつたのだ。「此間はありがたう」と云つてしまつてから、急に親しみが通(かよ)つてしまつたような氣がした。私はそれからも、いつもの通り、毎週、默つて、おじぎをして別れるだけだつたが、日曜日が待ち遠しかつた。

それにしても――私は考へた。來年のクリスマスに私も何か贈らう。その時はこちらの名を書かないで。書かないでもあの方にはわかつて貰へるだらう――其空想は然し、待遠しい事だつた。一週間でも相當に長いような氣がする。それを一年も。

私は或る日、私のさゝやかな小遣をさいて、色彩のいゝ小切を買つて來た。それを人の見ないところで、時々針と絲で加工した。人の見ないところ、と云つても大抵の時、誰かの眼をさけるわけにはいかなかつた。「どうするの?」と聞かれたら、私の嘘は、それから

それと破綻してしまふ。

やつとの苦心で、小さなものが出來上つた。半紙に包んで、ぴつたり糊づけをして、中がわからないようにしたものを――またハンケチに包むのはあまりに智惠がないから――袂にひそめて、定夫さんに渡す機をねらつた。

定夫さんは、みさをさんの只の友達だし、私も定夫さんとならいつもキマリが悪くなく話が出來る。林さんの贈り物を托されて私によこした人だから、私の渡す包みものは、當然、林さんに贈つて貰へると思つて、一寸した時に定夫さんに急いで手紙の包みを渡した。

「これ、Tさんにあげて頂戴」

定夫さんは、心得て頷いて、すぐにそれを外套のポケットに入れた。少し離れた往來で、林さんが立つてこつちを見て居る。定夫さんの出て來るのを待つて、一所に歸るのだらう。

其歸り途で、定夫さんから、あの包みを受けとる林さんを、私は想像する事が出來た。中を開いて見た時――と考へると私は頰があつくなつた。「貧弱なおくりもの。でも仕方がない。使ひみちのあいまいな金を、一錢でも使ふことの出來ない境遇なのだもの」

次の日曜日、私は林さんに逢ふのが一寸氣づまりだつた。逢つたら何か云はれやしないか、また、「此間はありがたう」と云ひ返されたら、私は返事に困つてしまふ。いつそ、一度だけ何かの差支で林さんが來ないといふような事になつてくれたらいゝのだが――

と云つて、わざ〳〵私が其日を休むだけの氣もなかつた。キマリが悪いなりに、又、林さんの云ふ言葉も受け取りたかつたのだ。

いつもの時刻、講師のまだはいつて來ない聖書の室。そこで私達は、何の談話もするのではない。只並んだ腰掛に、腰をおろして居るのである。私とみさをさんは、後にはいつて來た定夫さんと林さんの聲を感じた。それつきり、私もみさをさんも、何かの話をして居る。私は自分の後に林さんの視線を感じながら、他の人も居るし、めい〳〵默つてゐる。講師が、

「ヤア、遅くなりました」

と云つて、ガリラヤの海がどうとか、話しはじめる。講師は熱心に地圖を示す。私の眼も地圖の上に落ちる。だが、私の心は、うしろの林さんの視線の上に走る。

やつと講義が終つた。私達は一齊に出口の方に進んだ。

其扉のそばで、定夫さんは、

「此間のね、たしかに渡しましたよ」

と云つた。それまできくと、もう何も云つて貰ひ度くないほど、すぐうしろに居る林さんにキマリが悪くなつた、が、定夫さんは頓着なしに、得意の色で次の言葉を續けた。

「たにし」がどうもありがたうつて」

「………」

ヒヤッとして私は定夫さんの顔をみたまゝ、何にも云へなくなつ



「サロメ」　ダイクトル・ミユウレル畫

てしまつた。

誰が、「たにし」にあれを渡してくれなんて、此人に頼むものが。

定夫さんも、あんまり迂闊な人だと思つた。腹が立つて泣きたくなつてしまつた。何もしらないで少しうしろの方で、こつちを見て居る林さんの、ニコ〳〵した眼まで情なくなつてしまつた。

「これをTさんにあげて頂戴」

さう云つた云ひ方が、こんな間違ひを起したのかもしれないが、それにしても、Tと云ふのを「たにし」に結びつけなくても——

其翌る日、私は山口さんに道で出遭つた。私は、云ひ難い耻を感じて下を向いて默つて通つた。ゆき逢ふときに、

「此間はありがたうございました」

とはつきり山口さんはお禮を云つた。私は定夫さんに怒る代りに、山口さんに心で詫び乍ら、眞赫になつて會釋をしてすれ違つた。

其後　私と林さんは、もつと親しくなつたけれど、あの贈り物の事だけは決して云はなかつた。此間思ひ出して、妹に此話をしたら、

「まあ、そんな事があつたの、ちつともしらなかつた」

と妹は感慨深い云ひ方をした。

手紙の使をしてくれた事もある妹は、

「いつの間にそんなものを縫つたんでせう」

といふような眼で、やがて笑つて、

「それでTさんは知つてるの」

「知るもんですか。私が話さないもの」

私の笑ひ顔の中には、はかなくても輝かしい處女の日の夢が、こだまのように響いて、笑つた。



一九〇九年ごろ

山田邦子

佐賀子の過去にはすばらしい戀愛があると人は思つてゐるらしい。佐賀子はそれを時々不思議に思ふのである。

佐賀子と同鄕の信州生れで、此頃しきりに評判の高い新進女流作家H女史の小說などを讀むと――それが必ずしもH女史の經驗小說身邊小說とばかりは言へないかもしれないが――佐賀子は時々つく〴〵と自分の過去なんかナーンだお姫のおままごとみたいなものぢやないかと自笑したくなる。とりたてゝ過去を語つてみた處で現代人が驚くやうな小說の材料には一向にならない――勿論小說は人を驚かせる爲に書くものではないが――例へば人に騒がれたとしてもせいぜい行き止りは定つてゐて接吻一つでも許すの許さないのと野暮な議論をしたやうな…考へればそれも時代であつたとも考へられる……。

佐賀子が、明治四十三四年頃、新興文學にあくがれて、一かどの詩人になりたい志望を持つて親の許しを受けないで單身上京して婦人記者をしながら勉强してゐた頃の事

である。後見に親はなし從つて金はなし、それで人の目につく顔だちだつたらその周圍が騒がしかつたのは事實であつた。

日本女學校の生徒が郵船會社の船に乘つて東京灣を一週するといふ通信がはひつたのでその船に一緒に乘り込んで朝刊の家庭欄をにぎはすやうに部長から命令されて田舍出の婦人記者佐賀子は始めて横濱港に向つた。その往きかへりの汽車のなかで、京濱の沿線で海の見えるTあたりの山の中途に如何にも清閑な家がさゝやかに散見するのに目をつけて、あれはどういふ家であらう。あゝした氣持よささうな家に住んでみたいものだと心のなかで思ひながら眺めて通つた。

編輯室に歸つて其日の記事を書いて部長に屆けた時に何も知らない佐賀子は不用意にその話を部長にしてあれはどういふ家であらうかと聞いた‥‥その頃佐賀子は間借にあきて小さい家を借りたいと思つてたから‥‥

「安田さんあれは料理やの離れ座敷ですよ」

部長は佐賀子を見上げて可笑しさうに笑つたけれども佐賀子はその笑ひに別に不審をもたなかつた。――四五日前に新宿の銀世界といふ料理店で心中ものがあつた通信がはいつた時「新宿に銀世界などといふ料理やがあるかね」と部長が言つた。佐賀子は自分が初臺の家から毎日新宿追分に出て電車に乘るのであるがその途中に銀世界といふ小料理やがあつた事を思ひ出して「ありますよ」と言ふと二三人の記者たちは面白さうに笑つて「女史が知つてゐますよ、」と言つた。その時佐賀子は料理やを知つてゐれば何故をかしいのだらうと憤慨したのである。今日も亦料理やの離れ座敷なら何故可笑しいのかと不快であつた。

或る日の夕方佐賀子が家に歸らうと社を出て來ると、大崎と、小田といふ二人の記者が電車線路を人待つやうにゆる〳〵歩いてゆくのが見えた、大崎も小田ももう中年に近い年齡であつたが大崎はおしやれで金ぶち眼鏡をかけいつも顔の手入を怠らないやうな記者であつた。佐賀子は此二人は日頃特に好きといふでも亦嫌ひといふのでもなかつた、‥‥佐賀子が一禮して二人の側を通りぬけやうとした處で

「安田さんー」と小田が聲をかけた。

「一緒にコーヒーをつきあひませんか、銀座まで歩きませう」

と誘ひかけた、佐賀子はすぐに賛成してそれから三人で出雲町の小さいカフエーでお菓子を喰べコーヒーを飲んだ。

「安田さん貴女此間××園の離れ座敷をばかにほめてゐたさうですね。××園にいらした事がありますか。」

大崎氏は器用に林檎をむきながら佐賀子に話しかけた。

「いゝえ行つた事はありませんの、でも氣持のよささうな家ではありませんか」

「さうですか、僕もあそこは好きですよ、眺めがよくつて‥‥どう

です今度の日曜に小田君と三人で出かけやうではありませんか」

そこで次ぎの日曜の三時品川驛で三人は落ち合つてTの××園に遊びに行く事を約束して別れた。

次ぎの日曜の午後三時、佐賀子はいそ〳〵と品川驛に入つた。大切にしてある紫の矢絣の銘仙の着物にクリーム色のショールをひらめかしてゐた。此ショールは前日或る雜誌から原稿料を貰つたお金で大急ぎで買つたもので、佐賀子の月給はどうやら食べてゆかれるといふだけのもので時候のものを買ふほどの餘裕はなかつたから十一月の初旬になつても急にはショールを買ふ事も出來なかつた。

「安田さん！」

大崎氏は一寸ステッキをあげるやうにして寄つて來た。そして小田氏は今日社用が出來て一時間程おくれて××園へ來る事になつたと話した。佐賀子の心に輕い不安がかすめると、急に大崎氏のからだが二倍の大きさになつて何となく佐賀子を壓迫してくるいとはしさがあつた。……大崎氏と竝んでT驛をおりた時、坂をのぼつて御料理と大きく書いてある門をくゞつた時、長い廊下を通つて下駄をはいて豫て佐賀子があくがれを持つた小ぢんまりと清閑に見える離れ座敷に通された時……佐賀子の心のなかに何とはなしに男の異臭が氣になる氣持が動いてゐた。

「小田さんまだでせうか」

佐賀子は日頃親友でもない小田をしきりに待つて此言葉を雜巾のやうにつかひまはした。

「心配しなくたつて大丈夫ですよ。後で僕が電話をかけます」

大崎氏はこれをくりかへした。

その離れは廻り緣の三間につくられてあつて、ふきこんだガラス戸ごしに海の景色が眺められた。小さい床の間に菊の花が活けられて浮世繪の細ものゝ軸が艶麗にかけられてあつた……

年増の女中が下駄を鳴らしては母屋から料理を運んで來た。

その頃は丁度青踏社の平塚さんや尾竹さんたちが揃つて吉原へ行つたの五色の酒を飲んだのと世の中が大騷ぎをした頃で、文學でもやるやうな女性は何となくそれを痛快がつて自分も折があつたらお酒ものんでみようお料理やへものぼつてみようといふやうな空氣のあつた時代で、佐賀子も負けない氣になつてお料理やへ上つて大膽にお酒をのんでみたがどうも前に居る男が邪魔になる……その人とどういふ關係でもなく戀愛などは勿論してゐない間柄でありながら何となく世の中に對してのびやかでない氣持が動いて來て佐賀子は自分が不快であつた。

「どれ、小田に電話をかけてくるかな」

さう言つて大崎氏は立ち上つた。佐賀子の心は急に浮き立つて口に入れたお刺身にやつとそれらしい味が出たやうだつた。

「小田がね、今來るつて」

佐賀子はやつと元氣が出て急に快活になつて大崎氏に對して銚子をとつてお酒をついでやつたりした。

「平塚らいてう・・・・あれはいけませんよ」

氣味わるく赤味をさしてきた顔をなでながら勝手な「新らしい女の評」をしてゐた大崎氏の話のなかば、次ぎの間で何かしきりにうごいてゐた女中がそこの襖をあけて

「あのお支度が出來ました」

と言つた。大崎氏は赤い顔を一寸うなづかせたがいよ〳〵調子をあげて平塚さんの批評をつゞけた。・・・・料理店の離れ座敷さへ知らずにあれは何と聞いた都なれない 世事に通じなかつた佐賀子が 此時「お支度が出來ました」、が何を意味するかをもとより知らう筈もない佐賀子はたゞ心で今にも來るだらう小田氏を待つて平氣でゐた。

「安田さん、一寸お隣りの部屋を見てごらんなさい」

「何故？」

「貴女の吃驚する事がありますよ」

此時佐賀子の心にサッと不安の影がさした。

「何かある・・・・私はだまされて來てゐるらしい」

さういふ氣持と同時に此男が・・・・バカめ、私はお前のさつきからの心持はみんな解つてゐる。でも私はだまされないよ、といふ嘲りと何があるのかしら？　いづれ祕密の事にちがひない、「見てやれ、見てやれ、見てやれ」といどむ好奇心とがごちや〳〵にまきおこつて

「なあに・・・・」

と何氣ない樣子をして立つて廊下から次ぎの部屋の障子をあけて見た・・・・と目の前に友禪羽二重の目のさめるやうな夜着ふとん赤い枕・・・・さうしたものが一度に目にはゐつて佐賀子は顔を眞赤にしたが、心は眞蒼になつてしまつた・・・・「どうして逃げやう」と突嗟に思ふ心の下から落ち付けたかこんな奴にうまうまとのせられてゐるものかといふ冷笑がまじつて來た。そして殆んど我ともなく全く神業(かみわざ)のやうに愉快な笑ひがこみあげてきた。

「アハ、　アハ、　見つちやつたわ」

佐賀子は可笑しさうにしきゐの處に立つて大膽に大崎氏を見おろした。大崎氏は一寸目で念を押すやうにして廁に立つた。

「此時だ！」

と佐賀子の心が神の如く命令した。かけておいた大切なショールをつかむと佐賀子は興奮に慄へる足に下駄をつきかけてあわてよろめいた姿で廣い庭の向ふに見える門口の坂の方へ急ぎ歩いた。・・・・坂の途中で我にもあらずふりかへると逃げ出した家のガラス戸のなかに大崎氏の顔がポッリと見えたが表情は分からなかつた。向ふの人にも佐賀子の顔がちよんぼりふりかへつて無表情に見え、右手のショールのクリーム色のみが存在を明らかにしてゐた事だらう。

窓の瞳

生田花世



夕方になると、どこの家の窓の障子にしても、色が沈んで、無表情にしづまつて了ふ。

やがて電燈で、黄ろく明るく障子が染まるのに、この家の窓だけは、そこひといふ眼病の瞳のやうに、何をも見ることの出來ない病をもつてゐるやうに見える。

私はこの窓の近くに行つてぢつと見てゐる。私の住む町はといふと、この町の右の方に細長い形をとつてゐて、そこからこの家のところへ來るには三度位は右へ左へ、左へ、そして右へといふあんばいに突き當りながら出て來る道順になつてゐる。

私はどういふわけでこの夕方の暗い障子の前に、しかも、どんな人が今入つてゐるか分らない家の、西口の窓のまへに、かうして時々、夕方の一つの幻想のやうな心持に、そゝのかされ、みちびかれて、ふらふらとやつて來るだらう。私は窓の下の露路に佇んで、節穴や裂け目のある、古い黒板塀にもたれて、考へて見ずには居られなかつた。

この夕方の障子が暗いままのときならばその暗いのをさいはひにしてたゝずみ、中からほんのりと灯が照らしてゐる時は、灯影に姿を現はされないやうにしてどちらかの隅にぼんやりと立つて、一人の女が、この家の中のもの音とか、人聲とかを耳をすましてきいてゐて、だれかが中から障子をあけると、いそいでしやがんで、捨石

でであるかのやうに小さくなり、雨戸がしめられるとまるで羽根にきづのある蝙蝠のやうに、ゆるい、それでゐてあわてたものごしでひそひそと立去つて暗の中に消えて行つて了ふ…。さういふことがこの家の、この窓で昔度々あつたといふこと、その後その細君の殘していつた九つになる女の兒が死んだこと、それからこの家へ、祈禱をする人が出入りするやうになり、間もなくまた後妻が病氣になつたので、夜逃げでもする人のやうに、引越して行つて了つたといふ噂を、私のさがしてあげたのをよろこびながら、この家へ引越したてに佐伊子からあべこべにきいたときにはどんなにすまなくおもつたらう。佐伊子は私の友達であり、その良人の永井は私の古い戀人(?)だつた。

『わるかつたわね。もつとこの家のこと深くきいてあげればよかつたわ…』

『でも、そんなこと氣にしてたらこの東京での貸家住居なんて出來ないわ。私、たいして氣にしてませんのよ』

かういつて、長火鉢のところで、佐伊子は、左の手をのばして後の障子をすつとあけて、妙な笑をたゝへたのだつた。

『この下に、女はしやがんだのだわ…夕方だの、夜ふけだのに……』

そして佐伊子は、離縁された妻が、のこして來た女の兒への愛着だの、自分を追ひ出すはめに立至らせた女への憎みだの、愛憎の的となる前夫だのの、食事をする時の話、茶碗の音、時には、女の兒のどこかを打たれるらしい音だのをききに來たそのやるせない女心を私との話題にすることを度々くりかへした。しかもまた永井の前の戀人についてかういふことも小聲でいつた。

『私、良人(たく)を別に、あの女から取つたといふわけではないのです。けれどね…そして、あの女もとほいところにゐるのだからこゝにやつてくるはづもないとはおもふのですけれど、何だか、夜分、雨戸のあけたてのときにね、私自身と、まへに住んでた、その怨まれた女とのこんがらがつた氣分が、ふいと胸に出來上つて了ふこともあるの…』

そして佐伊子はにやりと笑つた。佐伊子には、さういふ場合の不氣味さをいやがりながらも、おもしろがつてゐる氣持があるらしかつた。

『家について迷信をもつ人は多いんだけれど、私あまり氣にならないの』

さうはいつても氣にしないといふことによつて氣にしてゐるのだと私には思はれもするので、この家から、佐伊子たちが引越してくればよいと、行く度におもはずにはゐられなかつたのである。時折彼女の夫への妙なこだわりはありながらもたづねる私にしても、たしかに、だんだんにそこの障子は氣になつた。のぞく一人の女とその障子をはなしては見られなかつた。耳をすます一つの女の心を思

つて見ずにその障子のあけたては出來ない友の心持が、やはり行く毎氣になつたのである。西口で、どうせ、夏は、あつい日もさしこむのだから、いつそつぶして了へばいいと、よつぽど友に云ひたかつた。もしかして…ほんとに、もしかして、夏のあつい、ものうい宵などに、よくまろびねする友が、ふつと首をあげた拍子に、障子をあけ放してあるその窓に、ぎよつとするやうなこともあるかもしれない。人間の眼といふものは、時々感情といふもののとまどひとか、生理的方面からの混亂やらで、錯覺をおこしやすいのだから窓の方を見て、ぎよつと驚くといふやうなことも絶對ないとはいへないと、よつぽど友に云つてやりたかつた。

ある日のこと、――それは秋の夕方であつた――。私は、ゆどうしの出來た銘仙を一反もつて、その家へ行つた。私とおそろひの銘仙を買つて、一緒にゆどうしたのだつた。門を入つて、玄關で、聲をかけると、その時おもひがけもなく、佐伊子の良人の永井が出て來て、そのどこか虎に似てゐる顏に、へだてのない表情を見せて迎へてくれた。

『お上り下さい』

『…………』

『佐伊子は留守ですが……』

といふのだつた。私は、そのまゝ歸らうとしたが、反物はおいてゆかうと思つたし、前、佐伊子の家に下宿してゐた時この男と多少懇に似たものがあつたといふ事は、佐伊子には云つてないのだが、長くかたづかないでゐるこだはりもあつて、妙にそれがさせた心持とでもいはうか、そのまま座敷へと上つて了つた。

『すぐお歸りになりますの』

『いや、もう歸りません……』

とむかふは言つた。私は變なことをいふとおもつて問ひ返した。

『どうして？』

『あれは、もう、さりましたから』

『うそ…』

と私は唇で笑つた。見えすいてゐる戲語であるとおもひ、手のこんだ享樂だともおもつてひやかしたかつた。

『まあいいでせう。私は今日からひとりものだから。だが、あなたはヘズバンドにわるいかしら』

『…………』

『よつぽど愛してゐるらしいね！　若い人はいいからね……』

『ええ…私にはすぎる人なの……』

私はにこにこしてむかうの顏を見た。私はそんな時、輕い言葉の出るやうな性質の女ではなかつた。正直にまつすぐに氣持や言葉の出る女でしかなかつた。にこにこと笑ふ、それだけで私はその場合十分だつた。私の眼でも心でもが、いはば、にこにこと十分に笑へるものを良人の生活から吸收をしてゐたからである。

『いつかはこの話をしてみたいとおもつてゐたのだ。僕はね…あの時、あの日から、どうしてずつと、君からあんなにされたらうと思つてね…』

『あれはねえ』

と私は云はずにはゐられなかつた。私もいつかはこの男と、この話をさつぱりとして見たかつたのがこれまでの氣持だつたのだ。

『私は、一度あなたのお心持をきかうとおもつて、あなたのお話しなさるお眸が、そんなことをきいて見てもよいやうだつたから…感じて…それで、私、手紙上げたでせう』

『その手紙で、あの時、僕は、行つたのだつた』

『さうでせう。でも、あなたは、盆の上の落花生をぼりぼり喰べながら、いつまでもぼりぼり喰べながら、その落花生を雜誌の上に五つ六つつまんでのせて私にくれたでせう。私はその時、これが、私への御返事だとおもつたので、それで、自分の部屋へ入つてピシヤリと障子をしめたの…あの時の私のつきつめてゐた氣持に對して、落花生の御返事はにくかつた！　それで私は、復讐したのよ』

『それは、ひがみだつたよ…』

と永井はいつた。永井も、こちらも、それはもうもう何年もの前のことなので、そして兩方とも結婚をしてゐる心持、ちがつた境遇からの突き放した話し方だつた。

『ひがみだつたかしら』

『ひがみとも！　僕はそんなに侮辱したと今の今まで考へてはゐなかつた』

『とにかく、今ぢやもうみな幸福になつたわ…』

といつて、私は、又もや、にこにこと笑つたのだつた。笑ひが、肉體の底の方からのぼつてくるのだつた。

『よろこんでゐるな！』

『ええ十分…』

と私は露骨に喜んでやれといふ氣持をかくさなかつた。私はこの男、あの時分K——大學の學生だつたこの男によほど愛の感情をひき出されて、ユーモラスにも落花生でかたづけられたことを今こそ決算出來るとおもへるには十分だつた。落花生を見る毎に、私は、ゾクゾクと惡寒をもつて、その男のどこか虎に似てゐる顏をおもひ出してゐたからである。

『長い間の不快…ひがみならひがみ！　みな水に流しませう』

と私は云つた。その時永井は和解の手をさし出した。私は、自分の手をも出した。

『これを君のハズバンドが見たらね…』

と深い笑ひ方で彼は笑つて言つた。その男の心持はざらりと私の心に來た。とうとう勝つてやつたといふ彼の喜びが露骨だつた。いやな心持が私の胸にさしたことはさしたが、この男と一緒にならなくてよかつたと痛切に思つた。

『かへつて報告の出來る手なの』
とゆつくり私は言ひながら、ぢつとむかふの顔を見た。いづれにしてもこの握手の報告が、自分の夫に苦痛を與へる一面があつてもまた別の微妙な刺戟ともなるであらうことを知るだけの『男心』もおもはれてゐた。
そこへ、女中と二人で、佐伊子が歸つて來た。何だかくたびれてゐる顔、そのほそい眉、そして、甲高な聲‥‥。
『長くお待ちになつたこと』
かういつて、佐伊子はぺつたりと坐つた。
『今ね、そんなにおたくは言つてらつしやいましたよ。あなたをさゝつたのだつて！』
『いつでもさういふのですよ。いたづらな人だから』
そして買つて來た茶菓子を女中にはこばせたり、いろ〳〵と出先の話を夫にしらせたりした。
『雨戸をしめなくちや‥‥』
彼女は、ひとり呟いて、つと、窓によつて障子をひらいた。黒い板塀、‥‥その時、窓は、私の心に名狀の出來ないおそろしい氣分を冷たい風と一緒になげこんだ。思はず私は佐伊子を見たが、彼女は突立つて雨戸をひいてゐた。
このすべてのことはもう十年も昔のことになる。佐伊子がその家で病死して了ひ、かはりにやつて來たのは、佐伊子の氣にしてゐたあの女だつた。そして、この夫婦はどこかへ引越して了つて、今はどこにゐるか知れない。そして、私だけが、一人、今もつてかうして夕方に回想の窓を見に來るのである。どういふものかその窓が氣になるのだ‥‥。

三上先生にお尋ねいたします

小池みどり

戀愛を好きといふ氣持から進めていらつしやいましたか。興味といふ點から進めていらつしやいましたか。今までなさつた澤山のそれらは、皆違ふ經驗として思ひ出を豐富にしておいでゞございませうが、之れから先は又どんな形式で戀愛をなさつて行くおつもりでございますか――。

その答へ

三上於菟吉

なぜあいつに惚れたと訊くのかね？
色は思案の外つて言ふじやあないか？
その證據には御めい〳〵がなぜ戀人から戀されたかを考へて見給へ。それから御自分が完全無缺かどうかつてことをね。
そこでお互にアバタも笑窪さ。



「愛吟」

三津木貞子

『あ。』

『あら。』

『いついらしつたの？』

『一週間ばかり前。』

『ちつとも知らなかつたわ。矢張りいつものうち？』

『さう。』

『嬉しい。あなた、もう少しお散歩なさらない？』

ひよつくり温泉場で逢つた友達同志である。有本さんは、誘はれて含羞（はにか）んだ顔をそつと斜めうしろに立つてゐる人に向けた。

『有本さんのおともだちですか。』すいと一歩進み出てちらと有本さんを見てから私にお辭儀をした。振り返つて『有本さん、おつき合ひにもう一度歩きませう。』

これがあの男との初對面であつた。

次の日、私はその男の部屋に居た。友達の有本さんを訊ねるとその人が出て來て

『有本さんいま僕の所に居らつしやいます。上つてお話しなさい。』有本さんも出て來てにこにこ笑つつゐるので其後について入つた。

『今日はお稻荷さんの何とかだと言ひましてね、こゝにゐる私にもお赤飯をくれましたよ。』

お稻荷さんを祭る部屋にその人は陣取つてゐた。何と奇妙な‥‥家の階下のまん中の四方をも他の部屋部屋に圍まれた暗い小さい部屋である。

一方口の唐紙をぴたりと閉ぢると部屋だか押入だか分らない。白晝こゝだけにランプが灯つてゐる。わざわざ希望して此室に入れて貰つたのだといふ。部屋だけ見ると行者か巫女でも居さうな現代離れのした部屋が、その人が居ると子供部屋じみて見えるから好い。何か部屋一ぱいに溢れるものを感じさせる。二階三階のどの室よりも健康で新鮮なものを有つてゐる人格（ひとがら）の感化である。傍に積んである書物は、柔かいものではその頃盛んに發刊された木下尙江氏と堺利彦氏のものばかりである。瓶に蝮が一疋飼つてあつた。

『此方へ來る時荷物があるので車夫を賴みましたが、自分と同じ人間が汗水垂らしてうんうん曳くのを見ると氣の毒で、たうとう降りて俥の後押しをして來ました。』さうした言葉から來る印象は深い。

その男から私は結婚の申込を受けたのである。自分では言はなかつた。賴まれて言ひに來た男（私とは幼馴じみである）に私は、いくらかその男をいぢめる興味もあつてこんな事を言つた。

『そりやね欣ちやん、私だつて結婚しないとは言はないわ。觸（タッチ）する人となら、橋の下の所帶だつて、斷頭臺だつて、榮光ですわ。』言つてじろりと覩る。

『熊谷さんとこへゆくんですね。』はたしてまつ蒼になつた。それ見ろ、悲鳴を上げるくせに。結婚のお世話も潛越な。

『あら、あなたは今それを希望してるんぢやないの。』

『ぢやゆくんですね。』

『‥‥‥。』苦しんで、のたうつのを見てゐる心地。

『僕は、僕は、返事をきいて傳へる義務があるんです。』締められる樣な聲だ。

『おことわり申します。さうはつきり言ふんですよ。』

『理由は？』

『戀が無いから‥‥簡單だわ。』

あの男との昨日の會話を思ひ出す。

『有本さんこんな事言ふのよ（石井さんはあの方面白い方なんですよ。お祖母さん附の病人でよかつたらお世話願ひますつて仰しやるんですよ）つてあなたの事を笑つてゐましたよ。ほんとに宜しいといふ人があつたらいらつしやいますか。』微笑の中の凝視！

『要りません。』

『あなたの御病氣は不治ときまつてゐるんですか。』

『自分ではさう思つてゐます。』

『どうかして癒さうとお思ひになりませんか。』
『思ひましたが駄目でした。』
『この奥の湯本に行つて一年もゐると大抵の呼吸器病は癒るつて言ひますね。一年といへば隨分長く思はれませうが・・・餘りお寂しければ時々わたしも參ります。』
『いろいろ面倒なことをして生きのび度いとも思ひません。』
『いらつしやるのでしたら、わたしが費用なぞはお送りします。』
『私が希望すれば家で見てくれませう。』
『さうして頂きたいとお願ひしても惡いでせうか。』
『旅で突然お目にかゝつた方からそんな事をして頂くわけがございません。』
『でもわたしは隨分以前からあなたをお見かけしてゐます。』
『あら・・・・』長い計畫だつたと解る。好意に逢ふとすぐにもろくなる心だ。笑を含んだ力强い凝視に逢ふとはつと眼を伏せた。失禮なと今さき思つた反感も弱りかゝる。
『ではとにかく、湯本へだけはいらつしやいますか。』
『まゐりません。』一大事きつぱりと切り返へした。(それで結末が附いた筈だつたのに)、と思ふともだ〳〵した。
『みんな慈善家でいらつしやるわね。病人の何が好いんでせう。』
『美人ですからね。』
『お悧巧ぶつて、どんな顏をして頼まれてたの?』
『おれも變な目に逢ふもんだなあと思つたつけ。』
『ふふ、誰れでも同じ事を言ふ人には同一(ひとつ)のお答しか上げませんからね。お記憶下さいまし。』
嫁入衣裝は白の病衣で擔荷に乘つかつた儘でも好い、來てくれるんなら・・と私の事を味つて歩くといふ欣彌である。氣怯れのして言出し得ない今のうちに感謝の涙の代りに打つておく針一本である。
『何うかなすつたんですか。』
靜かに顏から掌を離して見ると彼の男が佇んでゐる。
『心を澄まして居りましたの。』
『厭な人が來たとお思ひになつたのではありませんか。』
『いゝえ。いらつしやるの、ちつとも存じませんでした。』
『さうですか。わたしはまた、厭な奴を見たと思つてお困りになつて、顏をおかくしになつたのだと思ひました。』
『まあ。』
『さうぢやなかつたのですか。』
『えゝ。眼をつぶると心が靜かになりますわ。』
『さうでしたか。で、往らつしやるところですか。それともお歸り路ですか。』
『こゝから歸らうと思つて居りましたの。』
『ぢや、もう少しおつき合ひ下さいませんか。』

『えゝ、お伴いたします。』昨日欣彌に言ひ渡したことを、今日は一層明瞭と言つて解決をつけようと思つた。

『昨日藤島さんにお逢ひになりましたか。』

『お目にかゝりました。』

『貴方の事ですから定めし無雜作な御返事をなすつたでせうねえ。』

　思はず微笑つて『えゝ、無雜作に御返事申上げておきました。』

沈默が暫く續いた。

『わたしは以前に一人の婦人を知つて居ました。』問はず語りに男は言ひ出した。『わたしの心持をよく理解してゐてくれたその友達は、今から五年前に肺を病んで亡くなりました。女高師を出た人でした。わたしが米國なぞへ行く氣になつたのも一つはその悲哀を忘れ度い爲めなのでした。そんな事でわたしは戀愛の何ものであるかぐらゐは解してゐるつもりです。』

『あたしはねえ。それがわからないんでございますの。』

『あなたは結婚をどうお考へになりますか。』

『夫婦が戀人ならば好いでせう。』

『あなたはこれ迄に一度も人を愛したことはないのですか。』

　ある〳〵大いにある。絶えずその人を感じて、現に幻を追ひつつある女ではないか。が戀ではない。

『戀愛があれば結婚をなさいますね。』

『致しません。』

『どうしてです。』

『あたしは病人です。罪です。』

『誰れに對してですか。男に對してですか。子孫に對してですか。』

『自分に對してです。』

『あなたは生涯戀愛なしに通せるとお思ひになりますか。』

『通せるならばしあはせだと思つてゐます。』

『それでよくお寂しくありませんね。羨ましい。』

『話してあげませうか。あたしにねえ、ちつとばかり好きな人があつたんです。』

『ほオ。それは初耳。是非伺ひませう。』

『ほほ、弟なんですよ。それと幻の人。』

『幻の人？　…誰れですか。』

『いゝぢやありませんか、幻なんですもの。結婚なんぞしないんですもの。』

『戀ぢやないんですか。』

『戀は誓ですわ。あたしは誓はないんです。人間が人間に誓へるものぢやないでせう。』

『あなたは男が怕いんぢやありませんか。』

『怕いんです。それに判らないんです。判らないから怕いんです。』

（安つぽく降參するなよ。お前はこの男を好いてゐるのではないのか）何處かで自分が叱る。

男は初めて鷹揚に笑ひ出した。勦はりを籠めて、
『男はサタンではありません。』
『サタンよりもあたしは怕い。』さう思ふ心から退く事が出來ないで叫んだ。
男はさつと額を曇らせた。凝乎と地面を視つめて歩いてゆく。
『止むを得ません。』空虚な所で言つて『然しわたしの心持だけは汲んで下さるでせうね。』
子供の樣に素直な心になつて肯いてみせた。
『それだけ伺つて、滿足することに致しませう。』
淋しい笑顔だ。私も泣きたくなつた。
『明日お歸りになるさうですね。』
男は一册の小さい本を別に呉れた。内村鑑三氏著詩集『愛吟』である。
『この中の詩には、わたしの心持と同じいのが多いのです。おひまの時およみ下さい。それから、今後手紙ぐらゐは差上げても宜しいでせうか。』
『え。』
不精不精だと言つて男は笑つた。
『お健康におなりなすつて下さい。』最後の言葉である。
東京の町名番地――本郷區弓町二十一番地
室へ歸つて詩集の表紙を翻してみると扉に、
あゝサタンと思ふなかれこれ一篇の愛吟のみ
と書いて、下に羅馬字で熊谷文太郎と名書きがしてあつた。最早過ぎ去つた一片の心の墓標である。忘れ去らるゝ旅の挿話である。
社會主義者の捕物。
首領株の五人―屋上の格闘―三人逃亡、二人捕縛―弓町廿一番地。
捕縛された二人の一人は熊谷初太郎とある。而も本郷弓町廿一番地である。熊谷初太郎と熊谷文太郎と。……
瞳に浮ぶのはランプの灯されたお稻荷さんの部屋である。どんなにびんしやんとはねつけても、微笑を失はずに、勦はり止まぬ廣く豐かな心を持つた人の風貌である。倖の後押しをする人。肺病のバイキンを忘れぬ人。――この新聞記事を見たばかりに、忘れ去るに難くない旅の一挿話が永遠の記憶となつてしまつた。
その當時はふりおちさうになる涙をこらへて幾日かを過しがてにしたが、二十餘年を經る今日まで少くも日に一度、その名を心で呟かない日があつたらうか。――これまでにはさまぐの人とも會ひ愛されもし、愛しても來た。が、神の樣な愛で私を勦はつて呉れた人がこの世に二人ある。一人は東京へ歸つてからの文太郎氏、もう一人は去年九月に物故した歌人のSさんである。この二人の魂からしたゝる樣な愛情は惠まれることの少ない私の貧弱な生命を常にうるほして呉れてゐる。生きてゐる人には逢ひ度いと思ふ。逢ひ度いと思ふ。



ちか子

幻想

小寺菊子

風が來て、笹藪に粉雪がさら〳〵と鳴る。その音に眼がさめたのであらうか？　闇の中に彼女の眸がしづかに開いた。何も見えるのではなかつた。

本棚の隙間から夜氣がひんやりと忍び込んで、彼女の頰に冷たくふれる。汽車も電車も通らない時刻！　何時だらう、と考へて見る。何時だつていゝと思ふ。

ぽつぽ、ぽつぽ、ぽつぽと向ふの室で鳩の時計が三時を報じた。オ、オ、可愛いい鳩さん！　夜中でもなんでも忘れないでよく時を知らせてくれる。一人で扉をあけて、赤い嘴をつき出して一々お叩頭をして、時を告げて引込む親切な鳩さん！　少しお休み、夜中なんぞどうだつていゝんだから……

足元のおときだんろが、ほこ〳〵と春の寢床のやうに溫かい。このまゝいつまでも夜が明けないでくれ！　そして、おときだんろがいつまでもさめないでくれ！

彼女の室には彼女一人しか寢てゐない。机と本箱と、火鉢と座布團と、いろ〳〵の書物と雜誌

と、それだけで狹い室がちやうど一杯なのだつた。誰も入ることが出來ない。一分の隙間もないのだから。こんな時には何を考へてもい〻のだといふ氣がする。何を空想してもい〻のだと思ふ。考へるだけのことなら自由だ、現實を超越した空想は彼女にとつて樂しみの一つだつた。

誰とでも話をはじめよう、誰と話をしようといふのだ、どんな話をしようと勝手だ、彼女は自然とほ〻ゑましくなつて來た。

どの室からも誰の寢息も聞えない、みんなは死んだやうに靜かによく眠つてるのだらう！

しん〳〵と更けてゆく深夜の恣なこんな好い氣持を自分一人が味はつてゐる、自分だけが好いことをしてゐるやうだ、何か惡いことをしてゐるやうにも思はれるが、どつちにしても、自由な氣持ほど彼女にとつて好いものはない。

ぬく〳〵とおとぎだんろがあまりにあた〻かい。少しわきの方へ摺らしてみる。こんな溫かい寢床に自分一人がかうやつてゐてい〻のだらうかと思つてみる。勿體ない時間ではないか？　こんな好い時間を一人で空費してゐるのは、何か大きな損失をしてゐるやうに考へられる。それでも夜が明けるまでは、ぢつとかうしてゐなければならないのだ、自分から立ち上る勇氣もない、誰か來てこの大きな圖體を引きさらへて行かないものか知ら？　恐ろしい異常な力でもつてどこへでも連れて行つてくれないものか知ら？　それはどんなに魔性な力でも好いと思はれる。此方でどんなにぐん〳〵押して行つても倒れない鐵のやうな力、そんなものに打突かつて行きたいそんな衝動が彼女の身裡にむづ〳〵とうごめく。

眼をあいてゐても、ふさいでゐても、同じの闇の中に、あの顏この顏が浮んでくる、浮んでは消え、浮んでは消える。なんといふ無興味な、力のなさ〻うな顏！　ずつと彼女の視野を鳥影のやうに掠めてすぎる……只それだけの、なんと印象が薄く淡い顏であることよ。

でも、たつた一つだけ、あの澤山のぼやけた顏の中に、堂々とした風格を見せて、自分に微笑みかけてくるきうつとした顏が殘つてゐるではないか？　誰かの顏だらう？はちきれるやうな健康と力に充ちた賴もしさうな顏である。だん〳〵と彼女にそれが近づいて來る。眸をみはつて、彼女はぢつと彼を瞶めてゐる。

さら〳〵と粉雪が笹叢にふれる音、小笹が雪を拂つてすんなりと頭をもたげたであらう、地面は胡粉をまいたやうに仄霞んでゐるであらう。そこへ黑猫が一疋、なんと輝やかしく黃色い眼を光らせて蹲踞んでゐることよ！　やさしい小鳥だちの寢込みを襲はうとするあの獰猛な動物の力の凄まじさ！　彼女の眸が闇の中にぱつちりと開かれる。

何か快い匂ひが鼻孔をぷーんとかすめる。うすい上品な香りである。病氣のとき、生活の無聊に苦しむとき、朝寢の床にうと〳〵としてゐるとき、ひよい、ひよいと空想の繪卷に薫じていつた懷かしい匂ひである。

それは彼が嘗て燻かした彼女の好きなロシヤ煙草の匂ひではなかつたか？　オヽ、いつのまに彼がこゝへ忍び込んで來たのだらう？

彼は仁王のやうに突立ち、唇をかたく結んだまゝ、彼女を强い凝視の中に吸ひ込んでゐる。澄んだ情熱が穴のやうな眸の底に、唇の裡にぢり〳〵と潜んでゐる。彼女はぼうと眼眩んでしまふ。

瞬間、重い壓迫が彼女をおしつけた。

柔らかくあたゝかい褥の中から、彼女は白い兩手をひろげて、にこやかに彼を見上げた。

『どうしてこゝへ入らしつたの？　こんなところであなたにお逢ひするなんて、あんまり不思議すぎるわ。』

彼は默つてうなづいてみせる。大きな手がしつかりと彼女のふるへる體をさゝえてゐる。

『でも、約束してあなたに逢つたことなど、一度もなかつたではありませんか？』

『ほんとにさうね、只、偶然だけが私たちに『幸福な時間』を與へてくれたのですもの、そして、私たちはそれでいゝのだと思つて滿足してゐたのですもの……』

『然し、あなたはいつまでもその『偶然』だけを待つてゐますか？』

彼の呼吸が忙しく迫つてくるのだつた。腹立たしげに焦り氣味にも見えた。

『えゝ、いつまでも……』

彼女はそつと彼を仰いでいつにない彼の見幕に恐怖を感じながら

『それで好いのぢやありませんの？　私たちはそれ以上望まないんぢやありませんの？　あなたはいつでも私に、戀愛は男にとつても女にとつても『自分の仕事』を投うつてまでする譯にはゆかないものだつて仰しやつたぢやありませんの？　それで私達はいくら逢ひたくなつても、積極的に逢はうともせず、出來るだけ節制して、只もうあてにもならない『偶然の機會』しか待つてなかつたんぢやありませんの？』

『さうです、その考へ方に僕は今だつてちつとも變りません。自分〳〵の仕事に一生の全精力を打込んで働いてゐる人間に、たま〳〵の精神の慰安所にすぎない戀愛のために、大切な時間や感情をさうむざ〳〵費してる譯にはゆかないんです。』

『だから、今まで通りで宜しい譯ぢやありませんの？』

『でも、あなたはそれでもう滿足しなくなつてるぢやありませんか

あなたは今夜どんなことを一人で空想してゐましたか？』

『私の空想にまで立ち入るなんて、あなたにも似合はないわね。そりやあ、いろ〳〵の面白いことを空想してましてよ。私は一體空想

が大好きなんですもの。だつて、空想でもしてなくちや、私ときどきやりきれなくなるのよ。そりやあ、あなたの存在を遠くに感じてゐるだけで、私はにぎやかよ。それからいろ〳〵の思ひ出に耽つてるだけでも、私にはある程度の滿足はあるわ。けれど、だん〳〵そんな耐久力が摺り減つたといふのでせうか、それとも、やつぱりどうしても『戀愛』に自分の凡てを捧げなくちや承知出來ないつていふ、つきつめた昔の女に歸りさうに、つまり逆戻りして來たとでも云ふのでせうか？　どうもとき〳〵焦れつたくなるの？　生活と戀愛とを秤にかけて見れば、そりや、生活の方が第一なんだけれどそして、生活のために一生懸命に夢中になつて働かうとは思ふんだけれど、どうかすると、ひよいとその生活を投げ出して、眞闇の穴の中へでもなんでもいゝ、飛び込んでしまひたくなるの、そして、何かの強い力に打突つて體を粉微塵に碎いてしまつたら、さぞ好い氣持だらうと思つたりするの、そんなことを空想するの、いけませんこと？　あなたはそれをお咎めになるの？』

『咎めます、あなたは自分たちの生活に一番肝心な『緊張』を缺いて來たんだ、それを僕は責めなくちやならない！』

粉吹雪にすつかりとざされた街路を二人はやがて默つて歩いてゐた。夜明け前のほんのりとした空から、粉雪がさら〳〵と降つてゐる。どこまで歩いても街がつゞき、道がつゞいてゐる。彼は一體彼女をどこへつれて行かうとするのか？

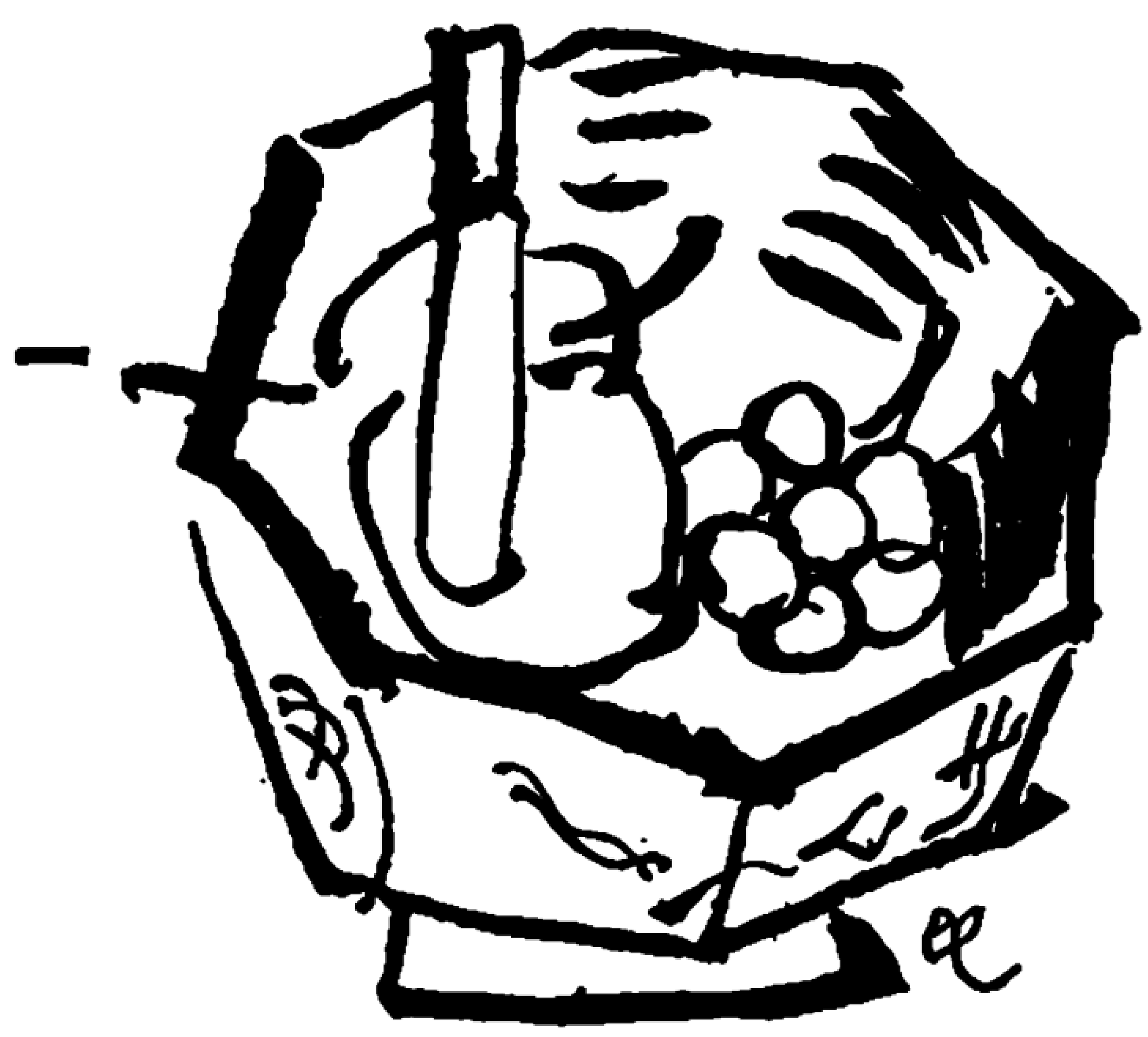
そこに晝間の激しい活動の世界が展開されてゐる。男も女も子供も實によく働いてゐる。そこには空想を許されない！　凡てが現實だ。現實の世界に活々としてみんな働いてゐることだ。なんといふ勇敢さだらう。誰も惰氣てなんかゐない、愉快さうにみんな働いてゐる。オゝなんと緊張した彼等の生活ぶりであることよ！

凍るやうな冷たい足を引摺つて、息も喘ぎ〳〵彼女は首を垂れて俯向きがちに恥づるやうにして歩いてゐる。顏を上げると、いつか彼女から離れてさきに行く彼の姿が視野の中にうつる。迚も追つけさうにもない！

自分にはあの人に從て行くことが、到底出來ない醜い弱い自分だと思ふ。彼女は溜息を吐いて、ぴしやんこに地上に坐つてしまつた。

『さうだ、こゝに坐つてぢつとあの人の後姿を眺めてゐよう、あの人の勇敢な生活を、素晴らしい活動ぶりを、大きな人格を、それから自分に對する眞實な深い愛情を……自分はあの人とどんなに遠く離れてゐても、どんなに久しく逢はないでゐても、永遠にあの人を信ずることが出來るのだ。そして、あの人を心から、殉情的な愛の一筋で愛してゆくことが出來るのだ。自分は一人でぢつと堪へてゐなければならない、それで自分はなんと充分幸福ではないか……』

ほゝゑんで、彼女はいつまでもそこに坐つてゐる。恐らく死ぬまで、さうやつて愛する彼を心に感じつゝ、冷たい地上に跪づいてゐるであらう自分を感じながら……　――終――



耳

林　芙美子

茫々とした風の中に、六月の葉櫻は、薄蒼いかげを空にうつしてゐた。

その空にうつゝた白い田舎道を、二人共沈默つて自動車に搖られてゐた。

あゝ男の情を知りつくして、又私はこんな情痴の世界におぼれやうとしてゐる。

いつそ、このまゝ狂人にでもなつてしまつたら……夏子は血走つた熱い瞳を閉ぢて、ハンカチの青い果實の匂ひをかいだ。

すかんぽウ
すかんぽウ
シヤワ更紗

道添ひの小學校の窓から、こんな可愛い唄聲が、タンポヽの綿毛のやうに飛んで來る。

どこへと別にあてもない二人の乘つた自動車は、月夜の螢のやうに、一直線に砂埃を蹴たてゝ田舎路へ出た。

「私家へ歸る……。」

「歸つてもいゝやうだ！」

「歸つてもいいかい？」

「うゝん……駄目だよッ！」

せめて、こんなくだらない言葉でも投げあはなければ、夏子はたまらない程、憂鬱だつた。

青くて水つぽい男の眉にも未練はあるが、いつまでも落ちつけない、兩刀つかひみたいな汚れた氣持を續けたくなかつた。

「むつかしいひとだね、いつたいどうしたらいゝの、僕が厭になつてしまつたから、そんな無茶の事ばつかり言ふんぢやない？」

「さうよ……結婚して落ちつきたくなつたから……。」

「…………」
「たまらないんだもの……あんたと顔をつきあはせてゐると、それやあ憂鬱なの……。」
自動車から降りた二人はお互ひに顔をそむけあつて、ボコボコの田舎道を歩き出した。
こんなに退屈な戀愛があるだらうか、夏子は遠くへ續く、ちつとも面白くないポプラの並木路を、ハンカチで頬かむりをして歩いた。

二

海の鳴る音がする。
彼女の青春は、丁度七夕の笹につけた色紙のやうに、ハタハタと動搖した。
ふくらつぱぎに上る熱い血、ブルブルと震へる指先き、夏子はサメザメと涙をこぼした。
息をひそめてゐると、男の唇からもれる煙草の匂ひが、媚薬のやうに渦巻いて、強い風が吹けば、一緒にプイと吹かれていつてしまひさうに、夏子には、何もかもが、たわいなかつた。
男の胸に押しあてゝゐた涙でふくらんだ瞳をあげると、たくましい肩越しに、大きい十三夜の月がくるくる舞つて、夏子をどんなに驚かせたらう――。
夏子は、無意味に歩いてゐると、かうしたなつかしい初戀の思ひ出が浮んで、わけもなく嬉しかつた。
黒いブルーズのポケットから、リンゴを出してくれたつけ……千光寺の朱い塔の下で、眞紅なリンゴを皮ごとサキサキ音をさせて食べてゐたかのひと、あの人は美しい大きい耳を持つてゐた。
夏子はくるりツと振りむくと、子供のやうに飛び上つて、男へ呼びかけた。
「ねえ、仲直くしようよ。」
彼女は片つぼの手を男の着物の袖口から入れると、汗でしつとりしてゐる男の腕にぶらさがつた。
八王子街道に添つた此近邊はどこでもつゝじの花が好きなのかどの田舎家の庭も、綿のやうにランマンとつゝじが咲いてゐた。
かういふところに來ると、馬糞の匂ひもなつかしい。
夏子は何か思ひ出したやうに、ふいと男の顔を見上げると、私はいつたい此男のどこに惚れたのかしら……と、男の瞳や鼻や唇をみまわした。
「やつぱりあんたは耳が美しい。」
「馬鹿だから？」
「うゝん、耳の美しい人は正直者だつてさ。」
「宿がみつかつたら酒でも呑もふ。」
夏子は舌を鳴らすと、足を早めて、ほがらかに口笛を吹いた。
こんなに青葉の匂ひがむれて、風が涼しくなるといふのに、あんな壁の薄い下宿で、煤けてゐるのはつまらない。
貞操のない女が、一人でブラブラ下宿住ひをする事は、青葉のや

うだつたり、ダイナマイトのやうだつたり、夏子はいつもさう思へて、眞面目な相手があれば、いつでも結婚しやうと焦つてゐた。

強い石を投げてくれる人はないか、夏子は日に日に酒を樂しんでいつた。

「いつそ、あんたと結婚しやうか……。」

「今日からでもいゝや。」

「だから男はきらいだつて云ふんだよ、すぐ女に身をまかさうとするから、あいそうがつきてしまふ。男が高いところへ登つてりやあ惚れた女なら、どんなとこだつて登つて行くんだけど。」

三

夏子は酒に醉ふと、焦々してゐた事が、みんなくだらなく思へて色つぽくサンゼンとかゞやく男の耳を見てゐた。

うすい電氣の光りに、圓くふくらんだ、耳朶のうしろから、血が玉になつてこぼれやしないかと思へたりした。

「あゝお酒はいゝ、一本か二本のお銚子でこんなに樂しくなれて——。」

夏子は田舍の安旅宿にしろ、旅に出たやうな氣がして嬉しかつた。窓をあけると、遠くの山肌に添つて、汽車が火の粉をふきふき走つて行くのが見える。

「二人で家を持つたら、郊外に三角形の家を建てない？」

男は鼻をかみながら、せわしさうにたもとから鉛筆と紙を出してから云つた。

夏子はぼんやりと出窓に腕を乘せてゐたが男の坊ちやんらしいこんな氣ぜわしさを見ると、何故か興ざめてしまつて、くるりと窓へむかふと、テスリにがつくりと頭をのせてみた。

何か冷いものを首筋に感じると、髮にさした、角ピンが拔けて、細い蟲の鳴き聲が、ジ……と澄んで聞えた。

本當に、まだどこかに私を死ぬ程、愛してくれる人があるんぢやないかしら……山の人家の灯が、ポつと瞳ににじむ。

夏子はあの下宿の壁に晃れる色々の男の顏を胸に描いてみた。

そして、どれもこれも影がうすくなると、後で鉛筆をいじつてゐる男の影だけが大きく胸を押して來た。

只田舍の酒屋の息子で、柄にもない帝大の美學をおさめてゐるといふ、白い額と、美しい耳に引かされて、遊び友人になつてしまつたいま、やつぱり、此男が一番眞實がありさうで夏子は好だつた。

「酒がさめてしまふよ。」

「さう……。」

「又何かおこつたの—」

電氣が暗くなつたと思つたら、男が立ちあがつて灯をさへぎつたのだつた。

夏子は驚いてふりむくと、男は歪んだ襖へ手をかけて、淋しさうにこつちを見てゐた。

「何か面白いあそびないかしら……。」

夏子は、冷たくなつた酒をくゝみながら、しらけた卓子の上に兩ひじをついて立つてゐる男を見上げた。

「立つてなくつたつてお座りなさいよ。」

沈默つてゐる時の男は、何んて奥ゆかしいものだらう。

男は呆然と竹を折るやうに、灯の下に寢ころぶと、小さい聲で何か唄ひだした。

兩手を後に組んで枕にした白い腕の上に、涙が光つて落ちたのを夏子はぢつと見てゐた。

男は急におき上ると、厚い兩の手のひらでじつと夏子の手をおさへて白い齒を出して笑つた。

「耳を動かせてみせやうか？」

男は二つの瞳のおのおのを、耳の方によせて少し口をひらくと、あんなに美しかつた兩の耳が、嚙んで捨てたチウインガムのやうにきたなく見えて、ブルブルと影をきざんだ。

「マア！」

「お夏ちやんにやあ、こんな藝當出來るかい！」

どこかで梟がホロホロなきだした。

四

夏子は呆然と男の顔を見てゐた。

體中が寒氣だつて、酒の醉ひも醒めて、珍らしく胸のドウキがコトコト鳴つた。

百年の戀も一時にさめる氣持つてこんなものかしら、まるでオコリのやうに震へながら、夏子は、男のあきれてすがるやうな顔をうしろに殘して、外へ出た。

ブチブチと音をたてゝ萠えてゐさうな、樹木の匂ひの中に、夏子はホウダとして落ちる涙をぬぐはうともしないで、驛へ走つた。

何故の、我まゝな氣持か、夏子は自分でも譯がわからなかつた。

ポオン　ポオン　驛の古時計が九時を打つと、夏子は東京への切符を買つて、かたい待合室の椅子に干魚のやうにへばりついてゐた。

男は石のやうに走つて來た。

「先に走つてかへるんだもの、驚いちやつたよ！」

夏子の肩に手をおいてゐる男の顔を見上げると、夏子はかへつて元氣になつて、あんなにも興ざめた氣持が、どこかへケロリと逃げてしまつた。

やつぱり今までのやうに、友達のやうな戀心でいゝんぢやないか、なまじつか、今宵のやうに夫婦にならうなんて考へるから、あんなにべしやんこに興ざめてしまふんぢやないかしら。

夏子は元氣に立ち上ると、男の兩手をブランコのやうに振つて、

「ごめんなさい、私醉つたのよ……。」

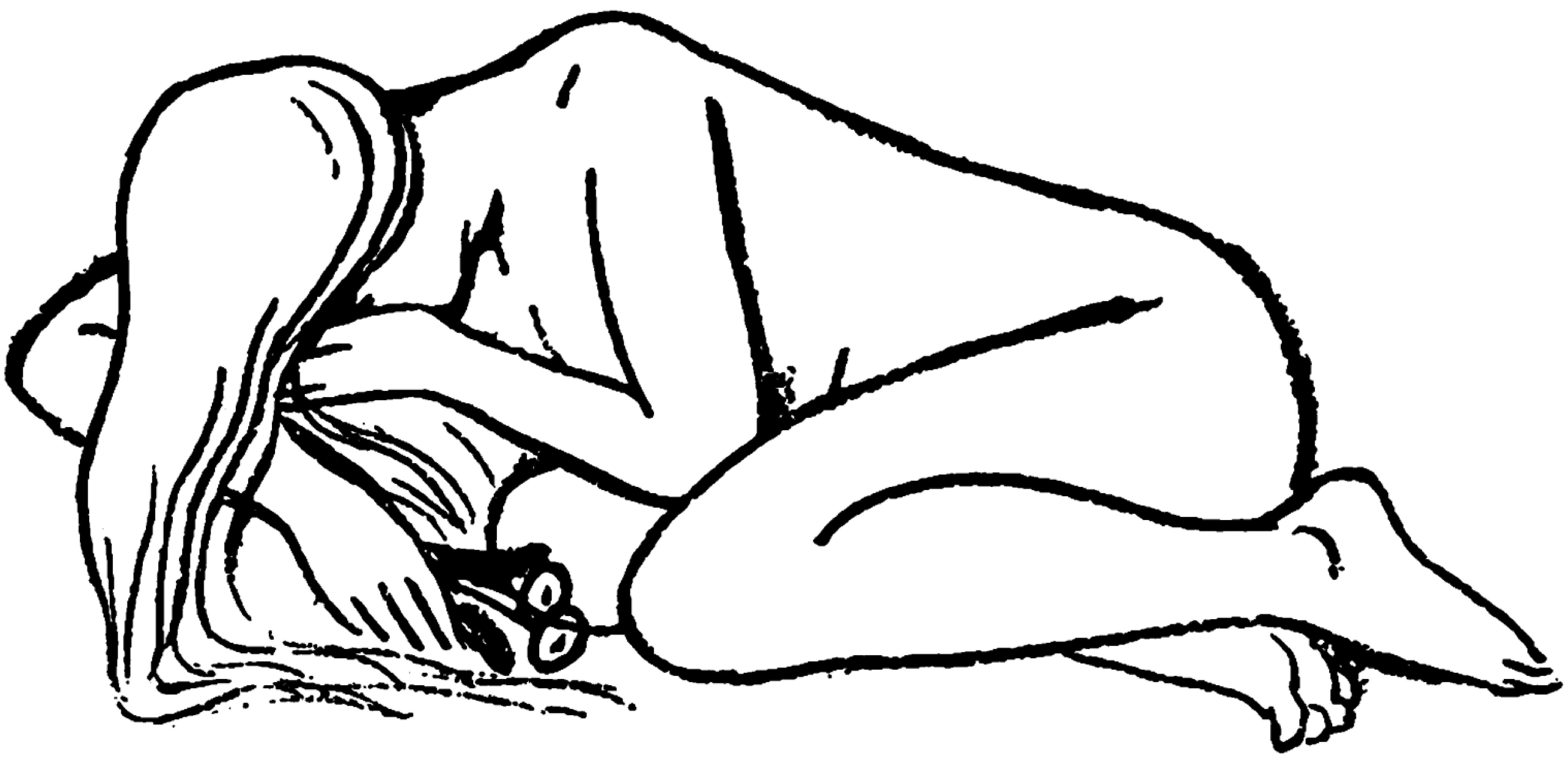
「もうあんな事しないからね……。」

「うゝん面白かつたわ、只東京が戀ひしかつたからなの、切符買つていらつしやい、もう汽車が來るわ。」

消然として切符賣場へ歩いて行く、男のたくましい影を見てゐると、夏子は兩手を叩いて、

「早く！　汽車が來るよつ。」

馬鹿馬鹿しい程、あの大きな男が、のろまに見えて、夏子はわざとこんなにせかしてやりたくて仕方がなかつた。



愛の殉教者？

秋本明子

——俺は今日初めて
太陽を見たやうだ
俺の足は今初めて
ぴつたりと
大地についた——

こんな詩を贈つて、アツミの前に眞摯な戀愛の態度を誓つた、志田との仲に破綻が來た。それも、僅か一年とはたゝない間に……。

破綻の原因？それは餘りにもハツキリしすぎてゐた。彼女が處女でなかつたばつかりに……。

「わたし、貴方に申し上げなきやならない事がありますの。——私はあなたの愛を……受ける事の出來ない女なので御座います。」

二人がまだそんな間柄になつて居ない前のある日の午後、志田のオフィスを訪ねたアツミは思ひ切つて、斯う口を切つたのだつた。

悶々の幾日かを送つた彼女ではあつたけれども、彼女の胸は尙はち切れさうに苦しかつた。

と、一瞬、志田の顏色が變つた。

「ぢや、貴女には誰か婚約(エンゲージ)の方でも？」

「ま、そんな……。」

アツミは驚いたやうに眼を見張り乍ら、聲をはづませて云つた。

「私、わたし……そんな意味で云つたんぢや御座いませんのよ。私自身が……貴方のやうな純潔な方の愛を受けるに、價しない女なので御座います。――わたしそれが苦しくつて……」

「貴女の云はうとしていらつしやるのが、何の事かつて事は、大略僕には領けるやうな氣がしますよ。僕は例へどんな事實を、貴女の口から聞いたとしても、少しも驚きはしませんよ。却つて僕はその苦しむと仰有る、貴女の心持をこそ、尊いものに思ひますよ。――…僕たちの愛は、そんな事で搖らぐと云ふやうなそんな、稀薄なものではなかつた筈です。」

志田の答へは立派だつた。しかし、それは、激昂した戀愛感情に對する追從の言葉であり、しかも、彼女を偶像崇拜的な眼で見ての切めてもの自己慰安の言葉であるにすぎなかつた。

「俺はお前のバージンに戀をした譯ではなかつたんだ。――しかし……。」

彼は遂に云つた。そして、彼は最後に彼女と別れる時に云つた。

「男つて云ふものはね。女の貞操に對して、たとへ「?」を感じてゐたにしても、永遠に「?」で終り度いと希ふものなんだよ。――如何に思想的には進んでゐる男であつてもね〟――君がもし、今後再び戀をする場合があつたら、それだけを忘れないやうにし給へ。」と

アツミは悲しかつた。自分が求めやうとして居たものは、これではなかつたのか、そして、自分は永遠に眞の愛人を見出す事は出來ないのだらうか?

一度バージンを失つたものは、遂ひにはそれが、禍して一生眞の愛に出會ふ事は出來ないのだらうか?

否、否、屹度出來るんだ〟出來るに違ひない。自分はそのベターヘーフと云ふものを、志田に見出したとばかり思つて、それ故にあんなにも悩み、悶えて來たものを……。

眞面目な人、實直な望みの多い青年としての志田の前に、どんなに自分を卑下し、謙遜し續けて來た事か。――その眞摯な悩みを、彼女は自分乍らも尊い……美しいものに思つて、泪ぐむ時すらもあるのだつた。

「志田の前に純潔を誇れる女だつたら……。」

自分の志田に對する愛の度が高まれば高まる程、アツミはかりそめに處女を失つた身が、はかなまれて來るのだつた。

彼女の初戀! それは少女小說のそれのやうにも、淡い果敢ないものだつた。

そして、その相手はまた、それに適はしい、壼のやうな美しい姿と、秀でた眉とを持つた青年だつた。

純眞無垢の美しいアツミの心に、甘い戀の言葉を囁き、生の歡喜を知らせると同時に、彼の鄕里だと云ふ、遠い北の國へと歸り去つて了つた。

――それは、アツミが十九の夏の、湯の街での出來事であつた。

その後のアツミ、それは全く過去の總てを忘れた、清い聖徒の生活だつた。彼女はブロークンの悩みから脫して、美しいクリスチヤンとしての、淨い理想に甦生しようとしてゐるのであつた。

其處へ突發的に芽ぐんで來たのが、志田との第二の戀だつた。

彼女は過去のあらゆる不純なものを忘れ、涙の洗禮によつて浄められた。熱情の全部を捧げて、惠まれた新しい戀への、邁進に努めやうとした。

それは誠に初戀の、その心持に他ならなかつた。

しかし、彼女のその眞實の心も、遂ひには通じる時があつた。

「では、さようなら。お互ひに別々に戀を求めて見て、結局、御互ひ同士よりいゝ相手が無かつたら、又一緒になるさ！　俺なんかお前のやうな教養のある女よりも、カフエーあたりの女の方が、似合つてるのさ！」

男は最後にかう自暴自棄のやうに云つた。

さうして、男はアツミに餞けとして、アルチバーセフの「サーニン」の一卷をくれた。

まことに「サーニン」の戀愛觀は、アツミにとつては救世主であつた。

彼女はサーニズムを理解する事によつて、戀愛が何度でも出來てしかも、その時々に幸福であるのを知つた。

そして、又、能不能と云ふ事が問題ではなく、男が女に對してその處女を要求するのは、醜い所有慾からである事を知つた。

アツミは初めて、新しくこの世に活き得る幸を味はつた。彼女は久し振りで、深々とこの快い大地の上に、呼吸する事が出來た。サアドの新しいラヴは惠まれた。

世馴れた瀟洒なスタイルをもつた、中年の學士との間に生れたそれは、例へば春光を浴びて、もつれ合ふ胡蝶の姿だつた。

フアストラヴに於て、セコンドラヴに於て、彼女が曾つて思ひ及ばなかつた幸福と自由を、彼の女は初めて味はふ事が出來た。

「馬鹿に永いわね。もういゝ加減にお蹴りなさいよ。」

友達の一人が云つた不謹愼な言葉に、かすか乍らも愼ろしさを感じたアツミは、大切にはぐくんで來た掌中の珠を、無慙に足蹴にされたその悲哀を感じたのだつた。

三年越しの戀――永いと云へば永い……そして、幸福なタイムであつた。

だが、その戀も間も無く破れて了つた。

今迄包み隱してゐた相手の不誠實が、過然の出來事から曝露してしまつたのだ。

戸籍上に於て立派な妻と子とを持つた男――

何と云ふ態だ！

そんな男に眞實の愛を捧げやうとした女を嘲笑つてやれ。

欺かれた女の面を見てやるがいゝ。

アツミは斯う心の中で惡魔的に罵り乍ら、しかも口惜しさうに聲を擧げて泣いた。

なんとみじめな自分の姿だらう。三度目にやう〳〵得たと思つたそれは、これだつた。

「彼奴だ。あいつだ。私をこんな不幸な女にして了つたのは……。」

あの男に呪ひあれ！

さうは思ひ乍らも、何故かしら、あの自分にとつて最も呪ふべきその男が、自分にとつて矢つ張り畢生の愛人だつたのではないかしら？――こんな矛盾した念ひに忍び哭く彼女であつた。



アツミの身にも幾春秋かは過ぎた。表面的には彼女のかねての努力が酬ひられて、美術家として身を立てるやうになつてゐた。

しかし、戀愛の包圍は尙も彼女を、解き放たうとはしなかつた。否、彼女自身、戀愛の神の命ずるまゝに、生死しようとする彼女であつた。

サーニズムによつて、初めて甦生の曙光を見出した彼女であり乍ら尙もサアドラヴに一縷の光明を望んでゐた彼女は、漸くにして愛の信ずべからざる事を知ると共に、その反動として戀愛を遊戲觀しようとした。

刹那主義——それは極端に荒み切つた、サーニズムの世界での主用語であつた。

例へそれが彼女の本心から出たものではないにしても、ペターハーフが得られない爲め、悲しい諦めの行爲であつたにしても、斯うした彼女の驚くべき思想は、瞬く間に彼女を浮ぶ瀨の無い淵にまで突き落して了はねば置かないものだつた。

其處には女を肉の對象としてのみ觀る、怖しい男の群れが、蠢めき嗤いでゐた。

「男なんてけだものさ！」

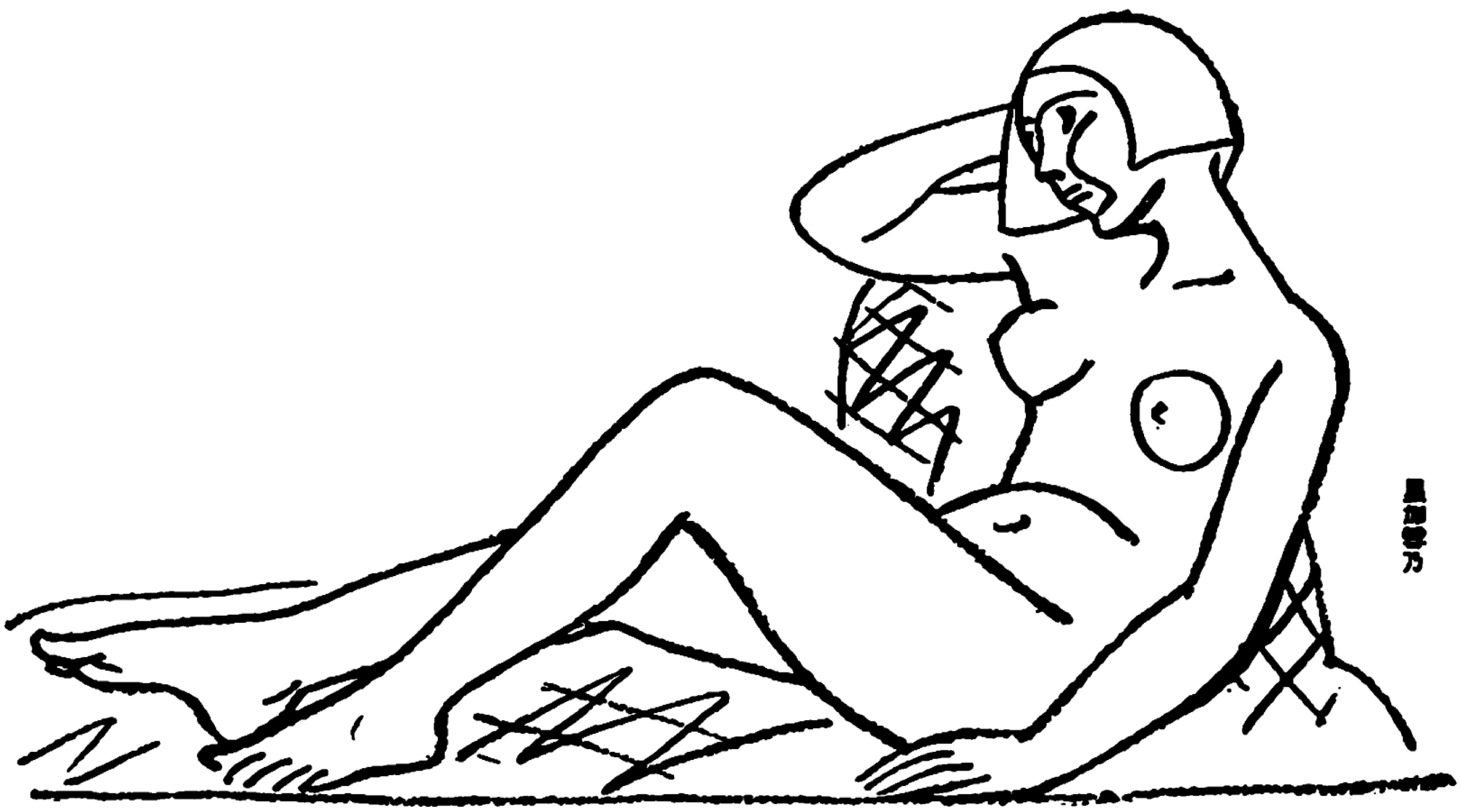
結局、彼女も亦、「サーニン」の中のリダ、チカが叫んだその言葉を、最後の結論として語らされたのみであつた。

底の知れない泥濘の中に身悶えし乍ら、しかも、彼女は事實上に於て什麼に辛かつた、最後の男達にも增して、サアードラバアこそは、彼女をこの苦しみ、この墮落？の底に陷いれた、仇敵であると思はずには居られなかつた。——だが、しかし、一面から見れば彼女を家庭地獄から解放して、一個の自由人としての今日をあらしめて呉れたところの、恩人とも見れば見られもするのだつたものを：：：：。

多難な戀！ 彼女はいま、曾て自分の步んで來た戀愛の道を凝視して、思はずも慄然とした。

幾度か傷けられ、痛められても尙、幽か乍らもアリストフアネスの神話に謂ふ。その半身を慕ふ心の消えやらぬ彼女の心持ちを彼女自身哀れみの眼で眺めるよりは外なかつた。

彼女もまた。永遠に酬はれざる、愛の殉敎者として、終るのであらうか？



霧の中の戀

大井さち子

セミ・マドモワゼールは肉の盛られきつてゐる逞ましい兩腕を愛した。
抱かれることよりもその逞ましさに焦燥を感じた。
舌觸りの好い少量の淨酒と煙草を好むだ。
それらも、それらに伴ふアートモスフィアにより親しめた。
ファイトの眠り男！　なんと、あの線のみで出來たやうな細やかさを強く印象した
といふ氣紛れな内容もあつた。
かつて、あるムシユがこのマドモワゼールにおくつた手紙——、
マドモワゼール！　僕は昨夜もからだをベットの片側に寄せて、投げ出した右腕に
想像のあなたをのせて寢ました。
さびしい獨り寢の床をこんなに華かにしてみてもゐます。
その部分を何囘となく繰返へして讀むだマドモワゼールの胸は、風を胎(はら)むだ夏日の
帆のやうに戀情の重みにいつぱいだつた。そして、猛烈に樂しまふといふ激しい要求
の腕と龍騎兵のやうな強やかな胸の厚みを幻に描いて甘えかゝるやうに動いてみた。

しかしながら、マドモワゼールの戀はつねに霧の中の戀にすぎない！

それはマドモワゼールのキー・ワーズなのかもしれない。その點で、このひとは自慰的で小便くさい。

深い木だまのやうに戀が私のなかに今もなほのこる。
誹謗は多辯であり、根はエゴイストである。
「私はさびしい」とよりほかに何も私はお前にいふまい・・・・
剪られた花がおとなしくして苦しみながら、
匂ひを放ちながら死んで行くよりほかに何にも知らぬやうに。

このマドモワゼールをふりむかすやうなしつとりした過去があるとしたら、それはこの詩の想だ。

筆者大井さち子とこのマドモワゼールとを同じに考へられる方があるならそれで好い。それが、一番好い。何故ならわたしは他人の戀愛なんか何うなつたつてかまひはしないと思つてるのだから。藤原義江が誰かの奥さんを何うしたとか、かうしたとか、みんな何うでも好いやうな氣がする。

その我々の愛すべきセミ・マドモワゼールはある頃ふと、さかんなる文學熱にかられて、まだ一行も書かないうちからもう大きな微笑の世界へむかへられたかのやうな氣になつて美しい花に近づくやうな氣持から彼に早速手紙を發すべくきめた。

彼？――　彼とは⁉

中原氏。ある少年少女雜誌の編輯長で、その月のどの本屋の店頭にも一番うづ高く景氣よささうに積まれてゐた子供の雜誌を出してゐた人――

夢といふものは哀れな花作りさへする子供だといふ事を知つてるであらう。

何處かでそんな言葉のきれはしを眺めたやうな氣がする。で、マドモワゼールの陰影のある幸福感は、かつきりそれを受けとめて喜悦と希望とをこめて愛らしい擴がりをみせた左のやうなものを書いた。インクの色も三度までかへたりして・・・・。

一度お目にかゝりたいと思つてゐるんですけれどもお赦しになりまして？

あたしの想つてゐるあなたは赤ちやんのとき捨てられたモーゼのあの頃の兄さん？――芳香なチヨコレートのやうにニガ〳〵しくつて、鐵みたいなハラワタを持つた方のやうに思はれてなりません。

でも、？　？　？　あたしは眼を見張るより知らない、そして、え？なあに？！つてきき返すことときりしか出來ない鈍感娘だつたらつまりませんわ。

ほんとうは、異人さんのやうなニコ〳〵しい大膽さで、いつぱい、いつぱいお話しがしてみたいのですけれども・・・でも、敎へて下さ

いね、どうぞ！　あたし、なんでもおしへていたゞきたい心で一杯です。
　あたしは古沼に住む蛙ちやんのやうに、いつも、たいてい獨りでゐます。――

　しかし、なんといふ石のやうな不幸さであつたらう。
花辨のやうにゆら〳〵揺れてゐたマドモワゼールの匂やかな空想は、去勢された犬よりも劣つて性的魅力のないひからびた瓢簞みたいな中原氏の最初の訪問をうけた瞬間から、硝子の破片のやうに粉みぢんに碎かれてしまつた。
　しかも中原氏の油上みたいな心臓はマドモワゼールの手紙を確實に克明に受信して、中學生のやうに、もう、自瀆的な官覺をさへいたましいまでに味はつてゐたのであつた。

　マドモワゼールのコテーヂは郊外の小高い丘の上にあつた。中原氏はマドモワゼールに伴ふそれらはすべてを見た時、いかに香ぐはしくいかに矜らしく思へたことであらう？。その上にも折重なつて、紅茶だのウヰスキーだの水菓子だのを甘つたれたやうな哀れがつたやうな様子で仕度をしながらも絶えず開いてみせるマドモワゼールの甘美な紅の唇！
　それは中原氏へ好い約束をしてるかのやうにも、切なく迫つてるかのやうにも新鮮に動き深く說明されて手紙以上に嬉しく樂しく大膽になつてゆくのを自らも感じた。

かういふ女性は自分ひとりで自分のある時のポーズに滿足し微笑し歡喜するものだのに。――
　要するに中原氏は早合點で葡萄の支柱のやうにかはききつてゐたのだ。

「お立ちなさい。」
　しばらくして中原氏は出來るだけ勿體ぶつて氣品をつけその甘やかな隔りをとるべくいつた。
（なんといふぶきつちよな自惚れなんだらう？「お立ちなさい。」だなんてこの人！）
　仲の悪い鵞鳥が二羽寄つたやうな氣拙さをマドモワゼールは自分にはづかしく感じながら歪められた黄つぽい唇がヒク〳〵近づいて來るのを見た。
（なんだか、がんもどきの端つこの凹みに似てゐるわ、この人の唇！）
　マドモワゼールは自分のこの奇異な聯想、自分以外には誰も氣づかないであらう發見にのび〳〵と微笑したと思ふと
（あゝ、おかしい！本當におかしい!!）
「あはつはつ……」と笑つてしまつた。
　しかしながら、中原氏は纖細なる情趣を味はふべく碁盤の目のやうに四角く眞面目だつた。
（あなたは、いまも私にさうしてくれ、と喜こんで笑つてくれたではないか。あの手紙の中にも敎へてくれとかいてあつたではないか。然るに私達はいま、この瞬間にそれらがすべて叶へられる。私の腕の中はあなたをすつぽり抱く。さうだ！私の手はあなたにさし

のべられてゐるのではないか。)

中原氏は女性が肉體的に受動的であることを心得てゐた。だから、このマドモワゼールの笑ひも、いかにも女らしい愼ましやかな生涯の嬌羞に屬してゐるものと美の錯誤をした。

で、マドモワゼールの笑ひの靜まるのを待つと、誘ふべく優しい柔かな肩についいと手をのばした。

マドモワゼールは今度は笑つてはゐなかつた。

するりと細い身體をねぢまげてそれをはづすと、

「なになさるの？よう——お芝居はやめてよ。田舍芝居のお相手なんか出來ないわ。それに失禮すぎるようよ。」

實際、こゝまできたらマドモワゼールは產毛のやうに自由になつてもゐられなかつた。

扉の外ではさつきから退屈しきつてゐた仔犬がつねにないマドモワゼールの鋭い聲をききつけてガリガリ扉を引搔き出した。

彼女のために情熱の最後の一閃として、もう前にたちふさがつて來てゐる中原氏をついと横におしやると把手をまはした。

「あたしはいやよ。あなたにはこれで好い。」

フリイッ！本當に可愛い賢い仔犬！

それが室の中にとび込むが早いか、いきなり中原氏の裾をぺりぺりと嚙みやぶつた。

みるみる中原氏の皺だらけの脛からは血が流れ出た。

マドモワゼールはフォクストロットでも踊つてゐるやうに朗らかに調子よく笑えた。幾杯も幾杯も黃金色の水が杯からこぼれ出るやうに笑ひのおかはりをした。

「何う？　その仔はまだ狂犬の注射もしてゐないのよ。」

形の好い脣から煙草の煙りが室内をみまはすやうに輪を吹いて、美しいながしめは依然使はれてゐた。

中原氏のやにこい腕二本の防禦ではフリイッの戲れから素晴らしい怒りにかはつた緊張しきつた感情を押し鎭めることは出來なかつた。

で、仔犬と中原氏の戰ひは持續……

"C'est assez!"

頃ほいを見はからつたマドモワゼールの聲をぴんと尖つた耳にきくと、仔犬は彼女の足元に來て今度はケダモノらしいものういこなしで愛撫を求めた。

中原氏は三時間前、太陽が自分と同じやうにいきいきと美しい勇氣に燃えてゐるのを眺めながら登りつめたスロープを、これはまた寂しい暗い土の上にびつこをひきひき降らなければならなかつた。

靜かな身振りをもつた夕暮れがマドモワゼールの窓に仄かにせまつた時、いく日もいく日も忘れてゐたさびしさが刺繡の花のやうに胸にくつきり浮いて來た。

かつて、愛誦した「右腕を投げ出して……」といふ手紙の文句を歌のやうに流れるやうにくちづさむでみた。しかし、これも、所詮、霧の中のまた霧の中のその戀！



秋を行く

望月百合子

久しぶりに美香子は外に出た。並木はもう殆んど枯葉を落し盡して、まつすぐに空に向つて、小枝を伸してゐた。そして畑には麥が一寸ばかりも芽生えてゐた。かつてはあれ程しば〳〵通つたこの野の並木道を、幾日ぶりで、いいえ幾月ぶりで通ることであらう。この前來たときはまだ水引草が咲いてゐた。うす紫の野菊も可愛らしい花を草叢の間に覗かせてゐた。それだのに今は枯葉が道一面に積んで、歩く度にカサ〳〵と音を立てる。そしてあの頃いつも一緒で、美香子に紅い蔓の葉を取つてくれなどした夫はもう彼女の傍にはゐない。俯向いて歩いてゐた美香子はふと傍を見た。そして立ち止つて、昔のやうに從いて來た小犬の頭を撫でた。思ひなしか小犬も悲しんでゐるやうな顏を垂れてゐた。

『クロや！』小犬を撫でてゐる美香子の手に熱い涙がポタリと落ちた。

『あゝ』悲しみを、弱い心を、ふり拂ふやうに立ち上つて、美香子はまた歩き出した。並木が果てた處に、廣い道が横ざまに走つてゐた。そこに立つて前方を見た美香子は思はず袂

で顔を掩つてしまつた。彼女の胸はチクリ！と鋭い、目がくらみさうな痛みを感じた。眞白に雪を被つた富士山が、切れるやうな明確な線を、青い空にくつきりと描き出してゐるのだつた。かつて夫と二人で眺めた山、そして夫が愛した山！かつて二人で歩いた道を歩くさへ堪へ難い悲しみであるのに思はずもこの山の姿をみて、美香子は堪へ切れなくなつて、木の切株に崩をれるやうに腰かけてしまつた。小犬はクン／＼泣き乍ら美香子の裾をくわへては引張つた。

『クロや、歸らうね』彼女が立ち上ると、クロは喜んで先に立つて走り出した。

門をはひると、彼女の部屋の縁側から輕快なハーモニカの音が流れて來た。小犬は急に馳け出して行つて、そのハーモニカに合せるやうな鋭い、悲しげな聲をしきりに立て始めた。

『お歸りなさい。また遊びに來ましたよ。いかゞです、お體は？』

それはこの頃よく遊びにくる少年同志の直木だつた。

『少しいいので散歩に行つて來たところなの、貴方、ハーモニカお上手ね。もつときかせて下さらない？』彼女は今迄忘れてしまつてゐた音樂のよさをしみ／＼と感じてゐた。

『うるさくはありませんか？僕、貴女はこんな騒々しいもの、お嫌かと思つた』

『いいえ』

『ぢややりませう』直木少年はジョンスランの子守唄を吹き始めた。中學校にゐた頃ハーモニカバンドのリイダアだつたといふだけに、あの輕燥な樂器から實に洗煉された音調が吹き出された。美香子は縁側に腰かけて、ぢつとうなだれ込んできいてゐた。

『おや！美香さん、泣いていらつしやるの？』直木は吹くことを止めて、呆氣にとられたやうに美香子を眺めた。

『まあ、私、ばかね、つひジョンスランの悲しい物語りなんか思ひ出したもんだから……』美香子は泣くやうな笑顔をつくつて見せた。

『ぢや、こんなもの、やめませう。そしてもつと愉快なやつを……えゝと、何がいいかな？』

そのとき生垣の外を、近所の百姓が唄ひ乍ら通つて行つた。いかにも朗かな聲で。

俺は河原の枯すゝき
お前も河原の枯すゝき
どうせ二人は利根河の
花の咲かない枯すゝき

直木はすぐそれに合せていかにも輕快に吹き始めた。それをきいてゐるうちに、美香子はどつと心に温い和やかな潮が寄せてくるやうな氣持ちを感じた。

『音樂つていいものね、私も少しやつてみようかしら！』

實際、美香子は、唄へば、心の重石のやうな悲しみが、だん／＼聲になつて溶けて、あの果てしもない空に煙のやうに消えて行つて

しまひさうに思へた。けれど美香子にはなか〳〵唄へなかつた。唄ふどころか、笑ふことさへ忘れてしまつた美香子だつた。

父親はどうかして美香子をもう一度、笑はせたいと思つて、そして道傍で子供を集めて支那人が人形芝居をしてゐるのがいかにも面白いからと言つて、用事に出かけたのにわざ〳〵引かへして美香子を誘ひ出すやうなことがよくあつた。けれど、かつてはかうしたものに子供のやうな喜びを感じて、笑ひ興じた美香子も、いまではもう見るのさへ辛らさうにして、ぼんやり空をみつめてゐるのであつた。父親はかうして美香子が死んで行くのではないかと思つた。そして密かにあちら、こちら手がかりを求めては、彼女の夫を探し出さうとした。併し彼は病む身を、狂的に頑迷な父親や姉から監禁されてゐたので、彼女の父親の心盡しも甲斐がなかつた。

そんな事情で美香子が彼からの最初のそして最後の手紙を受けとつたのは、彼が家出してから何十日目かであつた。三十八度六分の熱がどうしても下らないこと、それでも父親は社會主義の女なんかと自由結婚をした親不孝の罰だといつて醫者にも診せず放つておくこと……そんなことが慄へた文字で書かれてあつた。『僕はかうして死ぬ……貴女は幸福を求めて生きて下さい』。手紙はそれで結んであつた。

この手紙を受取ると、美香子は居ても立つてもゐられない氣持ちで、もう二度も訪ねて行つて空しく追ひ返された夫の實家へ飛んで行つた。三十時間の汽車も、浪の荒い海峡も今の美香子には何んでもなかつた。けれども彼の父親は

『泉は歸つては居らん、どこにゐるか俺が知つたことか』と言ふのみで、絶壁のやうに無感覺に彼女の前に立ち塞がつた。その鐵のやうな言葉と、心につき當ると、彼女はどうしようもなく、みす〳〵その家の奥に夫が寢てゐると知りつゝ、またすご〳〵と父の家に歸つてくるより他なかつた。海峡の青黒い海をみると、ひと思ひに飛び込みたいと、どんなに思つたか知れない。けれど、東京の郊外の淋しい家で、心配しながら彼女の歸りを待つてゐる父親のことを思ふとやつぱり生きなければならなかつた。少くとも父のためにだけでも生きなければならないと思つた。

その頃、一度彼女の父を慕つて訪ねて來た直木少年は、よく彼女の家に遊びに來た。深川の方で自由勞働をしてゐると言つてゐるが眉目秀麗な、體格のいゝ彼は、ルパシカを着るとロシアの青年革命家を思はせるやうに凜々しく美しかつた。そして詩人肌の愉快な話上手なので、彼女も親しみを感じてゐた。

ある雪の日にも少年は彼女を訪ねて來た。

『ねえ、美香さん、僕、やつと貴女の憂鬱の原因が分りましたよ』

少年はいつになく沈んだ顏をしてゐた。『僕、貴女の敵を打つて上げませう。その姉さんて奴憎い奴ですね』

『まあ、どこからそんなこと、聞いて來て？』美香子は心の傷にふ

れられた痛みで思はず顔を歪めた。
『僕、いろ〳〵な人からきいたの、貴女と先生とは本當の父子ぢやなくて、丁度、ジャン・ヴァルジャンとコゼットのやうな關係なんだつてことも』
『まあ！』
『そして、先生が贊成して、その頃戀人同志だつた貴女と泉さんを結婚させたことも、泉さんに目白の家政科か何かを出たオールドミスの姉さんがあつて、それが、美香さんが社會主義者だからいけないつてお父さんにすゝめて反對したことも、結婚が決まると泉さんの學資が來なくなつたことも、美香さんが働らいたり、先生が助けたりして、泉さんの學資をつくつたことも、姉さんとお父さんに責められて泉さんが病氣になつたことも、そしてたう〳〵姉さんに引つぱり出されて家出してしまつたことも、僕、みんなきいちまつたんです』少年の聲は沈んでゐた。
『まあ！そんなこと、今更言はないで！』
『美香さんがそんなに苦しんでいらつしやるのを、僕みてはゐられないんです。きつと敵を打つて上げますよ。その姉さんて奴、自分がオールドミスだもんで、やきもちを妬いたんですよ、きつと』
『それは皆がさう言つてゐます、けれど姉さんのやきもちばかりではなかつたのよ。あの人達と私達の思想や生活意識が違つてゐることもあつたし、第一泉の意志が弱かつたので』
『泉さんはどうしていらつしやるんです？』
『一寸も分らないの、多分この寒さでは、殊に北海道なんかにゐては死んでしまふかも知れないの…私、ほんとに一ぺん逢ひたいと思ふのよ』
直木少年の顔はさつと曇つた。そしてもぢもぢしてゐたが、やがて泣き出したいやうな顔をして急に歸つて行つた。
美香子は心の痛傷を知られてしまつた直木少年を重荷のやうに思ひ始めた。逢ふ度にそつと、そつとして置く痛傷に無遠慮に觸られる苦しさを思ふと堪え切れなかつた。彼女はやつぱり獨りでぢつと泉のことを思つてゐたかつた。祈りつゞけてゐたかつた。そして過去一年間の前半の樂しかつたこと、後半の眞闇な底無しの穴に落ち込んだやうな苦惱、それも獨りでぢつと心にしまつておきたかつた。
けれど四五日たつと、また少年はやつて來た。
『美香さんはまだ泉さんのことを思つてゐらつしやるの？』
少年の聲はかすかに慄へてゐた。
『えつ、どうしてそんなこと、きくの？』
『どうしてでもないけど、それを僕、知りたかつたんです。はつきりと』
『だつて、私は本當に泉を愛してゐたのよ。そして私は泉のために本當にいい伴侶者になつて、女性として眞直に生きよう。そして本當にいい社會を造る一人にならうと思つてゐたのよ。だから…』

『でも、それがさうならなかつた今は？』

『私の感情はおんなじなの、』

少年は眞赤な顔をして何かせつかちに言はうとしたが、またそのまゝ口をつぐんで、ぢつと美香子の蒼白い額をみつめた。

『私はその感情のお蔭で、これから思ひ切り勇敢に働らけると思ふの、女は一度は必らず妻になり、母にならうとしなければいけないけれど、それに失敗したら、その時こそ本當に男と同じに働らくより他に仕方がないんだもの。それは女にとつて片輪の生活だけれど』

『だつて二度も三度も結婚する女の人があるぢやありませんか？』

『それはさう出來る人もあるけれど……』

『ぢや貴女はもう一生獨りぼつちでいらつしやるおつもり？』

『それは何とも言へないけれど、多分……』

『では若し第二の戀人が出來たらどうします？』

『まあ、をかしな直木さんね、女つてものは一人の人を思つて心が一杯になつてゐる時は、決してもう一人の人をその心の中に割込ませる餘裕はないものよ……だけどもうこんなお話はやめませう。そしてまたハーモニカを吹いて下さらない？』

『えゝ、でも僕、この頃、愉快なのが吹けないんだもの。心がはずまないんですよ』

『なら悲しいのでもいいわ』

『ぢや、さすらひの唄でもやりませう』

ハーモニカを吹いてゐるうちに、少年の素晴らしく美しい眼はだん／＼曇つて來た。そして終ひには兩頬に涙の線が傳つた。美香子も夕ぐれの庭を硝子越しにみいり乍ら涙ぐんでゐた。庭には今日も雪がしん／＼と降積つてゐた。少年はふとハーモニカを吹き止めた。

『美香さん、僕はこの唄のやうな放浪兒なんですよ』

『まあ、どうして？』

美香子は思はず目をみはつた。

『親父は僕が六つの時に、お母さんと僕をおいてきぼりにして行衛を晦ましちやつたんです。事業の失敗からさうしなければ監獄に入れられるからなんですつて』

『まあお氣の毒なお母さん！』

『お母さんは僕が十一の時、たう／＼親父の歸りが待ち切れずに死んぢまつたんです。それから僕は、叔父さんに引取られて、中學三年までやつて貰ひましたけど、世話になるのがいやで、叔父さんとこを飛び出して、方々流浪したんですよ。そして今のやうな自由勞働者になつたんだけれど……』

『可哀さうな方ね、貴方は。でも偉いわ』

『美香さん、ほんとにこんな境遇の僕を輕蔑なさらない？』

『まあどうして？感心してよ』

『それなら僕、安心します』そして少年は大きな手を無邪氣にさし出して彼女の握手を求めた。

『實は僕、多分そのせいで、ある女の人からふられたんです』
『え〻？ 貴方が？』美香子はびつくりして少年の顏をみつめた。
少年はやゝ頰を染め乍ら話し出した。
『一昨年、小坂鑛山の爭議があつて、その應援に秋田に行つたら、そこで僕は雪子さんといふ美しい人に逢つたんです。畫家Uの戀人だつた人で、その時は丁度Uと別れて秋田の實家に歸つてゐた時だつたんです。雪子さんは僕を大變可愛がつてくれましてね、僕はそれですつかり雪子さんを好きになつてしまつたんです。そして僕達は夫婦約束までしたんですよ。雪子さんは二十五で僕は十七だつたけど。ところが、その時丁度、小說家のTの妻君が死んだので、Tは雪子さんの先生だもんだから、雪子さんは東京へ見舞ひにくることになつたんです。出發する時に雪子さんは僕に、若しすればこのまゝ東京にゐるかも知れないけれど、自分の原稿が賣れて生活が出來るやうになればすぐ呼ぶから、それまできつと待つてゐるやうにつて言つたんです。だから僕、淋しかつたけれども待つてゐましたよ。だのに、雪子さんからはそれきり何んとも言つては來なかつたんです。そしてあのひとはTの妻君の後にはいり込んでしまつたんです。それで僕、隨分悲觀しましたよ。死んぢまはうかとさへ思つたんです』
『まあ！』美香子は餘りに早熟な少年の話にびつくりしてしまつた。
『だから僕、貴女に本當に同情が出來るんです…でも、實をいふと、此頃僕は悲觀してゐないんです』
『それは貴方はまだ若い少年だからよ』
『いいえ、それなら貴女だつて…だが、僕は雪子さんよりもつと好きなひとを見つけたからです』
『まあ、それはいいこと。貴方はやつぱり、雪子さんのやうな大人でない、可愛い娘さんを愛さなければいけなかつたのよ』さう言はれると少年は一層顏を赤くしてうつ向いた。そして暫くもぢ〳〵してから、ポケットから、皺くちやの手紙をつかみ出した。
『美香さん、僕、お話しようと思つて、いつでもやつてくるんですけど、いつでも別のことばかり言つてしまふんです。だからお話では到底駄目だと思つて、書いて來ましたから、これを讀んで下さらない？』少年は泣き出しさうな顏をして手紙を彼女の膝の上に投げた。そして眞赤な顏をうつ向けて、居づらさうにもぢ〳〵した。
『まあ、貴方がお話できないことなんて、何んでせうかねえ？』美香子はわざとこんなことを言つた。けれど彼女は何も彼も、瞬時に、悟つてしまつた。そしてその手紙をどうして見ずに濟ませるか、どうして少年に引込ませ得るかに當惑してしまつた。暫らく困惑した沈默がつゞいた。
『ねえ、美香さん。ぜひ讀んで下さい。僕は苦しいんです！』もがいてゐる少年の心を思ふと、美香子はどうしても讀まなければならないと思つた。そしてよし慘酷な返事をでもきつぱりと言ふのが少

年に對する義務のやうに思つた。手紙は原稿紙九枚程に、ぎつしりと詰めて書かれてあつた。早熟な少年の燃える純情が、美しい詩のやうに美香子の胸に迫つた。

『……僕は働らきます。いい仕事を澤山します。けれどそれがみんな貴女のためであるやうに、貴女と二人の仕事であるやうに、僕は祈つてやまないのです。僕は貴女の幸福をもう一度造り直したいのです。僕にはその自信があります。僕は強いのですから。さうすることに依つて僕は働らき甲斐、生き甲斐を、生命一杯に感じるのです。そして貴女のために僕は益々強くなり、益々よくなります……』

美香子はこの手紙を讀み乍ら幾度も泣き出したいやうな激情を感じた。そして若しこれが泉の手紙であつたら……と思ふのだつた。讀み終つたとき、彼女は深い溜息をついた。そして暫らくたつてから靜かな聲で言つた。

『直木さん、ありがたう。私が言へることは只それだけなの。何故なら、貴方は十九の少年で、私は二十六の未亡人のやうな境遇の女なのだもの。貴方は春の人で、これから澤山の幸福に待たれてゐる人なの。そして私はもう人生を通り抜けて來た秋を行く人なの。私にふさはしいのはやつぱり泉の思ひ出ばかりよ』

直木少年は俯向いたまゝ、夕ぐれの雪の上に大きな靴跡を殘し乍ら美香子の家を去つて行つた。

略歴

戸田豊子



函館市に生れ、青森市で育ちました。

女子師範学校は三年できり上げ(?)すぐ結婚生活にはいり、遽しく寡婦になりました。でも、遺産なんかちつとも貰はなかつたんですから、「未亡人を探す男」よ、どうぞ誤解しないで下さい。

いくら讀んでも讀みたりない氣がして、書く方は後まはしにしてゐたので、作品といつては「彼女」を文藝公論に、「ヨネ」を女人藝術にのせて貰つたきりです。

四年越し、今だに圖書館にばかり入り浸つてゐるので、上野、日比谷、大橋。何處の下足のチヂさんともいいお馴染なのです。



英美子

上京したならば、第一に友子のところ、第二に從兄のところ、第三第四とプランを立てゝゐたものゝ玲子の心身はまだ餘りに衰へ過ぎてゐた。眠られぬ夜は、何か子供の上に異變でも起きてゐるのではないかと胸さわぎがして、これから直ぐにも飛び起きて、子のところへ行きたい衝動のために、心はぢり／＼して來るのだつた。

同じ世に生きながら、まだ西も東も解らぬ二人の子に生き別れて、吾子の世話を手づから出來ない口惜しさに――何のために自分は安閑として生きてゐられるのか？　玲子は酷しく己を詰じり、自分の生命を限りなく呪咀した。

自分にはどれほどに優しい時があつたか、その松田の餘りにも不甲斐ない爲に、故郷へはいゝ恥をさらし、二人の子にも斯うした別れをせねばならない破目となり、何樂しみもない、年老いた父親にも、死ぬ際までもどれ丈け心勞させたかを考へると、玲子は眠ることが出來なかつた。

尠くともまだ五年や六年は此の世に生きてゐられる親の生命を縮めたのは自分であると思ふと、胸を絞められる苦しさだつた。

だが――玲子はこの哀別離苦の哀しみの底に、むら／＼と煙のやうに起きる何ものかを自分の心の内に感じてゐた。稍ともすれば彼女は天に向つて有らん限りの毒舌を吐きたいやうな憤りを感じるのであつた。考へれば考へる程、心の底に殘るものに玲子は惱み且つ苦しんでゐた。

「心、哀しみにあるものは、悲しみを以て主とす」。湘南の海邊に長い歳月病を養つてゐるさる人の、この深刻悲壯な時の一行が玲子の心にふと浮かんだ。けれども玲子はいま、哀しみの中にこの悲しみを主として生きるべきか、煙のごとくたちさわぐ憤りの中に怒りをあるじとして生きてゆくべきかに迷ふのだつた。

鏡の面に映る自分の瞳が、或夜、怪しく熒々としてゐるのを見て彼女は戰慄した。――私は氣が狂ふのかも知れないぞ――だがいま狂氣しては餘りに自分がプーアであると思つた。

玲子は母の死んだ當時、餘り悲歎にくれてゐる彼女を憫れんで檀那寺の方丈が、まだ二十を一つ出たばかりの彼女に與れた、薄黄色い表紙の曹洞宗の修證義を今も大切に藏してゐた。彼女はこれを誦んで少しでもこの忌はしい妄念を消し散らさねばならないと考へた。

玲子は隣室に氣を兼ねながら、日に幾度も聲を潜めてそれを讀誦することを始めた。

生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因緣なり。生死の中に佛あれば生死なし、たゞ生死、卽涅槃と心得て生死として厭ふべきものなく、涅槃として欣ぶべきものなし、――

玲子は泣きながら幾度でも心の落ちつく迄、繰り返した。何となく佛陀の大慈悲が解かるやうな氣がして、泣き／＼彌陀の聲に甘ま

へる心持に彼女は陶酔するのであつた。

玲子の下宿してゐる部屋には、その南側にだけ半窓が切つてあつた。その下は露地になつてゐた。晝間は、あさり屋も屑屋もそこを呼んで通つた。また近所の子供らの集つて來るところであつた。玲子はその子供らの中に吾子の聲を聞いては、窓から首を出した。夜間は、幾度か拍子木を鳴らして夜番が通つた。

土が凍てゝゐるのであらう。護謨底の足袋でも穿いてゐるのか、其の跫音が大地に吸はれるやうに、ひそ〳〵と冷たく枕に響くのであつた。――まだ、夜は明けないのか？――

玲子は掻巻の衿から手をのべて枕元のスタンドを消した。大きな月の影が牡丹の花のやうにカーテンに映つてゐた。朧ろな光芒が淡つすりと室内を和ごめて、裸樹の枝が形よく細い影を作つてゐた。七曜巻きの置時計が、玲子の眠れぬ魂の上で微かに銀の秒音を響かせてゐた。玲子は、この幾年、吾子の脊をたゝいてやりながら、添寢に唱つた子守歌のメロデーを空しく辿つてゐた。

いつの日にも拭はれたことのないかと思はれる埃に汚れた窓のガラスが涙にぬれそぼつた吾子の顔に見えた。寢小便をしてこの夜中に誰かにひどく叱られてゐるのではあるまいか、冷たい着物を邪險な手に着換へさせられて――玲子は、隣家の子供の泣き聲にも耳を塞いだ。

――何ごとをも知ろし召す神よ。私の子供たちは、いつ私の手へ返されるでございますか。私は待ち切れませぬ。もうとても待ち切れませぬ。子に離れて は時も何も、もう書くことは出來ませぬ。私は、彼の日あなたにお誓ひ申したとほり、この通り、淫らな夢をばふつつりと捨て果てゝ居りまする。寂しさを守つてをりまする。私は童女の如く聖められる日を斯んなに念じてをりまする。私は子に逢ひ度いのでございます。早く逢ひたいのでございます。此のやうに切ない胸を御覧下さいまし。このやうに窶れてゆくのは何故でございませう。みな、あなたは御存じの筈でございます。二千年の昔、遊ばされたあなたの奇蹟は、友子の不自由な耳と私のこの耳とを取りかへて下さることは出來ないのでございませうか。寒い雪國の、知らぬ者の手に預けられた潔は、若しや――、私は寂しさうな潔の顔が、涙で輝の切れたいとしい頬がこんなにもはつきりと見えるのでございます。ひよいとすると潔はもうこの世にはゐて呉れないのではないかといふやうな氣が、時々して來るのでございます。消さうとしても〳〵この不安は私の心から消えてはくれませぬ。本當に彼の子は丈夫で居るのでございませうか。――

暫くの間の辛棒だ。いまにきつと、母さんが爾たちを取りかへして來る。必ず取りかへさないでをくものか――

『さあ、お母さんが來ましたよ。』

田舍道を俥の上に確つかりと、潔の柔かい身體を抱いて停車場へと揺られてゆく日を、玲子は毎夜、夢に見た。深夜、床の上に端然と坐つて、彼女は合掌し祈つた。

玲子の日記は子を戀ふる言葉のみで埋まつていつた。

京王電車で其處を過ぎる人は「東洋聾話學校」と、高層な建物の側面に判明と記された文字を見るであらう。

北澤で降りた玲子は一目散に、冬枯れの畑の中に建つてゐる「薔薇の寮」に向つて急いだ。

彼女は、幾度か石に躓づき霜解けの爲に日和下駄が鐵アレーのやうに重たくなるのを知らなかつた。彼女はいま、子に逢ふ悦びのために翅あるもの〻やうに宙を飛んでゐた。

「薔薇の寮」といふのは彼女の別れた子の一人、友子の寄宿してゐる寮である。

風に變るか、雪になるか、灰色の空が重たく樹々の梢に垂れて、朝から時雨れてゐた。

玲子は遠慮がちに寮の玄關の格子戸を靜に引き開けた。頭の上で鈴が一と揺れ鳴り響いた。

すると、隣室から、ばた〳〵と子供等の駈け出して來る跫音がして、玲子がまだ手袋も外づさぬうちに目の前の障子が勢よくさつと開いた。

夢ではないか？――玲子の顏の直ぐ前に、丸い友子の顏があつた。玲子は狂ほしく昂ぶる情をじつと怺へて、數十日の間逢ふことの出來なかつた友子の顏をしげ〳〵と見守つた。――この子はいま泣いたのか――眼の緣がよごれてゐた。玲子は友子の一つの瞬きをも、少しの脣の動きをも見逃すまいとした。

と、友子の瞳が、急にぱつと大きく〳〵みひらかれた。そしていきなり奥の方へと彼女は慌たゞしく駈け込んで去つて了つた。

「マ、ア！　マ、ア！」

非常に明瞭な大聲で誰かに告げる。友子の聲を玲子は聞いた。

――覺えてゐたのだ！

友子は、又、直ぐ玄關へ引き返して來た。おかつぱの髮をゆさゆさせながら……彼女はいきなり、玲子の首に飛びついて來た。

「友ちやん。」

玲子は友子を抱きしめたま〻、場所も忘れて聲を擧げて泣いた。其處へ、保姆の松本さんが奥から出て來た。エプロンが、すこし濡れてゐた。

「まあ、友子は、戀しいマ、さんに久方振りに抱かれて……」

松本さんの背後から、幾つも〳〵同じ哀れな孤兒たちの顔が交る〳〵覗いてゐた。玲子は、この子供等も友子と同じやうに不具なるが故に、親の元を離れて、こゝに來てゐる寂しい子供たちだと思ふと、いま、自分が、母ならぬ母として私かに友子を訪ね、友子とこゝに涙にくれて、思ふさま抱き合つてゐる有様を他の子供らの眼に見せることが何となく罪深くも思はれた。

知らぬ子の一人〳〵を、この通りにしてやりたくも思ふのだつた。

幼稚科の中でも、友子は一番年少だつた。故に友子の我儘は、學校にある時も、寮にある時も特別にゆるされてゐた。

いまは友子は、――學校の赤ちやん。――だつた。

「喜んで下さい。友子はもう大分五十音が言へるやうに成りましたよ。」

と、松本さんは、玲子に云つた。――この次には稽古の時間に學校の方へ來てみたいと、玲子は思つた。

「先達つても友子では大笑ひしたのです。マリヤさまにキリストさまが抱かれてゐる畫が、ボールドに掲かつてゐますの。それを半田先生が或る生徒に、

「キリストさまを、示して下さい。」

と、云つて鞭をお渡しになりましたらばね、その生徒がキリストさまを鞭で指して、お辭儀をして自分の席に戻らうとしますとね友子が、その生徒に、自分をも鞭で指して呉れと云ふのだそうです。人に抱かれることを、友子は「キリストさま」と云ふのだと思ひ込んでゐたらしいのですよ。其時、友子は、半田先生に抱かれてゐたのださうです。」

松本女史の話を聞いてゐる玲子の胸は憐らしさで一ぱいだつた。

「それからは子供達が、友子のことを「キリストさま、キリストさま、」つて呼ぶんですよ。」

――嗚呼、神よ。私はこのいぢらしいキリストさまを、此處に殘して、今日もあの寂しい下宿屋に歸つてゆかねばならないのでございますか？――

松本女史の情けで、玲子はその夕、寮の子供らと共に食卓を圍んだ。御馳走はハヤシライスだつた。

友子は玲子の傍に坐つて、ありし日にした如く、ライスの中から嫌ひな人參を匙にのせては玲子の皿の上にのせた。玲子は心にこれこそ有がたい「天國の食事」だと思つた。一つの飯粒が十倍にも二十倍にも膨れて、玲子の嬉し涙と共に胸先に支えた。

其の夜、玲子は友子がよく眠つてから、「薔薇の寮」を辭した。星の下で幾度か畑の中に立ち停まり、彼女は寮の黒い屋根を振り返つた。

第二巻第三号、九十六頁から百一頁は、高群逸枝著「黒い恋」が掲載されておりましたが、同氏の著作権継承者の了解が得られませんでしたので、本復刻判では割愛致します。

（龍溪書舎）



自己紹介

窪川いね子

「壁の崩れ落ちた田舍の家の一室に、その姉は今もなほ、年老いた母親の苦勞も知らず狂ひまはつてゐるのであります」

平常はよく、おどけ口などきくAさんの自己紹介である。Aさん自身も、話につれて、久しぶりに國のことを思ひ出したに違ひない。兩手をあぐらの膝の上に突つ張り、話の一言〳〵に、汚れたシャツ一枚の身體に、力を入れるやうに前へつき出す。疊の一點を見つめてゐる、分厚な、強度の近眼鏡をかけたその眼が、ガラスを透して殊更飛び出して見える。

車座に坐つて、みんなは默つてその非常に小說的な、悲慘なAさんの話を聞いてゐる。横合からそをつと差し出された手に、私は腕組みを解いて藥罐を渡してやつた。

府會選擧に、初めて我らの代表を立て、この二十日間ばかりといふもの、朝は方々の工場へ始業時間前にビラを撒き、晝は勞働者街の至る處にビラ、ポスターを貼りめぐらし、謄寫版を刷り、ビラを書き、夜は演說會に、そのあとをまた明日の演說會のビラ貼りに、殆ど寐る間もなく運動をして、今日は一先づその運動の一段落ついた投票日なのであつた。昨夜から今朝にかけては、投票所三町以內のビラはりに、候補者自身から、少し熱のある候補者の妻君まで總動員したのであつた。その時、みんなは水を入れたバケツとたわしを持ちながら、そのポケットには、傳單とのりをしのばせた。

勞働者は勞働者の代表を選べ。買收と誤魔化しに乘るな！　などのスローガンを刷り込んだ赤や靑の傳單を。

珍らしい程に霧の深く降つた夜であつた。私は大きな電燈が一つ煌々と光つてゐる活動寫眞小屋の横に、たわしの水に濡れながら板

塀を洗つてゐたが、その横町に急に流れ込んで來た霧を見て、「火事ッ」と思はず叫んだ程であつた。その三間先きも見えない霧の中を一晩中、皆は空腹を忘れ、過勞と不眠とを引きずつて、横町に露路に工場の塀に、最後の活動をつゞけた。私の髪の毛からは絶えず滴が落ち、ちゞみの浴衣をきた肩はぐつしより濡れた。

朝になつて、四方から歸つて來た二十人もの人間は、朝日のかん〳〵當り出した六疊の一部屋に、皆折り重つてくた〳〵に眠つた。今、そのひと眠りの濟んだあとの茶話會なのである。六疊と三疊と二間きりの候補者の家は、紙屑とインキに汚れ、皆がやつと坐れる位で、他には足のふみ入れる場所も無かつた。

「私が勞働運動に入つた動機は、十七の春、働いてゐた自分の工場で爭議をやつた時からであります。」

Aさんの次に、事務長のBさんの自己紹介がかう始まり、やゝ早口に、その鬪爭經歷が述べられる。「三月の大暴壓の際、〇〇署に擧げられた儘二ケ月ばかりも留められ、この選擧戰の開始される四五日前に出て來たばかりであります。」

好きなものとしては、動物園の獅子の子を見に行くことで、それについては可成りの通である、とBさんは話を結んだ。

「私は親も知らない、生まれた場處も知らない。たゞ九州五島のある教會で育てられたことだけを知つてゐるのです。」

岩のやうに頑丈な、赤銅色をした自由勞働者、Cさんの話である。ほうと隅の方で誰かゞ思はず嘆聲をもらす。

「キリスト教の根本思想は、共產主義であると私は子供の頃から信じたのです。それをいゝ加減に拵へ上げてひろめてゐる教會の奴らが氣に喰はず、私自身もすでに牧師として上海へ派遣されたのを、その途中から東京へ來てしまつたのです。」

異議なし！ と誰かゞ聲援する。Cさんは身體つきに似ず、その顔に子供のやうなはにかんだ笑ひを浮べる。このCさんの、キリスト教の根本思想云々については、あとで質問と意見が出た。「宗教はあくまでも民衆を眠らす阿片である。」異議なし！ 押しつぶしたやうな同感の聲も起きた。さうかなあ〳〵と、運動に入つて間のないCさんはしきりに首をかしげる。

私は話を聞きながら、間もなく自分の番になることを思つて、幾分胸がそは〳〵し出した。人前で話すことに慣れない私は、いつでもかうした場合、自分の番の來るのが怖しいやうな氣さへした。いよ〳〵隣りのDさんの番になり、自分のすぐ左肩にその話聲を感じながら、私は私の話し出す聲がふるへなければいゝがと心配した。

「では、次へ願ひます。」Dさんの話が濟み、座長のさう言つた聲をきつかけにして、私はなるべくゆつくりと口を切つた。

「私は、今日までに可成り、いろ〳〵な境遇を經て來ましたので、それを一つ〳〵あげて見ようと思ひます。」

皆の聽覺が私に向けられてゐる。そして私は自分の表情が、薄笑

ひを浮べたまゝこはゞつてゆくのを感じた。目の前の煎餅の袋へ差し伸ばされた誰かの腕を、目で追ひながら私は話しつゞけた。小學校を途中で止して、十三歳の暮には私はすでにある製菓工場の女工さんであつた。然しこの工場での、纖弱な少女の精一杯の勞力に對する賃金は、往復の電車賃に代へられるだけに過ぎず、毎日のお八つ代一錢が不足になる。それでその工場を二ケ月ばかりで止めた。

初奉公のちやんそば屋では、――ちやあしうめんひとをつ――の呼び上げさへ出來ず、じやが薯を剝く庖丁は私の小さな手をおびやかした。「大きくなつたら、またおいで。」片言まじりに言ふ肥つた支那人の旦那の前に、私は赤い顏をしてぴよこんと頭を下げた。

次にやられたのは或る料理屋の奥の小間使ひであつた。家へ歸りたい、おばあさんに逢ひたい、私はその思ひを一年間待ちつゞけた。そしてたゞその慾念だけで暇をとつた。

その後幾月かを、祖母と、病身な叔母と三人だけで内職をして暮した。いつも金がなく、その時は關西の方に職があつて一人行つてゐた父からも送金がなく、祖母はぐちをこぼしながら、枯木のやうに瘦せ細りつゝ氣狂ひのやうに働いた。私は悲愴な決心をした。「いつそお半玉になつてしまはうと思ふ。」と書いて父へ送つた。「お前さんはお酌になる氣ないの。」さう言つたある藝者屋の女將の言葉を思ひ出しつゝ。折り返し父から返事が來て、私はまた學校へ上る希望を抱いて父の許へひとり旅立つた。祖母は涙を浮べ、喜んで東京驛に送つて呉れた。

男親ひとりの許で、氣むづかしい父に極度に壓迫されながらも、父の勤めに出たあとは、手當り次第の雜誌に讀みふけり、いつも五六匹の犬を引き連れて歩きまはり、私自身野放しにされた犬のやうに自由な生活を一年あまりつゞけた。父の無精から學校へは上れなかつたが、新しい母が來て、やつと娘らしく縫物など敎へられた。

「あもし〳〵、檢番？　××家の〇〇さん居ますか。」

地味な縞お召の着物に黒繻子の襟をかけて、藝者の口をかけてゐるのは私である。十七歳の夏、また祖母と暮すために上京して、他に勤め口を探すことに氣おくれを感じ、以前の奉公先にまたづるづる働くやうになつたのである。今度はお座敷の女中であつた。祖母へは毎月定まつた送金が出來た。然し、その家の客筋は所謂旦那方が多く、私はそれへの氣苦勞がつく〳〵厭であつた。それもいつの間にか一年續いたが、やめる頃には宴會の折詰めも上手になり、道で行き逢ふ藝者たちは私に首をかしげて黄色い聲をかけた。「おみね姉さん、今程。」そして私はまた父の許に歸り、勤め人の娘さんに成り濟ますのであつた。

或る書店の店員生活は、やゝ私の望んだ生活に近かつた。文學書に讀みふけり、音樂會の切符を工面した。私は今、不揃ひな一張羅の自分たちの姿に引け目を感じながら、物欲しさうにおど〳〵と歩く娘たちを街頭に見る時、何にもまして不愉快になる。それはその

頃の私の姿であつた。そして私は毎月その算盤の桁を外れまいとして、杓子定規的な毎日を暮した。併し三年間のその生活は、私に遂に絶望的な厭世觀を抱かせた。私は毎日自殺を思ひつゝ重苦しく店へ通つた。震災は、私の當時のやけくそな希望の一つの形で現れた。

　父はまた上京した。そして父の職のあるまで、私はあるレストランに通ひ始めた。艶々と髪に波を打たせ、水色に紫に錦紗の袖をひるがへし、オーケストラの中をおよぎ廻る金魚であり、花である彼女らの一人であつた。

「私はその生活も一年あまり續けました。その頃から下田の讀む社會問題などの本を讀み始めましたが、子供の頃から、貧乏な生活を續けてゐる私には、さうしたことに何の疑ひもなくすうつと入つて行けたのであります。然し、私は貧乏な生活とは申しますが、生まれた家が小市民根性そのものである勤め人階級であり、その後の殆ど全部の生活が、たとへば茶屋奉公とか、女店員とか、カフエーの女とかでありましたので、現在もなほ、その小市民根性を多分に持つてゐるのであります。私は今それを、その根性の出る度に克服すべく心がけて居ります。」

　異議なし！　二三人の聲を聞きながら、私はそおつと上氣した顔を上げた。とEさんが手を擧げた。

「座長、質問があります。」

「よろしい。」

「今、非常にいろ／＼の境遇を經て來られたみね子氏の自己紹介があつたのでありますが。」

　見ると、Eさんは下向きのまゝ重々しげにしやべつてゐる。「その海千山千のみね子氏を、如何にして、下田君が獲得せられたか、その點を少しききたいと思ひます。」

　どつと笑ひ聲が起る。言ふ迄もなく、下田も其處に居るのである。ちらと見ると、彼は眉を顰めて笑つてゐる。「座長」と私は手を擧げた。「Eさんの今の御質問は、何卒下田の方へ願ひ度と思ひます。」

　卑怯々々といふ聲が座長の聲と入れ交る。下田はもう自分の紹介を終つてゐたのだ。そして座長の計らひでやつと私はその質問から逃れた。自己紹介は次へ移つた。私はまだぼんやりと自分の話した跡を追つてゐたが、ふとEさんの言つた海千山千といふ言葉が氣に掛り出した。海千山千といふ言葉は賣笑婦的に聞える。Eさんは本當にさうとつたのであらうか。私は少し憂鬱になり出した。これもやはりプチブル根性の一つだな。そして私はその氣持を拂ひのけようとした。――だけど、私は一言言ひ足せばよかつた。そんないろんな境遇の中に置かれたけれど、その間に一度の男女關係も、戀愛さへも、下田以前に絶對に無かつたつてことを言ひ足せばよかつた。――私はさう氣づいて少し悔やんだ。若しも生活經驗といふものが、男女關係に對する豫想のもとに問題になるならば、私はその點では確かに生活經驗が乏しいのに違ひなかつた。



もう一つの情熱

城しづか

――お前は俺に復讐したつもりだな――

その前夜、私のその時までの夫は、最後にかう言ひました。

――まあ、どうしてそんなことおつしやるの？――

私は悲しげに彼を見上げました。然し、一番眞實な私の心は、一瞬間さつと勝ち誇つた笑みを浮べたのでありました。も早私は、一ケ月前までの、從順な、眞實な彼の妻ではなくなつてゐました。が、私の心は「復讐」とよぶには、あまりに眞實なものがあつたのです。私は私の夫の、かつての深刻な戀愛事件に對して、復讐しようなどとは、夢にも思つた事はありませんたゞ、名付け難い、抑へようのない一つの情熱に支配されて、夫の心を見返り見返り、そして最近ではも早見返る事さへも少く、この情熱の影のみを追ひかけて、あえいでゐたのでした。

私の夫、湊明夫が五年來私を大きな愛で擁して來てくれた事は、私にもわかり切つた事實でなければなりませんでした。だのに、この私といふロマンチストは、私の夫がこのご

ろ少しもフレッシュな氣持ちで、甘やかな愛情を露出してくれない事に、堪へ難い不滿と寂寥を感じてゐたのです。

（何といふどつちつかずな、つまらない生活だらう——）

さま〴〵な家庭の煩雜さは、愛慾の外のもう一つの世界——藝術の途への精進といふ事にさへも、私を開放しませんでした。

　五年間の結婚生活に於て、私は初めて倦怠を感じ出しました。欲しいものは燃える情炎と力とでありました。何らかの生活の變化でありました。しかも私は、その欲求をはつきりと意識してはゐなかつたのです。そこに一つの對照が出現するまでは——

　若く、美しい情熱でそれはありました。この汚濁の人生に珍しい純粹な魂でありました。やつと二十一の秋を送つたその青年の、一すぢの情熱は、どうして私のかぼそいたましひをゆり動かさずにゐましたらう。

　ふとある瞬間、私はその青年の素晴らしい眼を發見したのです。

（子供の眼の、あの黝い眼を、あの白眼の淸らかさを、あの睫毛のおほひかぶさるやうな長さを、御存じでせう！）——それなのです

しかし二十二の青年の眼の中には、その美しさの中に哀愁があり、靜けさが深々とたゝまれてゐました。

　いつも好んでかぶる、黒いベルベットのハンティングの、まぶかなひさしの影から、ものおもふやうに靜に動くその眼は、その眼はあの木々の梢をもれる三日月の光といふに最もふさはしいものでありました。

　樹がくれの月——私はその眼にそんな名をつけてやりました。そしてその眼は、あのやうに純粹な彼の心を最もよく物語つてゐるかのやうでした。

　青年の持つ性格のすべては、淒が持つてゐない美點でありました。私は私の淒が持つてゐる、よりよきすべてをいまは冷く默殺してゐたのでした。

——哲ちやんの眼は素的だな。詩人だつたら、いゝ詩が出來さう——

　ある時、私は青年の顏をみずに、冗談のやうに獨り言のやうに言ひました。青年は默つてゐました。微笑してゐたのか、私の顏をみてゐたのか、オリオンを見上げてゐた私は知りませんでした。

　またある夜——

——ぼくはね、なな子さんをとても好きだつたんだよ。だけど、そんな事は言へないでせう。なな子さんはマダムだし‥‥僕、寂しかつたな——

——まあ‥‥ぢやあ、哲ちやんは‥‥それ、ほんとう‥‥？——

　青年は彼獨特の、しづかなうなづき方をしました。

　かくて、一切は情熱の趣くに任せました。堰を切つた泉のやうに私の情熱は對手のそれと共に、渦卷き流れました。

然し、こゝにも矛盾はひそんでゐました。

私は一人しづかに考へる時、この新しい情熱の火の消える時を想ふのでした。五年間、たんたんと流れて來た親しみの流れは、やがてひとゝきの私の情火を、消滅さしてしまふに違ひない――しかも自分がもう一つの情熱に支配されて行く姿を、寂しく惱む夫をみてひそかな、惡魔的な歡びを味つてゐるわたくし。そして、このかりそめの戀の結末を見透す事が出來るだけに、無論瞬間々々の、私の心が眞實より外の何ものでないにしても――私の心は青年をいとほしみ哀れむ心で一ぱいになるのでした。

この新たに芽生えた情熱が、私にいゝ「小説」を書かせるであらう…あるときはこんな冷やかな、現實的な事も考へた私だつたのです。そして自分のあまりにエゴであることに、唾を吐きかけたくもなり、でも、少くもこれが眞實なものである以上は救はれる――と自己辯護をしたりするのでした。

毎日、私達は何も言はずに、七十八の石段を上りました。その石段を上つて靜な道へぬけた所に、私の毎日の仕事が待つてゐたのです。青年は毎日、ある電車の停留場でいつまでも私を待ち、その石段を一緒に數へるのでした。

石段を上り切ると、私達はきまつて右の手を組みました。

――ちや、また明日――

――

禁斷の果實の甘味な事は、一九二九年のアダムとイヴにも等しく感じたことでした。

流れ星が一つ……

アスファルトの路は、まるでこのまゝローマへ通じるやうに、まつすぐに白々と光つてゐました。右手には黑々と森の樹々が沈默し、左側には人家の門燈がしづかでした。

――ねえ、もしか哲ちやんとなな子さんとがこんなに仲よしになつた事を湊さんが知つたら――そしてなな子さん家を追ひ出されたら――

私は立止つて青年の蒼い顏を、靜な眼を、ぢつと見上げました。

――そしたら…一緒に暮すさ。ぼくね。なな子さんの爲なら命を捨てる覺悟なんだよ。ね、なな子さん、わかつてくれる？――

アダムは、イヴの細い胸を、痛いほど、抱きしめました。恐しい眞劍さが、メスのやうに私の胸を貫きました。それより外、その時の私には何を想ふ事も許されませんでした。

が、次の瞬間――私は現實に引返さねばならなかつた。

――でも、ねえ、哲ちやんは結局哲ちやんなんだからなあ。――

二十七の人妻である私は、寂しくみづからを顧みて唇をかみしめました。

ふとした機會が、遂に湊の態度を斷然たるものにさせました。
私は家を追はれました。

詫びるでもなく、未練を殘すでもなく、風のやうに湊の胸を去つた私に對して、湊がどんなに寂しがつてゐたか、五日の間、今日は歸るか明日は詫びて來るかと、どんなに待つてゐたか、それ以來仕事もせずに、如何に醉ひにごまかした生活をしてゐたか、愚かな私は考へることが出來なかつたのです。

毎日々々、青年と時間を定めて落ち合つては私の巢を一緒に探して貰ひながら、私は、自分の爲に命を投げ出してくれるのは、この青年よりないとさへ思ふやうになつてしまつたのでした。もし、この青年がどんなに自分より幼いものであつても、また將來どんなことにならうとも、自分はこの青年を捨てることは出來ない。それは恐しい罪だ――と思ふやうになりました。

やつとのこと、五日めに部屋を探して、私はすぐ自分の荷物をとりに湊の家へ行きました。

夜具と、本箱と机と、そして行李などをまとめて、運送やに托しいよ／＼最後の「あでゆう」をする時、少し前までゐた湊の母も叔父も、遊びに來てゐた友達も、それ／＼外へ出てしまひました。

――さよなら、御機嫌よう――

さすがに私は心暗く寂しく、うつむいたまま湊の前に坐りました。

その時、私はまだ、私の今までの戀人であり夫であつた湊が、自分との別れを悲しんでゐるとは思はなかつたのでした。

――なな子。お前は純粋なものを追うて出て行かうとしてゐる。だが、人生はお前の思つてゐるやうなものではないぞ――

私は何かしら、眞實なものが胸にせまつて、はつと湊の顏を見上げました。伏せた彼の睫毛に、涙が光つてゐました。

――あゝ……

私は思はず、彼の膝にうつぶしたのです。

――なな子、お前はいくのか、いつてしまふのか、俺をおいて行つてしまふのか――

どんなにこの言葉は、私を愕然とさしたでせう。生れて、ほんとに生れて、この時ほど驚いた事はなかつた。

（この人はやつぱり私なしに生きられないのだ――）

私はさめ／＼と悲しくなりました。大きな波のやうな悔いが、私の身體中を引きしめました。今まで、この男の爲めにあらゆる苦しみと侮辱をなめて來た事は、今日の、この瞬間の、この眞劍な態度があまりに見事に償つてくれたのです。

涙とせつぶんとが、雨のやうに私の顏中にふりかゝりました。

――行くな、行くな。俺は寂しいんだぞ――

私は激しくうなづきました。だが、今頃郊外の借りたての家で、

私の荷物を片づけるべく、荷の來るのを待つてゐる青年のことは、どうして忘れられよう。

(哲ちやん。あなたを忘れはしない。だけど、ごめんなさい。こゝにもこんなに悲しむ人がゐた。私はやつぱり現在までの道を辿つて行く方がいゝと思ふ――あなたを欺いたのではない。ない。決して――まだあなたを愛してゐる、最後まで愛してゐる。けれど、なな子さんはいま、哲ちやんの胸に歸つても、決して明るくはなれないだらう。私はきつと寂しい〳〵なな子さんになつてしまふに違ひない。あなたも寂しくなる。やつぱり、これまでだ――哲ちやん！今夜は別宴をしよう――)

私は恐しい、憎むべき女であつたのだらうか？ あまりに利己的な、醜い女であつたのだらうか？ 火の様な情熱のお隣に、氷のやうに冷やかな眼を持つてゐる女だつたのか。

それともほんとうに、ほんとうに湊を愛すが故の、それが故に湊の愛に對する、より深い自信を得んが爲の無意識的な行動であつたのか？ 私には、私自身でもわからないのです。大きな矛盾でした。どこまでが眞實で、どこまでが戯れであつたか私にはわかりません。

――もしも私の態度に戯れがあつたとするならば――

――なな子は歸つて來るわ。きつとあなたのとこへ歸つて來るわもう暫く待つてゝ。ね、暫くあの家で一人きりで暮らしてみたいの、きつと、歸つて來る時まで、待つてゝ――

私は、湊が財布の底をはたいて私に握らしてくれた幾つかの銀貨を大事に持つて、見返り、見返り、再び叩くであらう入口の扉をしめました。

戀愛警句

生田春月

どんなに熱烈な戀愛でも意志の力で制御する事が出來る。

戀愛は非常にいゝもの、同時に又非常につまらないものである。

つまり戀愛なんてものはランチでしかない。

嫉妬は戀愛に於て芥子のやうなものなり。

戀愛とは鬼ごつこなり。

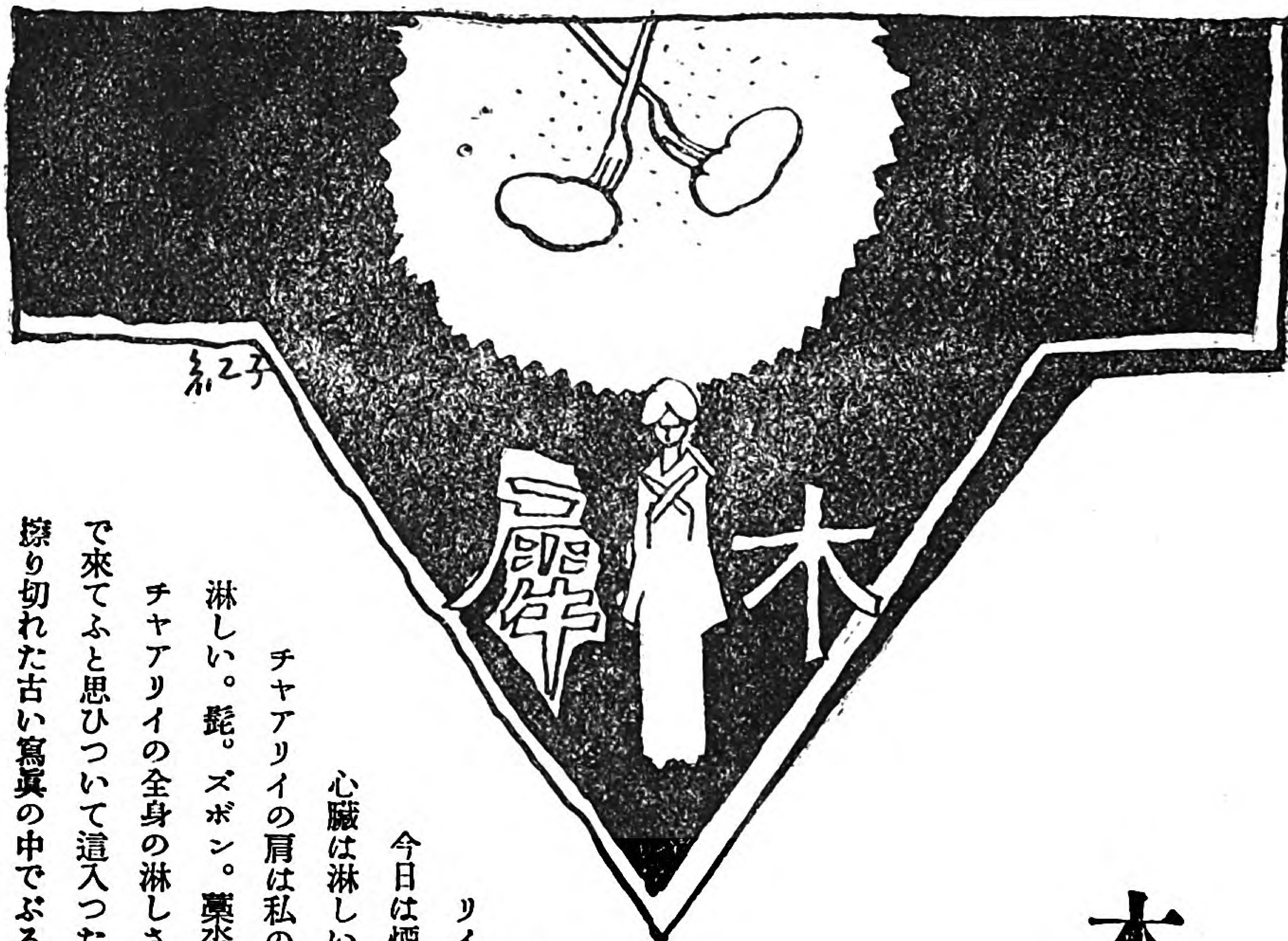
戀愛に於て夢は破られても破られても破られ切れないもである。

激しい情熱を求めてゐる間、それは非常に尊く思はれる。が、手にとつてみればむしろ煩はしいものである。

ラヴ、即ちエゴイズム。

絶えず不安が伴へば伴ふほど、戀愛の氣持は新しくなる。

女はみんな娼婦で、男はみんな阿呆と野獸との混合物である。



木犀

尾崎 翠

木曜、今日はチヤアリイが衆樂キネマの幕から消えてしまふ日である。私は彼に別れを告げに出掛けなければならない。

夕方の六時になつて火葬場の煙突が秋の大空に煙を吐き初めると、私は部屋にじつと坐つてゐられなくなつた。私は三日前の夜からチヤアリイを戀してゐるのだ。

今日は煙が左に向つて靜かに流れてゐる。爽かな北風で頭は澄んでゐるが、私の心臟は淋しい。三日前の夕方N氏を上野驛に送つて以來。

チヤアリイの肩は私の心臟と同じに淋しい。彼の帽子も淋しい。彼の杖も淋しい。彼の笑ひも淋しい。髭。ズボン。藁沓。彼の全身が淋しいのだ。

チヤアリイの全身の淋しさが、N氏と別れた上野の歸りの私の心臟に熱を捲き起した。家の近くまで來てふと思ひついて這入つた場末の哀しい衆樂キネマで、月おくれのゴオルドラッシュをやつてゐた。擦り切れた古い寫眞の中でぶるぶると踊るチヤアリイのポテトオが胸に迷つてゐた涙を素直にほぐして

くれた。そしてN氏の影の代りにチヤアリイが私の心臓を捕へた。その夜から私は毎晩彼に逢ひに出掛けた。

私は屋根裏の借部屋で啞であつても、または一本の苔であつても差支へないやうな日日を送つてゐる。今日も朝からまだ一度も聲を使はない。私はチヤアリイと思ひきり喋舌つて來たいのだ。

N氏と逢つたのは殆んど十年ぶりだつた。私たちは昔互ひの學生時代に少しの間友達であつた。昔からすこし懶さうな、いくらか曇つた顔をした彼だつたが、久久に逢つた彼はその調子がすこし濃くなつただけで、さう變つてもゐなかつた。北の方の牧場で牛と一緒に暮してゐると氏は言つたが、さう聞けば彼は何處か牛に似てゐた。屋根裏の私が苔に似てゐる程に。彼はまたヒステリイ女の奥さんに逃げだされて一人になつたと言つたが、今の彼にうらぶれた匂ひがすこしばかり沁みてゐるやうでもあり、ゐないやうでもあつた。彼の目立つた特徴といへば、彼の肺臓が驚くほどエアシツプの煙を好んでゐる點だけだつた。

私はホテルの八階のN氏の室に一時間ばかり坐つてゐた。別に話も榮えず、N氏はエアシツプの煙を恐しくたくさん肺に通し、私はその三分の一位の朝日を喫つた。默り勝ちな時間が氣づまりでなく過ぎた。私のセルの膝にあるかなり大きい煙草の燒穴も平和な氣もちで眺めてゐられた。N氏は多分出先きから歸つたままであらう、脊廣に襟飾をきちんと結んでゐた。らつきよ型の影の薄い顔と痩せた體に調和した鼠色の襟飾だつた。

私はヒステリイ女のN夫人は勿論、N氏がその奥さんと結婚したことも、奥さんに逃げ出されたことも知らなかつたが、默り勝ちなその日の話の中でN氏が一ばん多く語つたのはやはり奥さんのことだつた。「――つまり牛なんかと一緒に暮してゐることがフラウには我慢ならなかつたんですね、牛の中には僕をも込めて。何しろ女つてものは限りなく慾ばりだから」

「それで、どうなすつたんですの」私は禮儀として一言訊いた。

「熊のやうに頑健な、しかも桃色好きな奴と二人で行つちやつたんです。しかしその方がフラウには好いのです」

一週間の出張期間を終つて明日歸るといふ日の夜、N氏は突然私の部屋を訪ねた。海老茶色の襟飾がすこし花婿臭く、氏のらつきよ型の顔に不似合ひだつた。氏は何となく落ちついてゐなかつた。その反射で私も氏の襟飾を滑稽がる餘裕をなくした。

N氏は不機嫌な顔でたてつづけに番茶を飲み、丁度私の机の上に載つてゐた豌豆をしばらく嚙んでゐた後、私に牛のゐる牧場に行かないかと言つた。

「いつたい僕はあの頃この申込みをすべきだつたんです。當時そんな氣もしたんだが、あなたがあまり人間に背中を向けてゐたものだ

から」
しかし私は屋根裏から動き出す氣がちつともしなかつだ。私は手持無沙汰に部屋の中を見廻した。海老茶の襟飾よりも灰色の壁にほこりを被つてぶら下つたナイトキャップが私を感傷的にした。

汽車の窓から顔を出したN氏はもとの鼠色の襟飾をつけてゐた。總てホテルの八階で逢つた通りの彼に還つてゐた。

汽車が發つて歸途についた私の心臟は餓えて淋しかつた。行つてしまつたN氏を追つてゐるのだ。電車を降りて家の近くまで來た時私は衆樂キネマの存在を思ひだした。

映寫中の暗い土間で私は誰かの足をひどく踏みつけた。

「痛て、畜生」と憎々しく言つた聲がそのまま吹笑に變つた。雪の中を彷徨してゐるチヤアリイの後姿に向つて投げられたのである。

吹雪の中のチヤアリイの肩は古寫眞の雨にぼかされてぶるぶると震へてゐた。私は塗りかへペンキと便所の匂ひに包まれてチヤアリイの肩を探さなければならなかつた。彼の肩ばかりではない。日おくれのゴオルドラッシュ全體が雨に降られて身震ひしてゐるのだ。そしてチヤアリイはといへば全世界に笑ひを撒かうとして却つて淋しさばかり撒いてゐた。

しかし小舍の見物は、法被も、鳥打帽も、お婆さんも孫も、娘も、みんなチヤアリイの望み通り絶えず笑つた。變態感情に陷つてゐるのはやはり私の心臟だけだ。

戀人に待ちぼけを喰つたチヤアリイがポテトオダンスを踊りだした時、法被も鳥打帽もお婆さんも孫も娘も笑ひの渦で一つになつた。孫の坊やは鹽煎餅を投げだして手を叩き、椅子の下のラムネの瓶まで歡聲を揚げた。私の心臟はさめざめと泣きだした。

木曜のポテトオダンスが終つて小舍を出た私は行き場を失つた。しかしともかく薄暗い横町を拾つて屋根裏へ歸るより他に行き場もない。

「上野の歸りにあなたに逢はなかつたら、今日の木曜の夜がこんなに淋しくもなかつたでせうに」

私は伴れのチヤアリイに向つてこぼした。彼は嚢を背負ひ藁沓をはいて、孤獨な彷徨者の姿のまま私と並んで歩いてゐた。短い髭が氷で綴られてなほ短く見えた。

「N氏は牛の處へ歸つてしまつたし、あなたは今夜きりあの小舍から行つてしまふし、明日から、私は、何を……」

チヤアリイは例の手つきで帽子を上げて靜かな敬意を一つ呉れた。私は四日間のポテトオダンスの涙と水洟の泌みついた手巾を出して洟をかんだ。チヤアリイは今一度帽子を上げた。

嚴しい邸宅の前で私たちの體は靜かな木犀の香に包まれた。香の奥で世にも幸福なお孃さんのピアノが「トロイカ」を吹いてゐた。私

の心臓は沈默の敬意ばかり吳れてゐるチヤアリイに向つて素裸になつた。

「チヤアリイ、私は牛に似たN氏の影を追つかけてゐます、申込みをしりぞけられて牛の處へ歸つて行つた彼を。だからあなたを愛してゐるのです」

「あまのじやくめ」チヤアリイは杖で木犀の香を蹴りつけた。「何だつて俺とジヨオジアのやうにハッピイエンデイングにしないのだ。だから俺は地球の皮といふ場處が嫌ひなんだ」

「私だつて地球の皮といふ場處が嫌ひだからN氏の牧場より屋根裏の方が好かつたのです。あなた方のハッピイエンデイングだつて地球の皮をはなれた幕の中ぢやありませんか」

「ぢやさつさと屋根裏にお歸りなさい」

チヤアリイは杖で私の部屋の方を指し、それからくるりと踵を返して淋しいトロイカの呟きを杖で小刻みに切りながら歩きだした。

チヤアリイにまかれた私は牡丹餅のやうなお君さんのゐる汚い喫茶店に這入つた。いつも客を待ちあぐんでゐるお君ちやんは二度ばかりで私の顔馴染になつてくれた。今日もぽつねんと前掛に両手を入れてゐたお君ちやんは、私の朝日にマッチをつけてくれた。

「あゝ、チヤップリンが覗いてるわ、ふところから。惡いしとね」お君ちやんは私のふところから素栞キネマのプログラムを引つぱり出した。「チヤップリン、お好きなの」

「大好き」

「妙なしとね」お君ちやんは私の手にした珈琲がこぼれる位大聲で笑つた。

「どうして」

「だつて、だつて色男でもない喜劇役者に大好き、なんて言ふんですもの。誰だつて色男でなくちや、大好きになんかなれやしないわ。あたしだつてヴアレンチノが死んでから活動嫌ひになつちやつたわ」

三十錢は明日の電報料に取つておかなければならない。私は殘りの四十錢を卓子に並べて店を出た。

階段に端書が來てゐた。「木犀の香りの中を拔け」――N氏が拙い詩を一ぱい書きつけた端書だつた。氏も木犀の中を通つて牛の處へ歸つて行つたらしい。

さて私は明日鄕里の母に電報を打たなければならない。私は金をありたけN氏の詩の上にはたき出した。お君ちやんの店で殘した十錢玉三つの他に銅貨が四つあるだけだ。お母さん、私のやうな娘をお持ちになつたことはあなたの生涯中の駄作です。チヤップリンに戀をして二杯の苦い珈琲で耳鳴りを呼び、そしてまた金の御無心です。しかし明日電報が舞ひ込んでも病氣だと思はないで下さい。いつもの貧乏です、私が毎夜作る紙反古はお金になりません。私は枯れかかつた貧乏な苔です。



飢餓途上

松田解子

上京後五十日に近い下宿生活も、今は行き詰りの形となつた。どうにか決心しなければならない破目まで、彼女の生活の脚は伸びて了つたのだ。フトした機會で紹介された原田の方からは、其の後何の音沙汰もなかつた。遂ひ思ひ切つて此の家の三疊に引越してから、毎日〳〵重い鎖を引きづる様な東京辯で、東京中を仕事捜しに歩いてゐたのだが、疲勞と失望を全身に刻み込んで、グッタリとなつて部屋に歸るのが例であつた。宿の女將は、本能的な敏感さで、彼女の財布を透視したらしく、半月も泊つたと思ふ頃はかう切出した。

『あのね、家はかう云ふ規則になつてゐますの、つまり、一旦部屋をお貸しゝたら、必ず一箇月は居て貰ふ事に――そして若し一箇月と經たないうちに部屋をあける様でも、其の月分のおあしはお返しゝない事になつてるんですの』

英子はカッとした。

『だつて、おかみさん。そんな規則は私には通用しませんよ。私だつて大した金持ちの娘でも

ありませんし、毎日かうして仕事を捜して歩いてる程ですもの、何時どんな事で此處から出る事になるか分りません。其の時は是非殘つた部屋代を返して貰はなくちや。』

『でも、旦那がさう決めてるんですよ。』

女將は、鬼子母神に似た皺を額に疊んだ女である。

『さうを。旦那さんは中々いゝ規則を作りましたね。』

彼女は十分、劍を含んで云つた。

『私にはそんな規則、通用しませんから。』

何かブツ／＼云ひ乍ら女將は梯子段を降りるのだつた。

坑山を出る時持つて來た金はもう殘り尠かつた。それに毎日外食し、交通費をかけて歩き廻るのだから、生來呑氣な彼女も、幾分頼りない淋しさを意識せずには居られなかつた。

袋張り。番地札の宣傳屋。絞り染めの內職文房具の行商。等々と彼女の半乞食的な職業は、慌しく變化した。そして、疲れた五體は夜毎に惡夢の巢となつた。階下の女將が、牙を剝き出して彼女の寢込みを襲つたり、鑛山にストライキがあつて、鑛山長の邸宅が、ダイナモで破壞されたり、彼女自身が其の火の中で喘いだり、家に殘した母親が死にかゝつたり――。朝、トラックが街道を搖ぶり乍ら通る音に眼は覺めても、肉體は釘づけされた樣に重かつた。トランクを枕にした頰が、其の跡をのこして痛み、白い寢卷きは、夜中、夢中で蚊を殺した血の斑點に飾られ、頭は、ズキズキと鳴つた。

『木村さん。お手紙よ！』

珍らしく機嫌よい女將の聲だ。

『あのね、書留なのよ。私がハンコを捺して取つておきましたよ。』

『ありがとう。』

英子は布團から跳ね上り、むさぼる樣に、渡された手紙の封をむしり裂いた。先づ十圓の爲替である事を確かめて

英さん。此處に十圓。私も相變らず貧乏してる。けれども未だ教壇にへばり附いてゐる丈け、あなたよりは幾らか樂だ。

身體を大事にして下さい。

友枝

英子は喜びと、屈辱を同時に感ずる。そして自分の無計畫さとルンペン生活に、嘔吐したい樣な嫌惡を覺える。

飯屋に出やうとして梯子を降りると、女將が、相好を崩して彼女の眼を讀まうとした。

『宜しいんですわね、お宅さんから送つて下さるんですか。』

『いゝえ、友達よ。私の家はとても貧乏で。』

英子は女將の狙ひ所を直感した。定食十錢の麥飯屋が、江戸川の橋の袂のバラックにある。暗い土間に汚れた飯臺が一つ。トタンの壁には、新聞紙に擦り付いた數行が、際立つて黑く光つてゐる。

――麥飯は、安くて身體の爲めに良い。

――働いても働いても吾が生活樂にならざりぢつと手を見る。

五十位の男やもめが、麥飯の丼を捧げて見慣れた彼女の前に無愛相に現はれる。新聞配達や納豆賣りで生活と苦學を續ける鮮人學生や、仕事にアブレた立ちん坊が入り代り、立ち代る。或時、手足に鱗の樣な垢を溜めた宿無しが、彼女の側で夕食をとつた。ドンヨリと窪んだ眼には涙が光つて、咽喉が痰と食慾でゴロ〳〵鳴つてゐた。二人は殆ど同時に飯屋を出た。或種の氣懸りから、英子は彼の一歩後から從いて行つた。刺す樣な夜風屍々の冷い瞬き、そして、夜を忘れたかの樣な大都會の騷音。併し、彼は恰も此の世の光明から絶緣された一匹の土龍の樣に江戸川公園の暗に消えて行つた。

——をぢさん！

彼女はさう叫ばうとして聲を呑んだ。空つぽな懷と、布團のない部屋。どうして自分には此の老人のパンと寢床を保證する事が出來やう。彼女は唾するやうな氣持で歸つた。

坑山には雪が、坑夫長屋の高さに積り、穴藏の樣な部屋の隅々には吹雪が溜つてゐるだらう。第三番目の父は、痛む咽喉をさすり乍らポットでコークス莚を燃す事だらう。母は曲つた背中で泥を運ぶ事だらう。大地が雪に縛られて了つた樣に、飢餓の强迫で肉體を縛られた無數の奴隷達が、默々として坑を潜る事だらう。あの蒼白い坑内機械夫等が、暗の中に仲間の手を求めて指し出したパンフレットを、監督とスパイが奪ひ去りはしないか。自分達の築きつゝあつた一つのグループは、八人の家族を背負ふ仕上工の家の二階に、健かであらうか否か？　これ等の思ひは、明日の生活に對する不安と交錯して、彼女の意識を、滅茶苦茶に引きち切つた。拂ひ切れぬ部屋代、枕と布團のない夜。油をつけない髮が乾草の樣にもつれて搔い。訴へる者も、鬱憤の晴らし場もない彼女は、檻の中の雌虎の樣に、大きな瞳を見開いて、混亂した頭を抱へ乍らうんうんと呻つた。それは百日に足らぬ月日だつたが、彼女にとつては、無限かと思はれる飢餓の連鎖であつた。

朝刊を滿載したトラックが二階の窓を搖ぶり乍ら通り過ぎた。彼女はヘルメットを被つた娘子軍の樣に、必死の氣持ちで起き上つた。念を入れて、顏や首や耳を磨くと、タオルに眞黑い垢が着いて來る。髮は朽ち葉の樣に落ちて來る。何處も彼處も此の樣に滅びつゝあつたのではないか。彼女は知らぬ間に空しく發散しつゝあつた自分の青春を、塊り落ちた髮の中に見た。久し振りに廣い帶を背負つて割引電車に驅けつけた。『錦絲堀』これだ。

埃の澱んだ隅田川の東に、巨大な煙突やタンク共が陽を浴びて聳えてゐる。永い間訪問しなかつた『K——社』は、相變らず肋骨じみた障子を閉め切つてゐた。バタリと開けると、

『誰だ々』と、ど鳴つて、梯子段がゴリゴリ鳴つた。

『何んだ。バカに早いね。まあ上つたらいゝ。』

原田が寢卷の儘で、長く伸びた髮を搔き上げ乍ら云つた。

『××自轉車工場に行かうと思つて——此の邊だと思ふけれどよく

分らないの。』
『募集してるの。』
『さう。女工を二十人も募集してるのよ。』
『森永に行つて見た？』
『えゝ、けれどやつぱり駄目。第一眼鏡がいけなかつたらしいの。もう、足の減る程歩き通しよ。あるものは乞食商賣だけ、全く嫌になつて了つた。』
煙草の吹殻を溜めた火鉢には未だ火がなかつた。誰か二階で布團を疊む氣配がしたそのはづみに、汗と垢のむつとする臭氣が流れて來た。
『僕はもう、インク担は大分なれたよ。…けれど職工が六人位の手工業工場だからね。』
無精髭が、赤黒く刺々と彼のアゴに突き出て眼にはやつぱり二條の血線があつた。彼は例によつてバットの殻の內側に鉛筆で地圖を書いて呉れた。
『まあ行つて見ます。』
『眼鏡は外して行く事だね。それから出來るだけおとなしさうに。』
二人は苦笑した。二階からドシンと云ふ音と『晝でも夜でも』の太い唄聲が起つた。偉大な口髭を持つ今野が、ゴト〳〵降りて來た。
『あゝ、木村さん。』
『さう。××自轉車に行くんだつて。』
『未だ仕事が見付からないの。』
『えゝ。』
『××自轉車に入れるといゝがね。』
篠と山田は、未だ二階に居るらしかつた。若々しい聲が『プロレタリヤ。』を唄ひながら掃いて居た。やがてバタ〳〵と駈け降りた山田は、冷たい水をガブ〳〵とヒシヤクから呑んだ。
『今日は俺の番だな。飯炊きもアキ〳〵したよ。誰か親切な女でも來てくれないかなあ』
篠が、梯子段から降りる拍子に障子に突き當つて、壁際に積んであつた彼等の發行してる古いパンフレットが、バラ〳〵と崩れた。
英子は何時の間にか顔を上げられない程頰をほてらしてゐた。
その後、彼女は色々な口實を以て『K——社』を、否、原田を訪ねずには居られない或種の衝動を抑へる事が出來なかつた。
其の夜は十一月の空つ風が、大地をむしり取る樣な勢で吹きまくつてゐた。二人は煤けた暖簾を分けてコーヒーを注文した。知り合つてから始めて唯二人向き合つてかけた爲め相手の顔が、お互ひにまぶしい氣がした。彼等は又、空つ風に吹かれながら歩き出した。夜の喧騷と灯の瞬きを縫ひつゝ。突然、原田が平氣な顔で話し始めた。
『若し、僕等が結婚するにしても、お互ひの生計だけは獨立させたいものだね。』

二人は曾て一度も戀愛に就て語らなかつた、書きもしなかつた。併し今この決定的な言葉を聞いた英子も亦、當然らしく答へた。

『さう。若しどつちかゞ他の腕にすがらなければ生活出來ない樣だつたら、自然、壓迫する者と、される者になつて了ふでせうから。』

二人は聲高く笑つた。氣が附くと江東橋の停車場が其處にあつた。

『何時頃でせう。』

『さあ、もう十時頃ぢやないかな。』

彼等は慌しく手を求め合つて別れた。

四疊半は、ガランとして寒かつた。彼等は兎も角も此處を生活の本據とした。冷い風が立てつけの悪い戸の隙間から入つて來る。けれど彼等には新らしい生活の喜びがあつた。同棲生活が三ケ月目に入つたばかりの或夜、原田は××爭議團の應援演説會があるからと云つて出た儘十二時になつても歸らなかつた翌朝早く今野が來た。

『拘留になつたよ。演説會でね。檢束騷ぎから亂鬪があつて、××署の高等主任が鼻血を出したんだよ。それでもどうやら其場は檢束も出さずに解散も免れた。皆には歸り際が豫想出來た。原田君も其の一人で閉會前から裏口を脱け出したんだ。ドッと出た所を引拔きが始つた事は無論だ。――後で本署に檢束者を聞きに行つたら原田君の名もあるんだ。二十日だ。工場の方が心配だよ！』

さう聞いて英子は、當然の事が起きたのだと思ふより外はなかつた。差し當りの生活の爲め、近くのカバン店から内職を持ち込んで縫ひ始める事にした。けれど一日どんなに一生懸命懸つても二十五錢を超える事は出來なかつた。

彼女は焦立たしい氣持ちで、ポリポリ皮の紐に絲を通した。階下の世帶主が古い軍服を着たまゝ二階に上つて來た。いつもその儘いびきをかいて寢てゐるのだが。

『木村さん。旦那がどうかしたんですか。』

『いゝえ。』

嗅ぎつけたのではないだらうかとも思はれたが、彼女はさう云つて口をつぐんだ。

期明けの朝、原田は、疲れ切つた顔に無精髭を伸して、四疊半に歸つた。英子は飛びつきたい樣な喜びをどうする事も出來なかつた。

『疲れたでせう。』

『うん。全く、バカらしいつたらありやしない。』

長く伸びた髪をうるさ氣にかき上げながら未だ敷いてあつた布團の上に、彼は仰向けに寢た。

『獨立の生計』それは飽迄も確保し合はねばならない彼等の標語であつた。が、今は原田自身も、失業者としての自分を見出さねばならなかつた。

一九二九・一・二〇

M・S

歸路

樺山千代

ミスターフイリプスは、のつしのつしと重くのろい足取りで貞子のわきを行つたり來たりしてゐた。彼は、英國人で五十近い獨身者だつた。西洋人のための日英辭典を編輯してゐたが貞子はその助手であつた。

彼は貞子に熱心に愛をもとめた、それがいれられないと、メチヤメチヤに不合理なことを主張した。たとへば、彼女の仕事では不安だと云つて、ABCもわからない雇女に上調べをさせたり、仕事には何の關係もない彼女のアクセントを一時間も非難したりした。

そのフイリプスの突然の接吻に、貞子が本能的にビシヤリと彼の頰をたゝきつけて外にとび出した昨日の今日だつた。

彼女は頑固にうつむいてペンを動かしてゐた。彼女は自分が視線を上げて、顏の表情筋を笑つた形に動かしさへすれば、凡てが何事もなく好都合に運ぶのを知つてゐた。けれども彼女はそんな事は死んでもいやだと思つた。で、彼女は頑固にうつむいてペンを動かしてゐた。

踏みにじられた自尊心のために、彼がどんなに怒りと憎しみと侮蔑とをもつて、この榮養不良の青ざめた日本娘の頰を睨みつけてゐるか――そして、彼の感情が彼女のさうした態度によつて、どんなに急速度でクライマックスに近づきつゝあるか、彼女ははつきりと感じてゐた。彼女は、相手の爆發への豫感のために、爪先から逆に疼くやうな不安な感覺が全身をかけまはるのを感じた。けれども彼

女はじつと、うつむいてペンを動かしてゐた。
「貞子さん！」突然フイリプスは彼女のそばに立ち止つて底力のある聲でよんだ。
「來たな」と思つた。彼女は、
「はい」と答へて、たちまち武裝した心持でフイリプスの顏を見上げた、カチリと音がするばかりに硬張つた二つの顏が向ひあつた。
「マウンテンの譯！」
彼は叩きつけるやうに云つた。勿論彼が、マウンテンの譯を知らない筈はなかつた。
「山です。山でも高い方の山です。小山だの丘だのはヒル‥‥」と云ひかけたとき、
「默つて！」
ドンと烈しくテーブルがなつた。
「いつ‥‥いつ私がヒルの譯をきゝました。いつ‥‥」
彼は大袈裟に肩をゆすつてピシヤ〳〵とつづけざまに彼女のテーブルの上をなぐりつけた。彼女は額からサッと血の氣の退いて行くのを感じた。
「いつ‥‥」
彼女は云ひかけて呼吸をのんだ。息苦しくつて後がつゞかなかつた。暫くわなゝく下唇をかんで顏を伏せた。と、フイリプスは掩ひかぶせるやうに叫んだ。
「それでどうして私達のデイクショナリがつくれます。マウンテンの譯に、あなたはヒルのことまで書きますか、あなたは‥‥あなたは‥‥ばかッ！」
テーブルと同時に床が振動した。
「なにをおつしやるんです。私は‥‥私は‥‥」彼女は思はず叫んだ。目だけがキラ〳〵と光つてゐた。
「もうもう、いやです、いやです、いやです、あなたは‥‥あなたは‥‥ふん！この間何を云つたんです。私、西洋人だから、きかれたら樣々の例をあげて敎へてくれとおつしやつたくせに‥‥いくら私だつて、もういやです、いやです、いやです。そんな不合理なことはいやです」
彼女は何物かの力におされるやうにヒステリカルに叫びつゞけた。いつの間にか兩頰にはとめどもなく涙が流れてゐた。
「いえいえ」彼は強く頭を左右にふつた。
「決して許しません。主人にあなたは‥‥」
「西洋は、主人ならコントラデイクションがパスするのですか、ネーバーネバーです。I never accept anything irrational」
動悸は手にとるやうに聞えてゐたが、心は次第に落付いて來た。
彼女はそれだけの英語を皮肉にゆつくりと云ふと、パタと參考書をとぢて、机の上の本立にならべはじめた。彼女は幾度同じやうな事で泣いたり喚いたりするのだらうと思つた、が、やつぱりその都度

興奮しないではゐられなかつた。

「どうするのです」彼は驚いて云つた。

「かへります」

"It is not yet fire oclock, don't you know?"

"Yes, I know it very well"

さう云ひながら彼女は、机の上の物を一つ一つ抽出の中におさめた。

フイリプスは急にしほれて、うつむいて部室の中をボトリ〳〵と歩きはじめた。

「この仕事、あなたにやめられたら困ります。途中でほかの人出來ません」彼は悲しさうに首をふつた。白毛交りの長い眉毛の下に猫の目のやうな青い眸が涙にうるんで來た。

「仕方がないでせう。私はあなたの無理もキスもいやです。だからあなたのところで働く事は出來ません」

「ちがひます、私、話すことがあります」

「今日はかへらしていたゞきます」

「では、きつと明日も來て下さい。賴みます。ね？」

彼は歎願するやうに云つて肩を揺りあげた。そして、芋虫のやうな白い皺ばんだ手で彼女の肩をかるく叩きながら玄關に送り出した。彼女はそれをしも拂ひ退ける氣にはなれなかつた。

外に出ると彼女は電車通りを暫く歩いて、彼女の間借りの家への近道の海岸に出た。彼女はショールをもつてゐなかつた。彼女は出來るだけ首をすくめて、しつかりと兩の袖口を合はせて歩いた。けれども、二月の海風は容赦もなく肌にすべり込んで來た。

海邊にはこの間降つた雪がところどころに汚れて殘つてゐた。さびれた貸別莊のサンルームには、根ばかりになつた吊しだがしよんぼりとぶら下つてゐた。海は夕燒の空をうつして黄金色にゆらめいてゐた。

彼女は悲しさが胸許にかたまりになつてつかへてゐるのを感じてゐた。

やつぱりどんな事があつても勤をやめる事は出來ないのだと思つた。やめたら病後を養つてゐる愛人と彼女がどうして生活して行けやう？　彼女はふと、この二ケ月ばかり體の調子の狂つてるのを思ひ出してヒヤリとした。が、それは多分椅子で冷えるせいだらうと打ち消した。

「もしもフイリプスが自分の愛をもとめさへしなかつたなら、彼の不合理な壓迫にはたへて行かう、それよりほかにどうする事が出來るだらう？　傷付いた心は、愛人の胸に泣く涙で癒されやう、さうだ。さうして一日二日三日と、もうあと六七ケ月も辛棒すれば、彼も人並の體になるだらう」

かう考へて來て、彼女はふと、甘い幸福感に襲はれて、せかせかと砂地を急いだ。が、家の近くに來ると彼女の足はしぜんに鈍つて來た。彼女は、どういふ方法で、この苦しみこの悲しみを訴へたら彼女の愛人が素直にうけ入れてくれるだらうと思つた。

ふとかつての二人の會話が思ひ出された。

「どう御氣分は？」

「お氣の毒だが相變らずだよ、早く死んでほしいだらうが‥‥」

「まあ、どうしてそんな事をおつしやるの？　私がかうして苦勞してるのもみんなあなたによくなつていたゞきたいからばかりぢやないの？」

「僕のために苦勞々々つて、僕はもうさうして恩にきせられてる事がとてもたまらない、そんなに苦勞なら僕なんかほつといて、ほかにもつと完全な男のところへ行つたらいゝだらう？」

凡てがかういふ調子だつた。けれども今日のやうに辛いことがあると、やつぱりどうしても愛人の慰めの言葉がほしかつた。

彼女は愛の言葉から訴への言葉を色々と用意して、家の近くで夕食の菜をかつて家にかへつた。けれども、彼女の愛人は家には居なかつた。彼女はがつかりして、漁師家の煮しめたやうな坊主疊の上に、砕けさうに張りつめた心をみつめて、いつまでも〳〵コチンと坐りつゞけてゐた。寥さと心痛にじんじんと全身がしびれるやうであつた。

と、やがて庭の障子があいて彼女の愛人が高い框を息切れがするやうに這ひ上つて來た、痩せた頬はいつになく元氣さうに血の氣がさしてゐた。

「三溪園へ行つて來たよ」

彼は坐らうとしなかつた。

「さう？」

彼女はやさしく笑つた。目頭が熱くなつて來た。この分なら、彼女の苦しみをなだらかに受けいれてもらへさうに思はれた。

「すてきなところだよ」

「さう？」日曜もほとんどやすめない彼女は横濱に來て半年になるけれどもまだ三溪園を知らなかつた。

「いゝものを見せてやらうか‥‥」

さう云つて彼は袂に手を入れると白い小さい紙切れをつまみ出して、「ほら‥‥」ポンと爪先で天井むけてはねた。紙切れはヒラ〳〵とまつて、彼女の膝許に落ちて來た。

「なアに？」

拾つてみるとそれは小型の名刺だつた。「M、S」と女名前が印刷してあつた。彼女はパッと頰の燃え立つて來るのを感じた。

「誰だと思ふ？」

「わからないわ」彼女は物につかへたやうに顔を伏せて、人差指と拇指で名刺の兩端をはさんで、ペコン〳〵とならしはじめた。

「素晴しいローマンスがあるんだよ。きかしてやらうか?」彼は彼女の周圍を、爪先をすつて、泳ぐやうに歩きだした。
「僕が海を眺めてるとね、そつと近付いて來た女性があるのさ、いい景色ですねと云ふと、ほんとにといふわけで、それから話がはづんで、三溪園を歩きまはつたのさ、神學校の生徒だといふが、獨唱がうまくつてね、大分きいたよ」
「さう?」彼女は顏を上げて相手を見た。
「それで名刺交換といふわけ?」
「まあさうだ、だが僕はないから書いてやつた」
彼女はぐつと何かをのみ込むやうな表情をして障子の方に視線を移した。破れたところが風にパタパタとはためいて、黒い戸外が見えたりかくれたりしてゐた。「彼が少女の獨唱をきいてゐる同じ時間に、自分はあの陰氣なスターデイーで何をしてゐたか‥‥」さう思ふと彼女は胸の中が熱く煮え立つて來るのを感じた。
「やーい、やいてる〳〵」彼が云つた。彼がこんな上つ調子なもの云ひをするのははじめてだつた。
「やいてなんかゐないわ」彼女はさう云ふと立つて、新聞紙をまるめて濡縁にある七輪に入れると、炭をのせてマチをすりつけた。そしてパタ〳〵と澁團扇であふぎはじめた。
「だつて赤い顏をしたぢやないか‥‥」
「‥‥‥‥」
「怒つたかい?」
彼は近よつて來て、しやがんで七輪に手をかざした。
「怒らないのかい、ぢやもつと聞かせてやらうか‥‥」彼は默つてられないやうに續けた。
「とつても美人だつたよ」
途端、彼女はパッと團扇を投げ出して立ち上つた。
「それどころぢやないのよッ!」
彼女の聲はふるへてゐた。彼女はそのまゝ便所にとび込んだが、痙攣的に泣けて來た。
「おい〳〵貞ちやん!」
外から彼が呼んだ。しかし彼女はしつかりと引手をつかまへたまゝ泣いてゐるうちに彼女は急に胸のあたりが苦しくなつて來た。と、ガッと胃の中のものが口をついて出て來た。すると、次から次へとせぐりあげるやうに吐けて來た。吐くものがなくなると胸をしばるやうにして苦い胃液が出て來た。涙と脂汗にベットリと後れ毛が頬にはりついた。
「おい　いおいつたら!」彼はしきりに叫んだ。けれども彼女の心には、もうミスターフイリップスも三溪園も愛人の聲も何もなかつた。彼女はたゞ、全身が黄色い油のやうな渦の中にまき込まれて行くやうなくるめきの中にあへぎつゞけてゐた。

黒い靴

松本惠子



その朝京子は、失つた犬の事でSと電話口で爭つた。可愛がつてゐたレナが前日の夕方公園で遊んでゐて、そのまゝ何處かへ行つて了つて、とう〳〵朝になつても姿を見せなかつたので、京子は第一にSにその事を訴へたのであつた――どんな小さな愁しみをも共に分つ唯一の人だと思つて――然し萬事に常識的なSは、

『あんな仔犬一疋の事でそんなに騷ぐ事はないでせう。又いくらだつて貰つて來てあげますよ。僕としては、あてもなく犬を探して歩いて、大切な時間を潰すわけにはゆきませんね、これから又研究室へゆかなければならないんですから……貴女もそんな無駄な努力をしないで、圖書館へ行つて、スキンパアンの評傳でも讀んでいらつしやい。』と云つて、てんで京子の愁しい心など覗かうともしなかつた。

氣まづい思ひをして家を出た京子は、頭を垂れて、不機嫌に足許の敷石を蹴つて歩いてゐた。すると公園の角で同じ宿に暮してゐる老紳士のにこやかな顏にぶつかつた。

『お早う、京子！　御機嫌は如何です？』老紳士は手袋をはづしながら云つた。

『あゝ、バークレイさん、お早う！京子は大變に機嫌が惡いのよ。』彼女は老紳士の大きな手を握つた。バークレイといふのは既う七十を幾つか越した老人であるが、四十度からの發熱の際でも髭を剃る事を怠つた事のない程生帖面な人で、毎朝の散歩と、午後の讀書を日課としてゐる典型的な英國紳士である。

バークレイ老人は京子の浮かない顏を見て、『こんなに空の霽れた朝、何だつて不機嫌になんかなつたんです。御覽なさい、あんないゝ雲が出てゐるではありませんか。』と云つて、並木の上に開いてゐる明るい空を仰いだ。京子は頭上の青空に、金絲のやうな雲が一筋輝いてゐるのを見た。

『御告げの雲ね。』

『さうです、貴女に幸福がくるといふ御告げの雲です。』

『嬉しいわ、では京子は幸福になつて、朝の散歩をしませう。きつとレナに遭ふかも知れませんわ。』

『ぢやア行つていらつしやい。午後のお茶の時に京子がどんな幸福な一日を送つたかきゝませう。』老紳士は手に持つてゐた黒い山高をかぶつて、京子と反對の小徑を歩み去つた。

京子は公園を拔けて、大通りへ出た。水々しい若葉をつけた街路樹が銀色の日光を浴びて輝いてゐた。赤い煉瓦塀の上から紫と白のライラックの花が咲きこぼれてゐた。そこを右手に折れて、坂路をのぼりつめたところに、鼠色の壁に蔦の絡んだ古い教會堂があつた。細長い尖塔が青空に聳えて、朝の祈の鐘が靜寂な街に響いてゐた。京子はSの事も何も忘れて、白く塗つた柵に沿うて教會堂の入口へ廻らうとした時、牧師館の裏庭に遊び轉げてゐる白い犬をちらと見かけた。彼女はレナかも知れないと思つて、遠くから、

『レナ、レナ』と呼んだが、二匹の仔犬は上になり下になりしてぢやれ合つてゐて中々應じなかつた。すると不意に背後から、

『貴女の犬ですか？』と訊ねられて驚いて振り向くと、彼女の目の前に背の高い青年が立つてゐた。

『もしやすると私のレナかも知れませんけれども……』京子は赧くなつて口ごもつた。

『お待ちなさい、僕がつれてきてあげませう。』青年は輕々と柵を飛越えて庭へ入つていつた。そして裏口にゐた老婆と二言三言笑ひながら話をしてゐたが、すぐに白犬を二匹抱いて戻つてきた。京子は二匹とも見覺えがないので、稍失望した。

『あら、靴を穿いてゐませんのね。それでは違ひましたわ。』

『貴女のレナは靴を穿いてゐるのですか？』青年は不思議さうな顏をした。

『えゝ、眞白で足だけ黑うございますの。』

『あゝ、さうですか、これは二匹とも跣足ですね。』青年は微笑した。

『どうも有難うございました。他を探して見ませう。左樣なら。』

『レナがぢきに見つかるやうに祈つてゐます。左樣なら。』靑年は二匹の犬を芝生の上へ下した。

街角を曲るとき、京子が振返ると、柵の前に佇つてゐた靑年が帽子を高く振つた。京子は笑ひながら手を振つてそれに應へた。

レナはとうとう見つからなかつた。京子はその晩から毎日靑年の夢を見た。そしてレナの事を忘れて了つた。

或日京子は郊外のE町に住んでゐる從姉の幸子から仔犬が生れたといふ通知を受取つたので、貰ひにいつた。三匹ゐるテリヤ種の中から、全身白くて背中に丸い黑斑のあるのを選んでパンドラと名づけた。京子は小さなパンドラをビスケットと共に籠の中に入れて、乘合自動車の二階に乘つた。

彼女を乘せた自動車は倫敦市の中心を橫斷して西區のH町に向ふのである。靑空を頭上にいたゞいて夕燒の空に向つて疾走してゆくうちに、折々條枝を伸ばした街路樹の靑葉が冷りと京子のほてつた頰を撫でゝゆく。京子は幾度も籠の中を覗いて、ビスケットの上に顋を乘せて睡つてゐるパンドラに微笑を注いだ。

軈て自動車がピカデレーの十字路に差しかゝつた時、京子は何といふことなしに目の下の雜閙を見下した。その刹那、彼女は思はず『おや！』と叫んだ。幾萬となく往き交ふ群衆の中にあの靑年を見出したのである。すると殆んど同時に靑年も顏をあげて京子を見た。そして帽子をとつて高く振つた。京子はいきなり、パンドラを引ずり出して靑年に見せたが、それは實に咄嗟の出來事で次の瞬間には靑年の姿は人波の中に消えて了ひ、京子を乘せた自動車は、次の町を疾走つてゐた。京子はくんくん鼻を鳴らしてゐるパンドラの柔かい顏に頰ずりをしながら、

『ほんとうに不思議ね、パンドラや、お前あの方を見て？　これで二度目なのよ。あの方にお目にかゝるのは。』と話しかけた。

眞紅に染つた西の空に、影繪のやうに黑く浮んでゐる鐘樓の上で、丸い鐘が靜に搖れてゐる。もう夕べの禱の時刻である。京子はパンドラを抱きしめて聖母マリアの御名を繰返してゐた。彼女は自分の身邊に幸福が歩みよつてくるのを感じてゐた。

薔薇の咲く頃となつた。Sは硏究の爲にスコットランド地方へ旅行して了つた。京子はSが旅行先から送つて寄越す名所繪ハガキを最初のうちは珍らしがつてゐたが、しまひに御年始狀か何かのやうに碌に目も通さないで、飾棚の上に積重ねておくやうになつた。

京子の胸には漠然とした不滿が頭を擡げてゐた。これといつて何一つ取立てゝいふ程の理由はなかつたが、京子はSの存在によつて空虛な心を滿す事は出來なくなつた。京子がぼんやりと紅い薔薇の花を眺めてゐるところへ、從姉の幸子が訪ねてきた。

『京子さん、さア大急ぎで仕度をして…イサベルのお誕生日で、今晩舞踏會があるのよ。貴女はブライトンへ海水浴にいつてゐると

思つてゐたら、今朝Sから手紙がきて、貴女は倫敦で勉強してゐるといふから、急にお迎ひにきてあげたのよ。』

京子は不意の招待によつて退屈な一日から救はれることを喜んだ。間もなく二人は家の前に待たせてあつた自動車に乗つた。

テームズ河畔にある別莊には、若い男女が多勢集つて賑かな音樂が玄關の外まで溢れてゐた。京子は客間の中を引廻はされた後で、イサベルと腕を組んでお喋りをしてゐると、下男のパーカーがきて、

『お孃樣、淳一樣がどうしても犬を連れてサロンへ入ると仰有るのでございます。奥樣が犬をサロンへ入れるのを絶對に禁じてゐられるのですからと申上げても、笑つていらしつて、一向おきゝにならないのです。』

『ぢやア私からよく申上げるわ。ほんとうに困つたお坊ちやんね。』

イサベルは京子を引つぱつて庭に面した暗いベランダへ出た。イサベルは京子を殘して芝生へ下りていつた。そこには犬を抱いた青年がゐた。

『淳一、駄目よ、貴郎はほんとうに我儘のわからずやさんだわ、うちのお母さまは犬がお嫌ひなのを知つてゐて、そんなものをつれてきたりして、おまけに玄關からこないで、庭から入つてくるなんてほんとうに失禮だわ。』

『だつて玄關から入らうとしたら、パーカーが入れてくれないから…人を招待しておいて玄關拂ひする方が餘程失禮でせう。これはほんとうに溫順しい可愛いゝやつなんですよ。僕は決していつ迄もこの犬を自分で飼つておくつもりぢやアないんですから、そんなに、むきになつて排斥しないで下さい。』青年はイサベルにネクタイの歪んだのをなほして貰ひながら、そんなことをいつてゐた。京子は青年の聲をきいて、眼を瞠つた。それは間違ひもなく二度までも偶然に顏を合せたあの青年である。

イサベルと青年とは冗談交りに何も云ひ爭つてゐたが、青年はとう〳〵負けて、犬を自分の家へ返してくる事になつた。

『あの日本の紳士は私の親友なのよ。ほんとうに良い方よ。後で紹介してあげるわね。』といふイサベルの言葉に京子は急に暗い氣持になつて了つた。音樂も、舞踏も、最早魅力を喪つて了つた。彼女は其場から家へ歸つて了ひたいやうに思つた。何も知らないイサベルは、はしやいだ調子で、頻りに青年の事を語つた。

京子はイサベルが母親に請ばれて奥へいつたのを機會に、華かな客間を抜けて、庭の芝生へ出た。

窓々には赤い覆蓋をかけた電燈がとぼされて、人々がおもひ〳〵に動いてゐるさまが見えた。植込を境にして月光が一面に芝生を照らしてゐた。突然、

『止せ、止せ、あんまり燥ぐと川へ墜ちるよ。』といふ聲がした。黒く繁つた橡の木の下で青年が白犬とふざけてゐた。青年は京子の姿を見つけて傍へきた。

『今晩は、ミス・バイオレット、僕は貴女が夜會に來てゐらつしやるのを見たから、直ぐに家へいつてこの犬を連れてきたのですよ。そしたら皆に反對されて了つて……これでせう？　貴女の紛失した犬は？　ほら、この通り黑い靴を穿いてゐます。』
『似てゐますこと、でも私のレナはもう少し尾が短かつたわ。』
『違ひましたか、でもいゝでせう、貴女のレナでなければ僕のレナにしておきませう。ミス・バイオレットは隨分犬がお好きなのですね。僕の亡くなつた母も犬が大好きでした。』
『何故私をバイオレットとお呼びになるの？　私、京子つていふんですの。バイオレットといふのは私の妹の名ですわ。』
『貴女のお妹さん？　こちらにいらつしやるのですか。』
『いゝえ、日本に、青山のお墓に眠つてゐます。幼少い時に亡くなつた妹です。』
『不思議ですね、僕知つてゐますよ。菫さんていふのでせう。あの隣りの墓地に僕の母が眠つてゐるのです。僕は母のお墓詣りをする度に、菫さんのお墓に花をあげてゐました。だから貴女に初めてお目にかゝつた時に勝手に菫さんといふ名をつけてゐたのです。貴女は菫色がお好きだと見えて、この前にお見掛けした時にも、菫色のスカーフをしていらつしやいましたね。今晩も貴女のドレスに菫の花を飾つていらつしやる。僕の名は松井淳一つていふのです。僕達は屹度仲善しのお友達になりますよ。』淳一は無雜作に手を差のべて京子と握手した。

　其晩、京子は淳一に送られて倫敦の家へ歸つた。玄關の戸を開けてくれたバークレイ老人は、歸つてゆく淳一の後姿を見送りながら、
『あゝ、知つてゐますよ！』と意味あり氣に微笑して、京子の顏を覗込んだ。

　夏も終りに近づいてゐた。高い木の上で丸いポプラの葉がからからと鳴つてゐた。突然京子を訪ねてきた淳一は、庭の靑草の上に立つて、小さい京子を見下しながら、
『貴女には許婚があるといふことは知つてゐます。然しそんな人は今日斷つてお了ひなさい。そして貴女は僕と結婚するのです。』靑年の言葉は命令的であつた。京子は呆氣にとられて靑年の顏を見上げてゐたが、斯うした不意の申込みに對して、格別不思議も感じなかつた。恰も當然の出來事のやうに何の躊躇するところなく、卽座に大きく頷首いて靑年の言葉に應へた。

　聖ジョン敎會から歸つてきた二人を迎へたバークレイ老人は、
『どうです、一年前に、私が「知つてゐますよ」と豫言した通りぢやアありませんか。』と微笑した。

　間もなく松井夫妻は黑い靴を穿いた犬を連れて日本へ歸つた。



雪の夜

——ある小説の一節——

堀江かど江

もう交渉を斷つてあらうと思へてゐた彼から、私が手紙を貰つてから三日目の夕方でした。星が疎らにかがやいてゐました。

雪は降りやんではゐませんでした。

私は宿直の時間を早目に切り上げて××女學校の門を出ました。六時までにT驛で彼と待ち合はす約束になつてゐたので、あはてて省線のK驛から電車にのりました。

夕方の混雜が、一電車前に過ぎたあとでしたが、それでもいい加減混雜してゐました。

私はよろこびを包んだ胸を抱いて、出入口の硝子窓に體をもたせかけてゐました。街の屋並にも、電信柱の上にも雪は降り積んでゐました。まだやまないらしい。雪は、ちらりちらり、ところ〴〵の電燈に照らされて舞ひ下りてゐました。

私は、ロマンテックな氣持にかられていきました。戀をしてゐることはすでにロマンテックであるのに、しかも、こんなに雪の降つてゐる夜に男に逢ひに行くことは、何と

いふロマンテックな光景だらう。——私は、寒いことなどは打忘れたもの丶やうに幸福な氣持に醉つてゐるのでした。でも、その底には不安な氣持がただよつてもゐるのでした。ひよつとしたら彼が來ないかもわからない？‥‥

いくつかの停車場は過ぎて行きました。

T驛近くなつて、線路に沿つてゐる戸山ケ原は、雪が、處女の肉體のやうにまるく積もつてゐました。時々、ぼそりと木の枝から雪が落ちてゐました。原の路に立つてゐる高い柱の電燈の灯が目標のやうに雪の原にかがやいてゐます。私はこの原で、今夜、彼と二人で語らうとするのです。どこの戀人同志も人を避けて二人の天地を探し歩いてゐるやうに、私達も、自分の周圍から脱けて彼と二人だけで語る場所を探し歩いてゐるのでした。私たちはこれまで場末の森の路を歩いたり、夜になど誰一人くるもの丶ないI公園の物凄い沼のほとりを彷徨つたり、まるで、前科者が隱れ家を探し歩いてゐるのと同じでした。

私はT驛の待合室の隅に腰をかけて彼を待つことにしました。冷たい風が破れ箱のやうな待合室の中に絶えず吹いてゐます。雪は降り止んだらしい。木の枝や屋根の上の雪がさらさらとホームに吹き込んでゐました。

電車の着くたびに、私は待合室の片隅から、降りてくる乘客の重なり合つた顔を一々すばやく見分けなければなりませんでした。ことに、考へぶかさうに俯向きかげんに歩く丈の高い男を探しあてなければなりませんでした。私は又誰にも氣づかれないやうに注意しなければなりませんでした。私を知つた人に、ことに私の敎へてゐる生徒に見つからないやうに氣を配らなければなりませんでした。私の周圍の人間達は、戀愛に對する批判といふものがまるで間違つてゐたからでした。かうした中にゐる私は、極度に反逆心をもつてゐましたが、やはり或程度の臆病心がないでもありませんでした。

一つ、二つ、三つ、電車は通過しました。

私はいくたびか同じ動作を繰り返してゐましたが、彼の姿は見當りませんでした。時計はもう七時を過ぎようとしてゐました。私は待合室からホームに出ました。事務室の硝子戸にもたれて電車のくるのを待つてゐました。あかあかとストーヴの火が燃えてゐました。ショールにくるまつた私の顔が、そこの硝子窓にはつきりと映りました。私はうしろめたい氣持になりました。袴の裾をそつとコートの下に端折り込んで、誰かを迎へに來たやうに裝つてホームを往つたり來たりしてゐました。丈の高い洋服の男がちよつとでもホームを見廻してゐるのを見ると、ハッとしたり、改札口を拔けて行くそれらしい男の後姿に注意ぶかい眼を注いでゐる中に、ドカドカと大勢の人を見失つてしまつたり、瞬間、私の眼はあわただしい活動をくりかへしました。

彼の姿はどうしたのか見當りませんでした。

私は焦燥と寒さのために全く辛くなりました。しかし私は歸る氣持にもなれないのでした。彼が來さうにも思へるので、今少し待つてみようといふ氣持になつて、また、肩掛に顏を埋めて、ベンチの隅の方に腰を掛けてゐました。

私は自分のこの姿を嘲笑ひたくなりました。この機會をのがせば私から戀をする時間がなくなつてしまひでもするかのやうに、こんな雪降りの夜にわざ〳〵ここまで出かけてくるといふことは、たしかに考へ深いことではありませんでした。しかし、私は寒さに凍えながら、かうして男を待つてゐる自分がいぢらしくなりました。

「高木さん！」

私ははつとしました。危く自分を失つてしまふほどでした。私はひよいと顏を上げました。それは彼ではなくて、私の友人の畫家でありました。彼女は畫布や三脚を手に一ぱい持つてゐました。

『どちらへ！』

彼女は寒さにまつ赤になつてゐる顏をほがらかにして訪ねました。私は、彼女の、長いまつげに圍まれた眼をみつめながら突嗟にこの場をつくろひました。

『お友だちがこの向ふの方へ用達しに行きましたので、一寸待つてますの。……』

『……お寒いでせうに　……家へいらつしやればよござんしたわ。……』

彼女の家は、すぐ、このT驛の下の方にあるのでした。こんなところに、物思ひにふけつてゐる私の心を彼女は見つめてしまつてゐるやうに思へました。

『ごめんあそばせ。』

電車が、勢よく走つてきたので、彼女は電車に乘りました。

私はなんと愚かものだらう。……活々とした努力的の彼女に逢ふたびに、今の私は敗殘者のやうな淋しさがするのでした。莫迦な私。

彼が來ないので、彼に逢ふことをすつかり斷念してしまつた私は、靜かな氣持に立かへつてきました。でもそれは焦燥のあとの靜けさでありました。やがて、この戀愛の破滅の豫感が私に思はれてきました。私はこれまでのことを振り返つてみるのでした。

彼はどちらかといふと日蔭のやうな男でした。例へば、どこで待ち合す時でも、日の暮れ方を選んだり、街を歩く時でも一緒に並んで話しながら歩くことを避けるやうにしたり、私の下宿に訪ねてくる時でも戸外で、私に訪問客のゐないのをたしかめてから私を呼んだりするのでした。それは彼が家庭を持つてゐることゝ、教師をしてゐるためでありました。

私はかうした彼の態度のどこかに不滿を抱いてゐました。が、彼は決して私との戀愛を遊戯化してゐるやうではありませんでした。それは次のことでもわかります。

或夜。

私の下宿のある高臺は人の足音もまばらになつたころでした。彼は私を訪ねてきました。彼の顔はひどく惱ましさうでした。私はふと、この前、彼と逢つた時の彼のいつた言葉を思ひ浮べました。

『……僕は、あなたとの戀愛がいつまでも續くやうには思はれない？……』

さういつて、彼は又、こごみがちの肩を俯向けて何かを考へてゐるらしいのでした。彼の表情はなやみの表情でした。しかし、私はそれを問ひ返す勇氣がありませんでした。彼の消極的の性格が私にはよくわかつてゐたからでした。

卓を中にして私と向ひ合ひに坐つた彼は、こごみがちの肩を俯向けて、始終、何かを考へてゐましたが、やがて、まともに私の顔を瞶めていひました。彼の眼にはある力と強さが耀やいてゐました。

『東京にゐるのが僕は苦しいから、僕と一緒に北海道へ行つてください。――向ふに行けば僕の力になつてくれる友人がゐるから――』

消極的であつた彼のこれまでの態度から考へると、この決心はむしろ奇蹟のやうに考へられました。

『でも、家庭をどうなさるおつもりなの？』

『僕は妻にすまないと思ふが、仕方がない、……僕は實際、家にゐるのが辛いから、――僕が姿をかくしてしまへば妻もやがては諦らめもつくだらうから……』

彼はとう〳〵行くところまで行かうといふ決心をしたのでした。だが、私はなぜか彼のこの決心の前に、不思議に躊躇してしまふのでした。私は臆病ではない筈であつたのに。私は彼をほんとうに愛してゐなかつたのであらうか？　私は戀愛の遊戯をしてゐたのであらうか？

私は彼の決心に對してすまないやうな氣持になつてきました。彼が妻に對して苦しんでゐるといふことは、彼の妻がどんなに可憐な女であるかが想像されるので、私は彼の妻がよけいに氣の毒になつてきました。私は彼に對する嫉妬の感情を働らかせないではゐられませんでしたが、なぜか一面にはほつとした氣持にさへなるのでした。

でも、私は彼の言葉に返事をしなければならない。私はいちばん自分の氣持に近い返事をしなければなりませんでした。

『……でも奥さまがお氣の毒ですわ……』

彼は澁みのある眼の寂しさの中に、微かな安心の氣持を閃めかせたのでした。私の眼も同じ表情を語り合つてゐました。

待合室の片隅にたつた一人取のこされるまで、私は、ぢつとこの追憶にふけつてゐました。

だが、彼はとう〳〵來ませんでした。

若い驛夫が私を不思議さうに見やりながら、ホームの掃除をはじめました。私は靜かな落ついた氣持にかへつて、乘客の少くなつた電車に乘つてかへつてきました。



春三巡

川島つゆ

われ罪を知らず。まこと、われあるところ世人われをうとめりしことを知らず。われ疑ひを知らず。

打向へる人の胸に、わが心、わが言葉、小鳥の如く天翔ける。

花八つ手によき〳〵空の高さ哉

われをめぐりて、小春日の日ざしあまねし。

落葉ばさ〳〵と夜は淋しきこの宿か

ふと我れ落葉の音に聞き入りぬ。

人の心の底深く藥喰へる淋しき座頭の姿を見出でたる。これやまがつみの初めならん。

地獄の夢を吹きはらへ。

地獄の夢を吹きはらへ。

何すれば我れ斯くは日記せしぞ。

透し仰ぐ曼陀羅寒き疊かな



行手には執念の陰火燃えたり。かなしき愛着に縛されて、われ叫べども聲なし。

　　人の思ひにこの冬雲の重さ哉

人の思は斯くやらんと。

　　凩に應へなき名を呼び狂ふ

憂きは我が身一つと思ひ知りぬ。水底に吾を呼ぶは吾が聲なり。

　　冬日さすこの岩ケ根の魚になりたし

魚になりたし。魚になりたし。言葉なき世に我れ棲まばや。

　　殘雪につれなきうしろ姿かな

逃れ逃れて來しものを、さりとも、去りゆくは去なしともなき、悲しき輪廻の早や我が身をめぐれる。

思ひあまりて我れ多摩の河原をゆく。

　　春淺き雲のかげりや山葵畑

　　籠らばやこの岩床の陽炎に

武藏の百穴にして我れ斯く吟ず。太古の墓穴に死屍を置くべくしつらはれたる岩床の、何ぞ安樂椅子を置くによろしき。墓穴の入口に大き鐵格子せば、浮世は全く彼方に隔つべう思ひたればなりけり。

　　春の落葉のさや／＼と鳴る

我が友柳々は斯く和しぬ。



風色傳フ二花信ヲ。

悲しめるに似てさならず。悔ゆるに似てさならず。責むるに似てさならず。悟めるに似てさならず。
歎けるや。歎べるや。冥々朦々として日月を知らず。
薺(なづな)いつかぺン〳〵草の夏となりぬ

君と相見ざる日
われ知らざりき
ひとりさ湯くむことの　淋しさを

君と茶をくみし湯呑
大きなると小さなると
その小さきに　ひとりさ湯つぎてのむ　淋しさよ

日は夏なれど

憎まれて我れ憎しみを知り、そしられて無殘や我が身泥土に委されぬ。
われと脱れたる水晶の宮は永久(とは)に閉ざされて、又歸るべきよしなくなりぬ。
茶の花に夜明のちぢろ黄泉(よみ)の如し

獨りにあらぬ寂しさよ冬の蠅の飛ぶ



世の中よ獨りになれぬゆゑさびし、獨りとなればさびしくもなし

この年になりて、舊友素枝の歌を偲ぶ。

似ㇾ解二我意一而不ㇾ解

淡雪の握りても消ゆる掌

われ亦、幾億年くり返し打てる波の歎きに和したる。

扨も、我が靈を七重の箱に秘めて、齋き捧げてける黑衣の尼なりし日の、心寒かりし哉愛でられて我れ玉の如し。

白魚の透きとほる二月かな

寂　光

春曉の組む手佛に似たるかな

君を知りて、獨りを感ずること深し。

涙ながるる儘の獨りよ春灯

又、斯くも

獨り居に馴れて明るし春灯

我が魂に冷光あり。その何處より來れるかを知らず。



春寒や女人形の光澤くすり

君病むと聞くばかりなる苦しさよ。これや煉獄の枷ならん。

　　蟋音消えてかげろふを追ふ閨の闇

忍べる思ひに、嗚呼とならざる女人ありや。われ君がために願あり。

　　御手洗の濡れ錢凉し朝詣で

　　夏足袋の埃かなしや百度石

山居日久しうして君を見ず。颱輪空しく過ぎて雨蕭々。

　　夏山の蝶とぶ雨のわだち跡

　　待てど待てど蚊屋つり草も引き倦みぬ

かくて又、秋闌けてゆく。

　　すく〳〵と花もたけけりかなむぐら

人言風聲何ならん。われひとり靜かなり。

　　落葉踏むや背中のぬくみいとほしみ

信は動ぜず。

　　頭にがきごまめ噛み居る獨り哉

全女性進出の歌を募る

覺醒せる女人の高唱するに足る歌を求む
賞金、選者、作曲者、其他の委しき事は四月號にて發表。

與謝野晶子女史のための會

詳細は四月號にて發表

珍劇 忠臣藏見立



高師直
- 政治家　田中義一
- 文人　正宗白鳥
- 思想家　堺利彦
- 新潮社　佐藤義亮
- 改造社　山本實彦
- 講談社　野間清治
- 博文館　大橋新太郎
- 主婦之友　石川武美
- 婦女界　都河龍

猪
- 文人　藤澤清造

鹽谷判官
- 文人　池谷信三郎
- 文人　佐々木茂索

顔世御前
- 女優劇　柳原白蓮
- 同　三宅やす子
- 畫家　岡田三郎助

議會寸評

永島暢子

本會議雜觀、その一、

無産黨代議士淺原健三氏が、質問演說をするといふので、その日は新聞面も代議士も、傍聽席も多少の緊張味を見せてゐました。質問の大要は、言論出版集會結社の自由に對して內閣は極度の暴壓を加へる事や、勞農黨新黨準備會解散の理由は、多數人員が共產黨に加入した事があげられてゐたが、共產黨が檢擧された今日、それに消滅しないかといふ事や、緊急勅令は非合法主義を誘發するものではないか、日本の受けてゐる支那利權を全部的に還附する意志はないか等と肉薄し、殊に拷問事件の非人間的行爲を平氣でする政府の態度を一々例證を示して質問しても、階級的立場が異り、徹底的に民衆運動を暴壓しやうとする政府並にブルヂョア代議士にとつては蚊に刺された程にも感ぜず、「淺原君の演說は、その態度その言葉が激越なるにも拘らず問題は至極簡單」と揶喩され、その生々しい例證に對しても、「そんな事を警察や裁判所でする筈がない、いづれ調査の上」と至極あつさりと片付けられ、謹んで質問を打ち切る有樣、つまり無產黨代議士が、多少議會に席を占めたとて、現制度下にありては、攻擊も暴露も海に向つて唱歌を歌ふ樣なもの、議會內の言論の自由もブルヂョア謳歌以外に役立たない事が無產黨代議士の發現に於て判明した事が、今議會の何よりの收穫?

その二、

さうした立場の異る代議士の怒號よりも、田中內閣のこはいのは、同じ穴の民政黨の攻擊らしい、所謂滿洲某重大事件は、民政黨の田中內閣の屠殺藥らし

天川屋義兵衛	文人	菊池寛
検視役 石堂右馬之丞	思想家	吉野作造
	批評家	生田長江
	政治家	鶴見祐輔
	農民運動馬之丞	加藤武雄
一文字屋お才	女優劇一日代り	宇野千代
		新妻いと子
早野勘平	文人	直木三十五
	「道行の勘平」踊おさらひ	城しづか
	本役	大佛次郎
検視役 薬師寺次郎左衛門	評論家	伊福部隆輝
	ジャアナリスト	千葉龜雄
	政治家	濱口雄幸
鷺坂伴内	文人	長田幹彦
	ふくれた伴内	鈴木氏亨
	批評家	新居格
寺岡平右衛門	文人	宮嶋資夫
	文人	久保田萬太郎
	のん平右衛門	吉井勇
	女優劇一日代り	高群逸枝
		岡本かの子
與一兵衛	文人	木蘇穀
加古川本蔵	文人	島崎藤村
	思想家	石川三四郎
	黨主	安部磯雄
堀部彌兵衛金丸	女優劇自選	生田花世
大高源吾	かどえ夫人推薦	内藤辰雄
	女學生劇	小池みどり
堀部安兵衛	アメリカ安兵衛	前田河廣一郎
	親女安兵衛推薦	堀江かど江

いのですが、そしてその問題がしば〳〵繰り返され、殊に一日、山道襄一氏が折柄滿鮮旅行の途次で得たといふ材料を以て、鋭く攻め立て、とにかく陸軍省公報の改正を明言させたり、その經緯の辻褄を合はせるに、充分政府を痛めつけた事は、わかりますが、肝腎の問題の中心點は、政府と御同樣日本帝國主義のより強張にあるので、八百長問答以外に感ぜられず、田淵豐吉氏が一體何故田中政府は張作霖の爆破事件を重大事件として取り扱ふか、あの政府のとつた態度では、さも日本が殺したのをかくしてるやうではないか、とちくりと刺して民政黨その他を喜ばせたが、それもそれつきり、泰山鳴動して鼠一匹の感しかなく、

その三、

その他社會民衆黨の龜井氏の質問にしろ、鈴木文治氏の演說も、無産黨代議士も演說はうまいもんだ、と感心させるがおち。婦人公民權問題だ、黨略以外にはなく、賛成するも、反對するも、大衆のためより、自分のためといふ樣な熱のなさ。

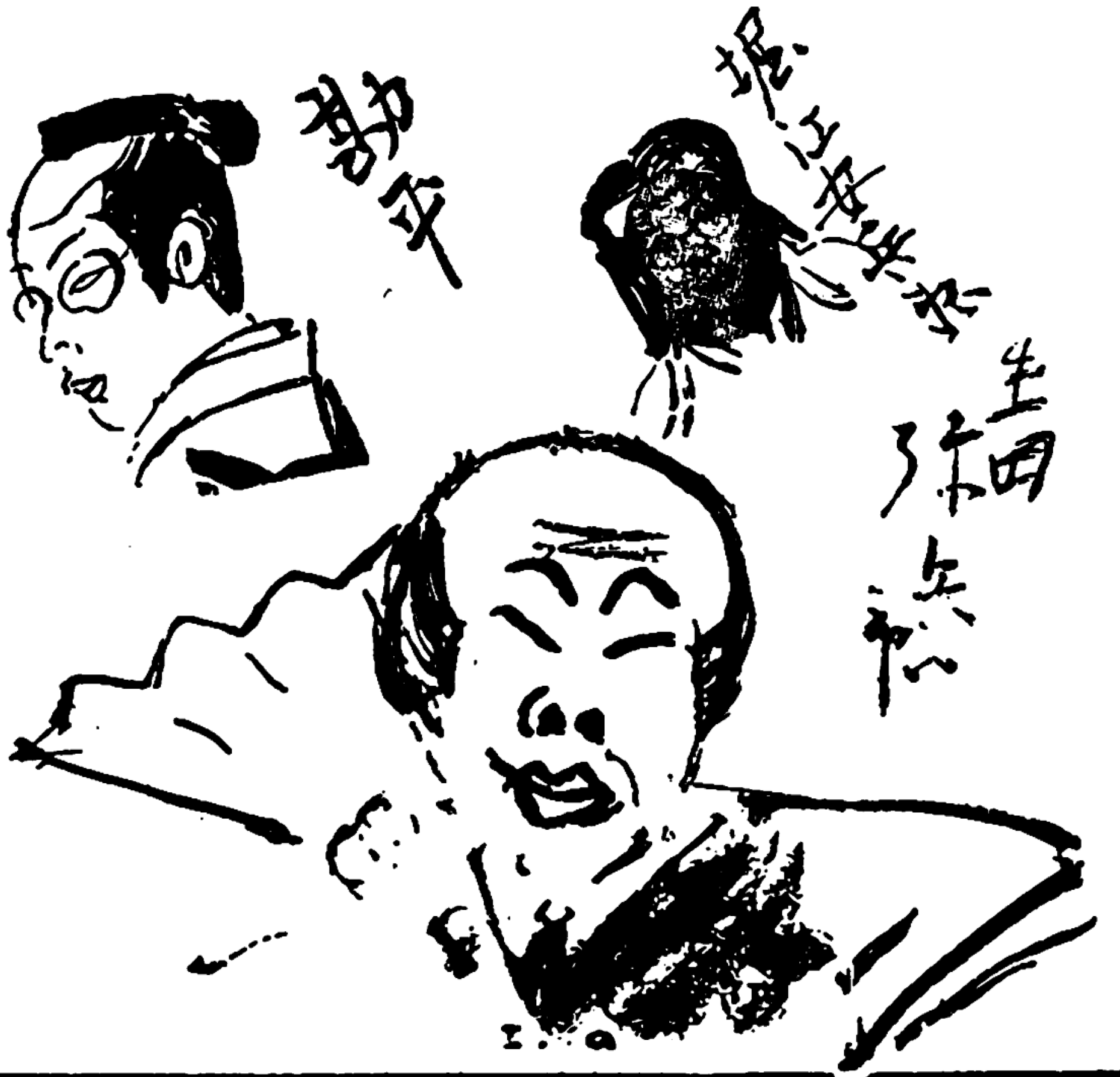
といふ樣で、第五十六議會は、何かしら新味を味はふ事が出來るかしら、とやつとの思ひで入場しても、兄弟共がなんとかして親の財産を得やうと策動し喧嘩をしてゐるのを見てゐる樣で一向面白くなく、しかも芝居氣たつぷりなので、お金のない私達には、只より廉いものない底の程度で興味もある筈ですが今ではそれすらの刺戟もありません。

それにしても、早く私達の政治を私達の中で行ふ時節が待ち遠しい。

寒さうな肖像

八木林子

傍聽席からひとわたり見下すと、天井のすり硝子をとほしてくる早春の光り



戸無瀬　女優劇一日代り　今井邦子
　　　　同　平塚らいてう
　　　　同　太田菊子
　　　　同　金子しげり

清水一角　一女優劇日代り　長谷川春子
　　　　　　　　　　　　　吉屋信子
　　　　　プロレ劍客　葉山嘉樹

桃井若狭之介　女優劇怒りんぼ　時雨
　　　　　　　文人　尾崎士郎
　　　　　　　文人　岡田三郎

のしたに、議會は一つのナンセンスコメデーの感じで私の眼に映る。

拍手と彌次との喧騒の中で手を振りうごかし演壇から叫びかけてゐるひと、その頭の上では元田議長が首を伸したりちゞこめたり、しきりに氣を揉んでゐる。兩側の大臣達は寛量を示すかのやうに腕をくみ、頬杖をついて頭の光線をほしいまゝに反射させてゐるのである。

壇上に立つ人はきまつて開口一番にいふ。

「私は忠良なる國民のひとりといたしまして、國家の前途に深憂を抱きまするところから‥‥」

大臣の答辯には左の言葉が必ず含まれる

「國民の思想善導のために‥‥」

「左樣なる御質問に對しましては答辯の必要を認めざるものでありまするが、一應‥‥」

ともに二十年前の表現をそのまゝである。

議員の彌次一束――

「靜かにおつしやい」

「醉つぱらい、默つてしまへ」

「當然の理由があるんだ、莫迦野郎」

「說敎强盜！　說敎强盜をひきずり下せ――え」

「民政黨の最高政策、カンヅメに人身こうげき――い」

そして彼等はバネ仕掛のやうに座席の上へぴよん〳〵と飛び上り、ゴム毬のやうに彈む、多くは名札をとつて卓を亂打する。

議會開闢以來でわき起つた笑聲のあとに民政黨の原夫次郎氏が立つて、佐藤政友子の選擧買收の事實を摘發しねち〳〵と大臣達に質問を發する。福井銀行へ四十萬圓の特別融資といふ言葉がちよつと場内の空氣を緊張させた。

「さやうなことが大藏大臣としてでけるものか、でけんもんか」‥‥と四國訛





役	組	配役
不破數右衞門	文人	谷崎潤一郎
	女優劇	平林たい子
大星力彌	白髪の力彌	秋田雨雀
	断髪力彌	望月百合子
小浪	不良小浪	大井さち子
	美人畫家	鏑木清方
	本役	戸田豐子
神崎與五郎	文人	三上於菟吉
間重次郎	花世夫人推薦	生田春月
	文人	片岡鐵兵
	ソヴイエット次郎	藏原惟人
	女優劇	窪川いね子
矢頭右門七	女優劇 色氣のある右門七	素川絹子
原惣右衞門	文人	近松秋江
	文人	田山花袋
武林唯七	文人	武者小路實篤
	女優劇一日代り	八木秋子
	同	松井締子
赤垣源藏	文人	中村武羅夫
	女優劇一日代り	林芙美子
	日本酒ウヰスキー	中本たか子

りの三士さん

「かゝる事を議場で摘發暴露して恥ぢない議員の言動こそ、國民思想に惡影響を及ぼす‥‥」

と婦人公民權尙早論者の望月さん、あはれにも「摘發暴露」といふ不用意な言葉は、この人情大臣が暗に事件の眞相を裏書してゐるものではないのか。

民政黨の山道襄一氏が立つて「滿洲の某重大事件」で痛烈に首相と陸相に質問の言葉を浴せる。田中さんは老人らしくもないへんにつやのあるこゑで、白川さんは女のやうな嫋々とした薄氣味わるい聲で、ともに不得要領な狸の答辯をする。結局民政黨からの動議で重大事件の眞相發表の決をとることになり、發表に賛成側は白票。反對側は靑票。壇上へどう〳〵めぐりがはじまつた。無所屬から始まつて無產黨の安部さん達が登りかけると民政黨から拍手がおこる床次さんが一度あと戻りして白票にかへ、壇の上り口でちよつと白票もつ手を思ひいれよろしく橫へ曲げると、またしても民政黨からパチ〳〵‥‥甘いこと。

結果は政友派が廿二票の差で勝ちこの某重大事件は永久に眞相は發表されないですむことになる。これほど解りきつた理窟が、多いが勝といふ子供の勝負とひとつに手もなく否決されてしまふ。だが、議員だつて今日ではまさか肚から國家の選良などと自惚れてもゐまいし、正義だなど思つて、こんな劇の役を演じてゐるわけでもあるまい、一番滑稽な悲劇的存在は無產派議員である。

出席のパーセンテージからいへば八人の彼等は正に賞狀を受くべきであらう正義坊のやうな鈴木さん、貴公子然とした龜井さん、分裂しても仲良く喋々としてゐる水谷さんに山本さん！　山本さんのお隣りは資本家の親玉武藤山治氏である。彼等は現在の議會政治を認めた上でこの反動內閣の議會に一つづつ席をかち得た。おそらく將來のマグドナルド內閣を、そしてソヴイエット政府の議會をその胸に描きつゝ壇上に足を運んでゆくのだらう。

思想の惡化を憂ふるもの、無產大衆の政治的發展を叫ぶ人はいちど議會に來

お石　女優劇一日代り　神近市子
同　山川菊榮
同　野上彌生
同　山田わか



斧九太夫
飜譯家　米川正夫
政治家　久原房之助
文戰九太夫　金子洋文
政治家　床次竹二郎
松竹　大谷竹次郎
帝劇　山本久次郎
思想家　藤森成吉
文人　廣津和郎

斧定九郎
ジャズ一座笛吹き定九郎　深尾須磨子

て見るに限る。さうすれば政治といふものがどんなものか、苦もなく胸におちること明かである。露骨な黨派的排擊と、民衆の幸福に對していかに隔絕したはるかな空想であるかといふことと、法律による權力の支配でしかありえないことを‥‥。

頭の上で、歷代議長のクラシカルな肖像が寒さうに顫へてゐる。

議會雜感

平林たい子

議會を二階から見下して、痛切に感じましたことは、無產黨代議士の、あまりな無力さでありました。日本の様な狀勢の國では、最後まで、無產代議士が議會で多數を占める樣なことは恐らくありますまい。とすれば、尙更に無產代議士は、數よりも質でなくつてはなりません。それなのに、二階から見下したところでは、無產代議士の顏は、どの顏も〳〵、議會主義より一步を出てゐない樣に見うけられました。

血と肉の戰ひで、折角選び出した數人の無產代議士が、政友會代議士よりももつと紳士的にきちんと坐つて、おとなしく贊成反對だけの意志表示をやつてゐるのなら、むしろ出さないに如かずです。

こんなところを見たら一部の大衆は、ます〳〵政治否定主義になつてしまひます。

あの壇上で、ブルジョア政治の欺瞞を暴露するのは命がけの仕事なんですから、たゞ、當選だけを目標にした「有名」候補ばかりをたくさん無產黨は出さずに、實質的な鬪士をたつた一人でもいゝから議會に送る樣に心掛くべきだとつく〴〵思ひました。

獵人三人	
文藝春秋	菅忠雄
ナップ	林房雄
左翼	江口渙
お輕	
モダンお輕	佐々木ふさ
マダムお輕	若杉昌子
道行ソプラノお輕	ダン道子
大星由良之助	
文人ちんこ芝居	里見弴
女優劇	與謝野晶子
繪に描いた大星	横山大觀
義士	
里村欣三	岩藤雪夫
黑島傳治	酒井眞人
山田清三郎	稻垣是穗
倉田潮	入交總一郎
井東憲	鶴田知也
今野賢三	森本巖夫
佐々木俊郎	橋爪健
横光利一	細田民樹
安生二郎	近藤經一
南部修太郎	十一谷義三郎
細田源吉	山本勝治
佐々木千之	渡邊均
小林多喜二	諏訪三郎
辻本浩太郎	小島昴
岡下一郎	中河與一
小堀甚二	村山知義
淺原六郎	

幸福てない傍聽氣分

生田花世

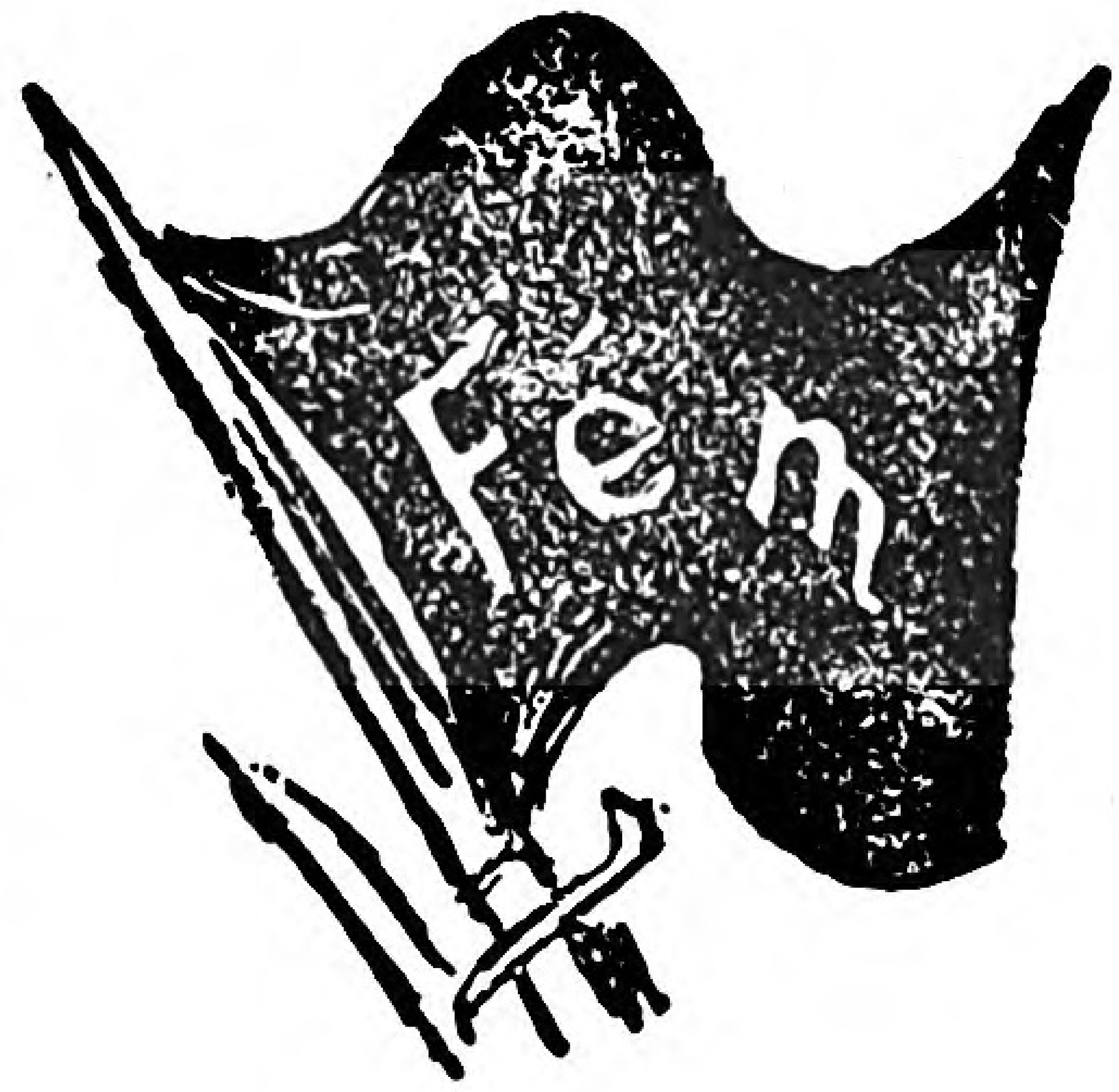
『泥仕合』の議會を傍聽席から見てゐると何となく情なかつた。『バカ』とか『低能』とかならばまだしも『セッキョウゴートー』と赤鉢卷をした猿公のやうに叫ぶ一個の人體を見下してゐて厭世的になつた。十年ほどまへに女の新聞記者として傍聽した時にはまだこんなでもなかつたがと考へたりしてゐると、山道襄一氏が某重大問題を捉へてその圖太い聲をふりしぼつた。はじめて緊張した。暗い險しい緊張だ。國家としても個人としても幸福な氣分では全然ない。

一月三十一日

時雨

議席の上の靑天井が硝子越しに鼠色に暮れそめてゆく。田毎の月のやうに格の角にはめた大きな電燈が議席の禿頭を照らす——議員たちはゾロ〳〵、非常に整然と投票をしに列になつてゆく。白い札をもつた無產黨八人の代議士をさきに、無所屬の中に靑いのを持つた人が目立つ、床次氏も白だ。

これは壹月三十一日對支問題で政府說明の可否を決する最初の日の最後の時間の光景です。私が始めて議會を見て感じた事は熱がないこと、緊張味の稀薄なこと。みんなが分りきつた行動を豫定通り運んでゐるやうにしか見えない事等々。こんな事でこの新興日本の政治が出來るのかといふ不思議さと、恐ろしい事だ、これがともあれ、表面的日本の步みを示すのかと思つた事です。



ろッ子

政治家と政商

――社會時評――

神近市子

一、田中内閣の運命

所謂政治シーズンなるものが始まつて、毎日の新聞は議員の下馬評、議院内の空氣の分析で仲々賑やかである。

今期議會の興味の中心は、田中内閣の運命についての見越しであつた、議會開會前から所謂優詔問題・張作霖の暗殺問題、治安維持法の承認問題と内閣の生死の鍵を貴族院あたりで握つてゐさうな問題がいくつもあつた、貴族院の態度強硬とか新黨の反政府的傾向とかブルジョア新聞は隔日位にそれを一號見だしで報道し、二三日すると又二號か三號の見だしにかへてこれを打消した。しかも民衆はさうしたトリックの落ちを知り乍らも、尙ほ反政府的の記事には心をひかされたものであつた。しかし議院の開會日數も半ばをすぎた今日考へて見ると、凡ては政府が畫いた豫定通りにはこび、新黨を自家の藥籠中に收め、貴族院の禿頭をも懷柔し了つたと見るが正當であらう。

つまり田中内閣が何等かの暗礁にのり上げて倒れさうだといふ宣傳は、民衆の反田中内閣の傾向淺からずと見た支配階級の宣傳で、かうして民衆の反抗の氣勢を弱めんが爲めであつた。そこにブルジョア政黨と新聞とがダアノルな議院の人氣と紙面とを救はんが爲めに無意識的に協力したまでの事で、内閣の更迭など最初から問題ではなかつたのである。

しかし考へて見ると、わたくし共が田中内閣を嫌ふ感情にも、餘りに單純なものがある。無論田中内閣は、治安維持法の改正を行なひ、空前の選擧壓迫をなし、滿洲出兵を敢へてした内閣である。しかし乍ら、田中内閣に民政黨内閣がとつて代つても、それがブルジョア政黨である限り大同小異の政策を行ない、同じ無產階級の彈壓をすることは知れ切つたことである。わたくし共が田中内閣を嫌ふ感情におめでたいものがあるといふのはその點であつて、考へやうによつては田中内閣はわたくし共の政治教育の上に可なり大きな役割をとつてゐるのである。

無論民政黨は保守黨たる政友會より或はその模倣するところに新しい自由なものがあるかも知れない。しかしそれは依然として舊政治家の新しい保護色にすぎなくて、それがあるばかりにわたくし共はその素情を見あやまることもあるのである。(そしてそれが彼等の保護色の目的なのである。)

そこに行くと、田中内閣は素直でむき出しなだけにお愛嬌にとんでゐる。國家に多額の負債ある久原を大臣の仲間に加へたり、優詔問題といふ一喜劇では責任者たる田中首相が知らぬ顔をきめ込んだり、政治季節になるとブルジョア新聞の廣告欄に素性の知れない色んな人間を使つて、麗々しく反民政のデマゴーグをとばしたり、ともかくその低劣無比の頭に考へ得られるだけの策動を億面もなくやつてゐる。

その點である。わたくし共がブルジョア政治の實物見本として恰悧な民政黨内閣よりも田中内閣の存續を希望するのは。實際に歴代の首相中田中首相ほど政治的に無能な人はないのである。それでも金權に縁さへあれば勤まるのである。責任ある答辯をせまられても『調査中』で押しきるといふ厚顔無耻であることさへ出來れば、立派に一國の首相たりうるのである。

金權は田中内閣を支持することによつて、自己の墓を掘りつゝあるのである。

二、奸商の跳梁

米穀法による米價調節のベラ棒さについては、わたくしはこれ迄に何度も一般の注意を促した。

政府はこれによつて米價が下つた時に一定量の米を買上げ、その暴落を防ぎ、米價が上つた時はそれをうり出して國民――特に農民の米價安による苦痛と中産以下の生活者による苦痛とを救濟せんとする意圖の下にこれを制定したのであつた。

しかし今日の政治組織の中には老犬にたかるダニのやうに深く喰ひ入つてはなれない多數の寄生蟲がある。そしてそれらの寄生蟲は一つの法律、一つの新らしい規約が設けられゝば、それを利用していかに利得せんかと恰かも法理學者の如くに研究してゐるのである。そしてその法律が意圖されたり方面を全然なくしてしまつて、凡ての法規凡ての法律を全然死物にしてゐるのである。

米穀法とてもそれらの奸商乃至ブローカーの注目を免がれることはできなかつた。政府の米の買上げ拂下げには必ず何時も政商達の運動があり、必ず何時も時機を失した時に賣買された。その爲めに農民と消費者とは少しもこの法律の恩惠を蒙らずして、國家としては十年間に七千二百萬圓の損失を蒙つてゐることが今回明らかにされた。

政治的に訓練を有しないわたくし共は、かうして數字によつて示される迄は氣付かないのであるが、全體としてこれら政治家とそれの附隨した政商達の爲めに、どれほどの負擔を強ひられてゐることであらう。

これは株相場に關係ある人に聞いたことであるが、兜町界隈にはその方で生活を立てゝゐる店舗が何十軒とかあるさうである。これらの店舗が要するに費用とその他株式市場關係一切の諸雜費とを計算すると一日五萬圓を要するさうであるが、この五萬圓は全く兜町に出入する客の懷中から支拂ふことになるのださうである。

兜町に一攫千金を夢見て出入する人はその冒險的な嗜好からか金と時間とに餘裕のある人がより多くを求めて集るのであらうから、わたくし共に關係のないことであるが、わたくし共は兜町の一廓に似た無要にして浪費的な存在を到るところに擁してゐることに氣づ

一つの戀

―最初のそして最後の―

竹内てるよ

もしもあなたがあのような性格でなかつ
たなら
あの時の二人はどうなつてゐたか

もしもあなたが
ぐうだらな生に正しい死をかへなかつた
ら
あの時の二人はどうなつてゐるか

流れたゞよふ情熱のあした
白々と靜かなりし切望の夕
私は知つてゐる
たつた一生に一つの愛が
つひに蕾のまゝに開かなかつたことを!

みづからの幸のために人々に反くことが
みづからの希ひのために人を葬ることが
つひに出來なかつた私達二人

とこしへに開くことのない一つの蕾は
つぼみのまゝで二人の
地下まで持つてゆくものであつた。

あなたは私を傷けなかつた。
私はあなたを痛めなかつた。

あゝ!
二人はよこしまな制度の中で
あまりにも人間らしい人間であつた。

くことであらう。

　もし計數に細かい人がゐて、これら政治家とそれにたかる奸商、ブローカーの數と、かれらが利得してゐる金額とを丹念にしらべ上げることができたらどうであらう。その額は必ずや驚くべき額で、その全部が實に主として無産階級の支出によるものであることを知つた時に、國民は尙ほ晏如として彼等の跳梁にまかせて置くことができるであらうか。

　今月は尙外に論評すべき多くの問題を有してゐるのであるが、女人藝術社が小説號を刊行する爲めに社會時評を要しないといふ宣傳があつた爲め、材料はとり揃へて續いたのであつたが執筆する時間がない爲めに割愛しなくてはならないことゝなつた。愛讀者はその點を了承されんことを希望する。

社中の日記

一月九日

社の新年宴會が編輯室で催された。闇汁で意地の悪いものを持つて來た素川きぬ子餘程ひどいものとみえて後で買ひ直しに出かけた集つたのが上品な美しい物ばかり勿體ないから明汁にしちまへ。

城しづか空腹にきゆつとやつた一杯がきいて足元が定らず、(ほんとはとても強いはづなのに) 梯子段でどさりばたりと大さわぎ。

林芙美子御輿をすへてちびりちびり、うまいうまいとやつていたがやがて醉がまわるにつれて、テーブルの掃除をはじめる、綺麗でないと美味くないとこぼれたお酒をふくが手元がふら〳〵なので一方をふくと一方がこぼれる、どうどうめぐりの掃除に皆の腹の皮は完全によれて、息がつまりそう。

一月十一日

本日お鏡開き、社の二階の床の間の經一尺二寸の大重ねを割つて編輯室の大火鉢に大鍋をかけてお雜煮を作る。偶然に今井、新妻兩女史來られ一緒に舌づゝみを打つ。城しづか今日はもう飮まないわ決心したんですもの、(この決心九日に眼鏡こわしたからなるべし)

新妻女史ののどのさえに一つ感心した事がふえた。

一月二十五日

讀賣新聞社が編輯室の寫眞を撮りに來た。丁度發送でその樣子を撮つしていつた。夕方活動に行く事になり、雜誌を郵便局にはこんでそのまゝムサシノへ。熊馴しの娘で、山賊が娘共の髮をちよん切る、暗い中で誰か嘆息して「あゝいふ風にして斷髮になれば誰も文句は云ふまいになあ」は圖々しい。

歸りに素川と小池、高野フルーツパーラーで、之もムサシノ歸りの池谷氏夫妻に會ふと、「どうです、女人藝術と文藝春秋と一緒にムサンノでボードビルをしませんかきつとうけますよ」に成程之はいいと贊成。

一月二十七日

時雨女史と小池みどり、築地小劇場へ花園歌子氏の、講演とダンスの會に行く。銀座道を歩いたらどこかの大學生二人「女人藝術が歩いてらあ」に二人微苦笑。

不二屋でどんどん二階へあがつて行けば時雨女史、後から恥かしげについてあがり、「今の若い者は勇敢だ」としみじみ。

一月二十八日

雪だ、雪だ、すばらしい雪だ、眞白だ、あゝあの中でかけまわつたらいい氣持だらうな、口をあけて待つてゐると冷たさが一つ二つ舌の上にじゆんとしみる、何と云ふ快よさだ。

夜、編輯人一同左翼劇場に行く、ダントンの死、しかし死ぬ幕は取られてゐた。力強いダントン、あゝ熱中しちやつたと云つてた人がどこかにいたつけ。

『左翼劇場を見たのはこれが初めてだが「ダントン」の死を見て感心した。近頃での快い觀劇であつた。ダントンになつた佐々木孝丸氏の力強い調子が全體を引緊めたが、其他の數氏も強がりしてゐる。ことに嬉しかつたのは女優の粒の大きいことである。演伎はまだよいとはいはないがすこしの癖もない。既成劇場の何處で見ても女優はおちるのに此處では賴母しさを感じさせられた。おなじに育つてゆき、そして理解もおなじならば大丈夫だといふ事を敎へる。それにも一ツ氣持ちのよかつたのは、帝國議會などでは見られない熱が舞臺からもおし、觀客席からも押しかへすので演技以上のものを受取つた成功である。ホンヤク劇時代の築地を再び訪れた氣がした。佐々木氏は千田に似てゐる。』(S)

一月三十一日

議會傍聽いや見物だ、いつもの連中と平林たい子氏の新顏を加へて總勢九人、野次のかけ合ひは全く面白い、しかしあんまり度をすぎるとあきてねむいだけだ、女性に、はづかしい思ひをしのばせて催促させてやつときめるなんてしやくだよし六日にはうんとまたしちやへ。(以上小池みどり)

二月十一日

本鄕帝國佛敎靑年會館に「文藝戰線」の文藝講演會をきく。平林たい子病中だといへど意氣颯爽よろこばし。

文藝春秋對抗競技

女人藝術　文藝春秋　2—3



一月十八日、女人藝術社編輯室に於て、文藝春秋社對のカルタ會を催した。

午後三時になると、御大菊池寛氏は一族郎黨十人を引具して來られた。これに備ふるに女人藝術社では長谷川時雨女史を始として、編輯部の各氏及今井邦子氏、生田花世氏、長谷川春子氏など十數人を以てした。

先づカルタから始められた。先方は文藝春秋誌上でその名を鳴らしてゐる名手だこれを蹴散らさんとして向ふ此方はこれ又新進氣鋭の選手讀手は音斗朗々たる菅忠雄氏、今井邦子氏、大草實氏等だ。戰は勇しく開始された。一勝一敗。敵の強き者に菊池寛氏、花房滿三郎氏、池谷信三郎の諸氏あり、味方の中堅は小池みどり氏、城しづか氏、葵イツ子氏がある。三四回に渉る激しい接戰が行はれた。大體から云へば敵の方が少し許り強い。だがこれは、文藝春秋誌上でカルタの講義をしてる割には強くないことを讀者に含んで頂きたい。

此の戰ひに於て優越を感じた菊池寛氏すつかり欣んで、セスチユアプレイを提議す。先方から出た命題には「產兒制限」を長谷川春子氏に「貞操の定義」を大井幸子氏に「嘘と謎」を入木秋子氏に「傲れた弱味」を中本たか子等にセスチユアさせた解題の中心人物は時雨氏、春子氏、秋子氏であつた。

此方から出した命題は「迷信家」を西村晋一氏に「男は生めぬ」を池谷氏に「はらゝご」を菅氏に「乙姬大勢」を菊池氏にセスチユアさせた。先方は菊池氏や池谷氏などの遊び慣れた通人が中心になつて解くのだから、此方よりかなり上手だつた。このプレイは潔く勝を先方に讓る。これて、菊池氏が膝を滑らせては選手の方へゐざり寄つて行かれた所に、氏一流の風貌が現れて面白かつた。

次には車座になつて名指しを行つた。その次に行つたのは錢廻し。これは對抗した二列横隊が各側の中心より發した錢の在場所を探すのだ。これに於て先方では、永井龍男、橋本英吉氏など戰略的フエースが巧い。此方では春子氏、林芙美子氏、時雨氏など却々難解で敵を惱ませた。この遊びでは、味方が斷然勝を占めた。



各人の顔に昂奮の紅潮が漸次色を増し、疲勞の影が濃くなつて來たので休憩に移つた。雜談に和氣を深める者あり、唱歌して氣分を高める者あり、盃を舐めて靜かに風懷に低徊する者あり……。

この日、菊池氏と時雨女史とはすつかり大童になつて、絶えず遊戲の興味を反らさない樣に努力して下さつた事は、何より感謝に堪えない。大井幸子はゼスチュアで或種の魅力に富んで中々好評だつた。そして他の遊びに於いても大いにその面目を發揮して、文藝春秋の總勢を一手に受けて舌で活躍したのは目ざましかつた。林芙美子氏は酒を好む所に愛すべき點を發揮す。菊池氏より大岡主命と命名された、菊地氏※布袋の尊號を買ふ。

厭味なく、そして團體的行動に洗練された會合であつた。これはこの會の特徴で、且誇りである。やつと時間に氣づいて振りかへつたのが十時。此處に於て、和氣を惜しみつゝ散會した。(中本たか子)

二月六日五時迄にポントンへ、と云ふに着いたのが六時半すぎ。春秋社の連中のふん慨振。よほどお腹がすいたと見えて、成程！。時雨女史すまして校正をしていたものだから、と云へば菅忠雄、何だひどい奴校正をしてたのかとあきれる。

藝術社の大家三上氏春秋社の連中に女人藝術の番頭だと云はれて「俺もとうとう手代にされつちやつた」と怒る。今日の競技に女人藝術社から呈出する「マッチの捧の豆はこび」にどうでも勝ちたいと食事中前の皿のフライビンズを稽古臺にする尾上菊子と小池みどり向ふ側の永井龍男負けじと眞似て妙な手つきをしてゐる内に病膏肓に入って、ナイフを持ち上げたり、スプーンをはこんだり、他の連中今にもガチャンとやらないかとハラハラする。本競技に終りまで殘つた西村晋一男のくせに妙にきようでひよい／＼と豆を皿に入れる。女人負けるかと一時どきりとしたが、城しづかとの決勝にやはり男はまけてぺしやんこ。

近藤經一のかるた、震災後はじめてだと云ふが昔北寮一番の二階でならしたと云ふだけに仲々あざやか、菊池寛二度目にはすつかりのぼせて頭にコップの水をかけてはとる樣子がとてもおかしい。

今日はかるたも女人の勝、善き哉、善き哉。

望月百合子の甲州音頭、古川緑波のはやり歌の餘興終り、三上氏音頭をとつて文藝春秋社萬歲を三唱。春秋社から女人藝術萬歲をおくられて散會十時半。林ふみ子醉つて憂うつになり、八木秋子見事によつてしまつた。(みどり)

婦人彙報

△結婚斡旋部

救世軍では多年「婦人救濟部」の名によつて多數の娼妓に自由廢業をさせてゐるが、最近はその懐に飛び込んで來る娼妓が多くなり、本年だけで八十餘名もあつた。この婦人救濟を、なほも徹底的にするため、今度よりは「結婚斡旋部」を設け可成的、結婚させる方針だといふ。

△無産婦人團體と市議戰

新選擧法による東京市議選擧には、既成政黨の不信用に乘じ、一擧に自治體の中に乘出さんとする各無産政黨では、自黨所屬の最有力者を立候補すべく、それぞれ異常な準備を續けつつあるが、社會民衆黨の支持の社會民衆婦人同盟では中央執行委員長の山田やす子女史をはじめ、赤松明子、赤松常子、小島よし子等の各幹部、總同盟系の勞働婦人も陣頭に起つべく大衆黨支持の全國婦人同盟からは岩内とみえ、織本貞代、菊川靜子北村靜子等の若い婦人連が盛んに起ち、勞働婦人同盟からは、山内とみえ、田島ひで子、柳つる子、一林つる子等の一流鬪士連が乘出す答で準備中である。

△婦人無産團體合同協議

日本大衆黨成立に起因する全國無産婦人同盟（舊日勞黨系）と無産婦人聯盟（舊無産大衆系）兩婦人團體の合同計畫について双方の意向次第に接近し、一月十四日午後六時から赤坂溜池ビル内で交渉小委員會を開いた結果、十五日午後六時から本郷赤門前「はいじん」で第一回の合同協議會を開くことになつた。

△婦選尚早

全國町村長會第九回定期總會が一月二十七日午前十時半より鐵道協會に於いて開會、その時に議題となつた婦人に公民權を付與する件についての可否は、甲論乙駁の後、時期尚早とされた。

△政府と婦人公民權案

衆議員各派有志から提出された婦人公民權賦與案が衆議員を通過する場合には、政府や與黨幹部が豫期せるごとく、貴族院の握り潰しで解決するものでなく、兩院協議會で貴衆兩院の正面衝突は免れがたいこととなるので、政府は俄に狼狽の態である。

△派出婦取締規則改正

從來の派出婦取締規則は困苦しくて、殿しすぎるといふやうな非難もあるので、警視廳では規則改正をした。一、夫の承諾を得ずとも派出婦たり得ること（夫の失そう、または夫と別居して、やむを得ぬ事情にあつて、その承諾を得る事が不可能の場合）二、客席へ侍らせぬ條件で下宿旅館料理店等へも派出し得るやうになること等がその眼目となつてゐる。又不都合のあつた場合、從來過料乃至警告處分程度ですましてゐたものも今度は營業停止乃至解散命令を以つてするやうになる模樣である。

△わが國最初の女高商

東京で唯一の女子商業學校（嘉悦孝子女史經營）は、女子高等商業學校を計畫中であつたが、いよいよ敷地も女子商業の隣に定まり目下新築計畫中である。開校は三月の豫定。

△女飛行士魚群を見る

今度、靜岡縣水産課では魚の群を發見するために四月から八月まで、海上飛行をすることになつたので、八丈島の三根港の海軍飛行場使用を願出たが、この選まれた女流飛行士は雲井龍子さんだつた。

△コレット女史勲章を受く

深尾須磨子女史譯の「紫の戀」によつて最近人も知るところのフランスの女流作家コレット女史は今度、レジヨン・ドンノール勲章を授與された。

△音樂と舞踊で新教育

東京音樂學校の教授マルソレフ女史は「從來のやうに、たゞ曲譜をたどつて行くのでなく、その中に秘められてゐる魂にぶつかり、それが自然に肉體を通じて律動的に表れるのをそのまま表現する」といふことに重きを置き、シユタイナー博士に共鳴するところの新教音法をもつて、音樂と舞踊との融合的效果をあげつつありといふ。

△鳥の放火

ユーモア小品――宮城縣石卷町の大工、松本庄七方の屋根がぼつぼと燒け出した。付近の墓地から鳥の群が線香をくわへて來て落したとわかるや、庄七大いに怒り、火傷の烏一羽引とらへて石卷署につき出したりと。

△リンカーン賞當選者

アメリカ・セントラルフィールドのリンカーン協會のリンカーン賞第三回懸賞英文募集に對し、日米協會では、日本學生の應募原稿の中から、津田英學塾の三年生德

田鶴子が一等を得た。

△櫻井女塾々長かはる

故櫻井ちか子女史の令孃で、文學士倉辻白蛇氏夫人富貴子女史は今度櫻井女塾の後を引受けることになつた。

△川村女學院の擴張

川村女學院に於ては高等專攻科を設置する事となり、五十萬圓の淨財を募集して、校舍の新築をはかることとなつたといふ。

△婦選案賛成者百四十八名

婦人公民權に關し、政友會の有志代議士は、井上、福井、今井、兒島、兒島の五名を提案者とし、百四十八名の賛成署名を得て、婦人公民權に關する地方制度改正案を一月二十五日衆議院へ提出した

△職業を求める婦人の群

學窓を巣立つ若い婦人が職業を求めて街頭へと出て行く數は本年もまた夥しい統計を示してゐる。中央職業紹介所で昨年扱つた女子求職者數は六、一三四名、うち女學校出が一、五二五名、就職者が總計一、五八九名、中女學校出は二〇三名、今年一月中の女子求職者四一三名中高女出の一三〇名はまだ十五名しか就職出來てゐないが、職を求める方はいづれも年々三割の増加を示してゐる。

△櫻楓會消費組合の事業

昨年の九月に「有限責任信用購賣販賣利用組合」の名前で許可された櫻楓會の消費組合は、長谷川きぬ子氏を理事として活躍してゐるが、現在では櫻楓會員だけが利用できるので東京市内外の會員約千二十名ほどのために内職を探し内職の道具を買ふことの出來ない人のために、利用部でミシン其他の設備をし生産することが出來る。そして利用部で作り上げたものは販賣部の方に廻して組合員の需要に待ち、十錢以上の貯金をしてゐる。

△勇壯な女飛行家

有名な英國婦人飛行家エープ・ベイレー夫人は今度ロンドン、ケープタウン間一萬八千哩の往復飛行を實行して無事歸還した。同夫人は昨年三月九日モス式飛行機に搭乘し單獨で南阿のケープタウンへ向けロンドンを出發歸還飛行に成功した人である。

△婦人參政の手見せ

東京商工會議所の議員改選は二月廿一日に行はれるが、婦人に經濟上の參政權を獲得した先驅として同日は婦人が投票する。この選擧の資格は資本金五十萬圓以上東京市内に二ヶ年以上引きつゞき營業し、營業收益税五十圓以上を納めること、制限は男子と同じで有權者總數一萬二千四千人近い中に百人未滿といふ割合、貸席業、料理店、旅館といふ順序であることは注目すべきである。

△一九三〇年協會の花形

帝展、二科、春陽會各派の新進を會員とした一九三〇年協會は一月十五日から三十日まで上野の府美術館で第四回展覽會を催した。入選二百七十點女性では野口米次郎氏令孃一二三さん、泉二美智子氏大山郁夫氏夫人柳子さん、西脇マージョリ夫人、馬淵美意子氏等があり故佐伯祐三氏未亡人米子さんの五點は全部入選となつた。

△日本史研究にロシア婦人來朝

さきに、ロシア婦人アンナ・グルスキナ女史が萬葉集等、日本古典文學研究に來朝したが、今般再び若く美しきロシア女性を迎へた。ヴエラーさんといふ、芝生れの江戸ッ兒である。レニングラードの東洋學院日本語科を出て、日本歴史――主に徳川時代のものを――專門の博士について研究したいとのこと。因に、同女史は府下世田ヶ谷二四五〇大竹博吉氏宅に寄留してゐる。

△聯合婦人會の市政淨化運動

東京聯合婦人會では、市政淨化運動の具體的方法を協議する爲、二月十二日午後七時から、吉岡彌生女史邸に集會した。日本女醫會、婦人ホーム、婦選獲得同盟、至誠會外各婦人團體の代表者二十數氏會合、種々協議の結果、ポスター製作費の醵金百圓なにがしも集り、早速大々的運動開始する事になつた。

協議事項

一、候補者を選擇し研究する事、
一、有權者の棄權防止、
一、ポスターを作製し市内八十ヶ所に設置すること、
一、右費用は委員より醵金すること、
一、該運動に專任する委員の運動費を東京聯合婦人會員より募集すること、
一、對市政淨化演説會を開催すること、

編輯後記

戀愛は美しいものだといふ人があります。戀愛はおつかないものだといふ人もあります。自傳的戀愛小說號の外部からの最初の素晴らしい人氣は、先づ印刷所から揚りました、次の社會を約束された勞働者の中でも、最も知識的先進的だと云はれてゐる印刷所の人達は、本號のゲラ刷りをまわして十錢づゝで、囘讀して歎聲を上げたといふ事です。雜誌が市場へ出た時のことが思ひやられます。今朝はもう東向きの障子の破れがビビ：：：：と風に鳴つてゐました春がやつて來ます。（素子）

どことなく春めいて來た昨日今日の陽ざしの中に足の霜やけのかゆいこと。

青い空に、二月の風に吹きちぎられた白雲が浮いてゐる。あゝ春が來た、青空にちぎれ雲が浮いてゐるもの。春の花より早くすばらしい「自傳的戀愛小說號」が街の中にぱつと咲きみだれる。何て素晴らしい存在だらう。あらゆる人々よ、目をみはり、胸を開きこのよき戀愛號の匂を吸ひ、色を愛でられよ。私達は大きな誇と自信を以て三月號を、批判と興味の市場に送り出せる事を悅ぶ。（みどり）

「戀愛は人生に於て果實のやうな存在である」見よ。この誌上食卓に並べられた果實の數々を。オランダ皿に盛られた莓、銀皿の上の林檎。葡萄の槃、梨のつぶては失戀小說で、柿はプロレタリアの戀臺灣產のパパイヤは本號小說中の異色「ドルメンの上の謎」にたとへられよう。とまれ、この豐富な食卓を、諸氏よ、ほしいまゝにむさぼり給へ。（城）

女人藝術はだんだん愛讀者が殖へて行くこと素晴しい程で、皆希望に燃てゐます。それで愛讀者の皆樣の親しみと團結の爲に今編輯室では何等かの會を作らうといふ計畫があります。支部を作りますとか、講演部を社に設けて御希望に依ましては此方から講演者が遠く出向く事ですとか、皆樣の御動靜やら御感想やらをのせ、または質疑應答のために特別の欄をもうけ度いと思ひましたり、詳しい事は四月號に發表したいと申して居りますがオール女性の歌と共に、皆樣に括目して待つていたゞけるものと信じてゐます。（八木）

早春の街の裝飾は櫻色と草色に彩られる。女の描く戀愛も、可愛らしい薄桃色に、さみどりに、菫草の紫に多く取りあつかはれて來た。だがこの自傳的戀愛號にはそんな雛祭じみた遊びはなく、女性の眞の姿を書かうとしてゐる。その熾烈さを或は概念的だといふかも知れないが、それは噓だと思ふ。裝飾された技巧の在來のそれではない。心のベエールを脫ぎすてた眞の叫びである。

猶「新女性進出の歌」は、我々微々たるものの計畫とせず、廣き〱心をもつて奮つて應募され、時代を劃する名篇をよせられ、新日本新女性の全てが高らかに明らかに唱はれる日のあることを祈つてやみません。（時雨）

戀愛小說號などといふと、概念的に惡趣味だと嫌つてしまふ人もあるが、それはその作者の態度如何にかゝつてゐる問題です。本誌の戀愛小說は、みな、眞面目な態度で書かれてゐるので、立派なものばかりです。

他の經驗はさておいて、恐らく戀愛の經驗のない人は少いでせう。そこで、自傳的戀愛號にして筆を揃へて執筆して頂いたのが本誌の內容です。現代の女性の戀愛の諸相を知る上にもよい研究の資料です。御愛讀を乞ふ。（かど江）

三月號は『自傳的戀愛小說號』と銘打つて、ひとつぱつと花の開くやうに女人藝術の華を見せたいものだといふプランが立てられ、寄稿をたのんでからの編輯室の空氣も一段と活氣立つた。妙なものである。それからといふもの一つ又一つ、時には四つ七つと稿の集る毎にたのしみはまし、緊張の度は強くなつて、中にも時雨女史のその稿を大切にすることにここにして、その出來上りを嬉しい期待をもつて、語り合ふ有樣、かくして本誌は生れたのである。みだらなのも戀、眞實なのも戀、神聖の祭壇にかつぎあげて、人にも云はじとするのも戀、さらさらと日常生活のうるほひにとりあつかふのも戀、人はさまざま戀もさまざま、この人生の彩りには興味津々たるものがあらう。（花世）

女人藝術定價表

	定價	送料
一部	四拾錢	一錢五厘
六部	二圓參拾錢	
十二部	四圓五拾錢	

△誌代の拂込みは成可く振替を利用して下さい。
△郵券御手代用は一割增の事。

昭和四年二月十七日印刷
昭和四年三月一日發行
（每月一回　一日發行）

發行者　長谷川時雨
編輯者　素川絹子
印刷者　生田花世
印刷所　日清印刷株式會社
東京市牛込區左內町三十一
發行所　女人藝術社
電話牛込(34)一七八九
振替東京　七五八二五

大賣捌　東京堂　大東館　北隆館　東海堂

ヴァン・ルーン著

神近市子譯

上下二册

世界人類物語

定價（各）壹圓
送料（各）十二錢

平易な述説と、豐富な優れた挿繪とをもつて、興味深く正確に、そして新らしい意味に於いて、この書は、われわれに、世界をもう一度見直させ、經驗させる。

このお話をしてゐるやうな面白い世界史は、實に驚嘆に値する世界歴史の一覽表であり、著者自身の手で描かれた多數い挿繪によつて、他のいかなる歴史書にも發見出來ない、魅力と教訓の二つを併せ持つてゐる。而もこれは單なる年代記としての「歴史」ではない、人間の「生活」の一部としての「歴史」がかゝれてゐる。それは、ナポレオン出現の意義を決定する時に、シユウマンの「二人の擲彈兵」の歌をも見逃さず、深いメスによつて一切の出來事を整理してゐる。「歴史は大きな經驗の塔である。」深い觀點から興豐富にかゝれた、この「新らしい塔」は、星變り物遷つて幾多の風雪に見舞はれようとも、毅然として斯界にそびゆる不朽のものであるだらう。

〔普及版家庭文學名著選〕

東京市麴町區内山下町一ノ一
春秋社
振替東京
電話銀座
二五五 四六六 八 六五五 一二三

長谷川春子畫集

武者小路實篤氏
堀口大學氏
內藤辰雄氏
田口省吾氏
石渡山達氏
序

原色版七葉入
裝幀　長谷川春子
定價　九拾五錢

武者小路實篤氏…長谷川春子氏の畫はまだ不完成品だが、ともかく心の動きに生々した所がある。又いゝものを愛する純情がある。又とらはれてゐない自由さがある。氏は之からます〳〵あらゆる意味で鍛えられ成長してゆくことゝ思ふが、この古い古い衣をぬぎすてゝ新しい決心でものゝ見方、かき方表現の仕方を會得して氏の內にある美にたいする純情がます〳〵形をとつて豐かにあらはれることをのぞんでゐる。

堀口大學氏…詩人でしかない私には、あたのやうに、やさしい女ごころの畫人が、かうして新味あるもののあはれを示して下さることは稀なよろこびの一つです。あなたの畫に一番よく似たものをたづねると、私の目には、踊る女と熱帶の色鳥とが浮んで來る。踊る女はそのなよやかなムウヴマンの爲め、色鳥はその新鮮の色調の爲め。

內藤辰雄氏…だが、この人は天才病に罹つてゐる。これは天才病に罹つてゐる人だ。感激、飛躍、幻想、非凡などを生の儘表現したがつて許りゐる、何だか平凡な愚劣な畫家に復讐でもするかのやうに。『君よ、『冷靜』『着實』(それを君は捉へてはゐるのだが)を、下を透して見えるだけにその非凡の上におかけなさい』といひたくなつて來る。若し、この作者に現在以上のがあれば、これからは平凡化して來るだらう。

(發賣元東京市日本橋濱通三丁目二ノ六)　東雲堂

發行所　東京市牛込區左內町三一　女人藝術社　振替東京七五八二五

CAFE

主演 井上正夫
栗島すみ子孃

黄昏の誘惑

監督 池田義信

原作脚色・小田喬
撮影 濱村義康

松竹キネマ
特作映画